

のである。

この鐵道線はたゞに民族の區界線となつてゐるのみならず、更に自然地理學上から見ても、また大に意味を異にして居る。即ちその東部は、長白山系のバザルト系の山岳が重疊し、或はバザルト式の一種特別なる臺地を形成して居るに拘はらず、その西部はこれに反し、平坦なる蒙古平野となつて、東ゴビ沙漠地帯を形成し、これが興安嶺にまで延長し、尙ほこの状態は遠く西ゴビにまで及んで居る。これ等の二大地理學的變化は、殆んどまた以上鐵道線によつて區界せられて居るのも面白いことゝ云はねばならぬ。

斯くの如き地理學的相違は、これまた民族上の相違と關係するもので、即ち東部山岳地帯はツングース民族の古來劇を演じた舞臺で、西部沙漠地帯は古來またモンゴル民族の劇を演じた舞臺である。斯くの如き地理學的環境はこれ等兩民族の氣質や風俗習慣の上に著しい影響を與へ、自づから兩者の土

俗學 (Ethnography) に各々得意の現象を呈せしめて居るのであつて、一は狩獵を主とし、一は牧畜を主とするのはその最も面白い現象であらねばならぬ。

更に以上の民族を考古學 (Archaeology) の上から見ると、頗る興味あるものであつて、この兩者の相違ある遺蹟・遺物の存在を見、更に兩者が互に接觸混合して居る状態もまた認め得るのである。這は有史以前から原史時代に入り、更に歴史時代に通じて、頗る面白い事實を示して居るのである。

さて今茲で先づ、彼等の歴史時代に於ける代表的三大遺蹟とは、抑もどんなものであるかといふに、それは北滿洲に於ける渤海の上京・金の上京および東蒙古に於ける遼の上京(或は行宮)等の遺蹟である。そこで私はこれから以上三代表的遺蹟に就て、考古學的・文化史的にこれを記述して見たい。

高句麗の如きも、もとの王都は鴨綠江の北岸滿洲の地で此處もまた代表すべき所である。けれどもこれは今しばらく取除いた。これは他日また別に

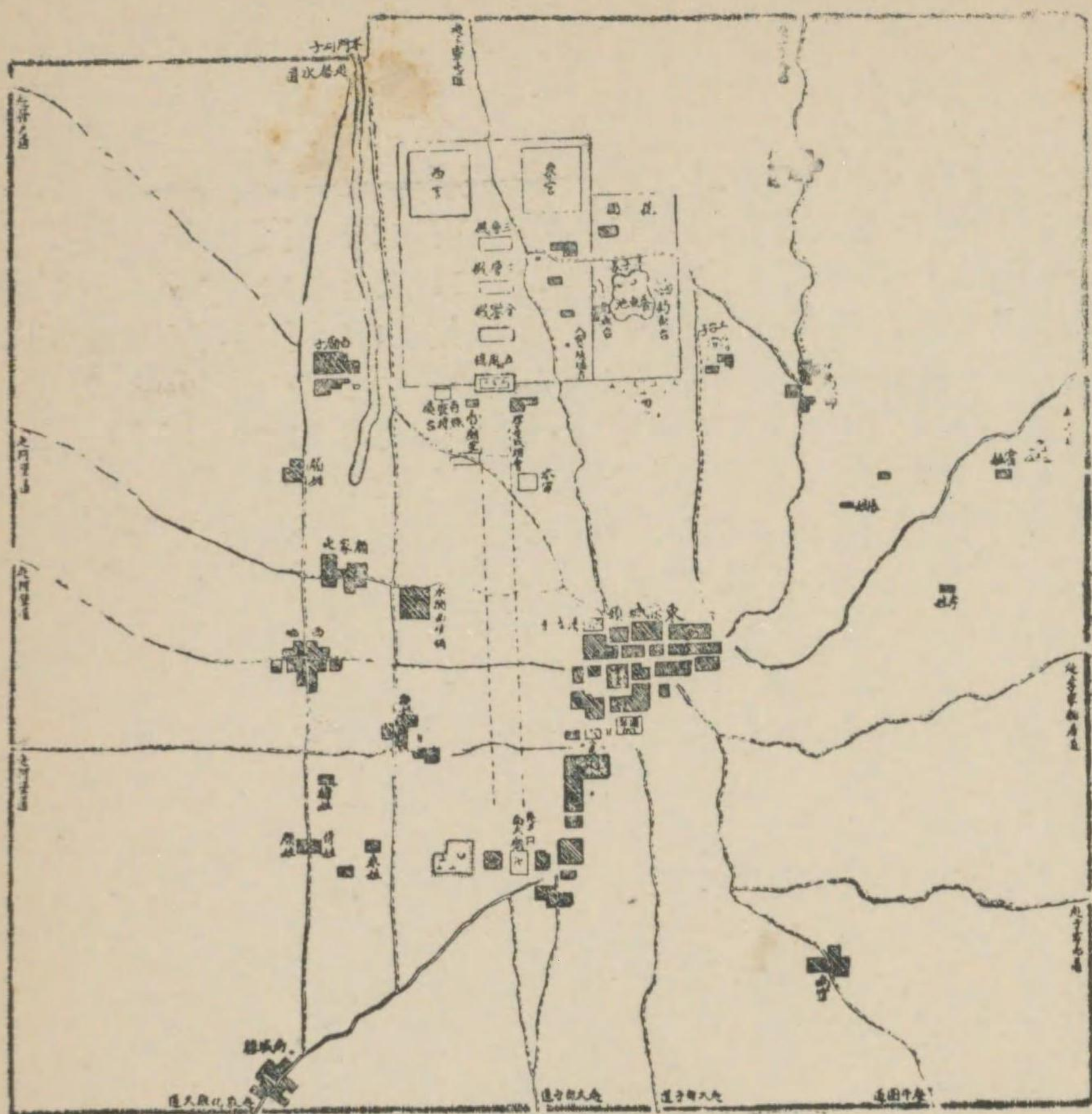
記述して見たい。

(二) 渤海の上京遺蹟

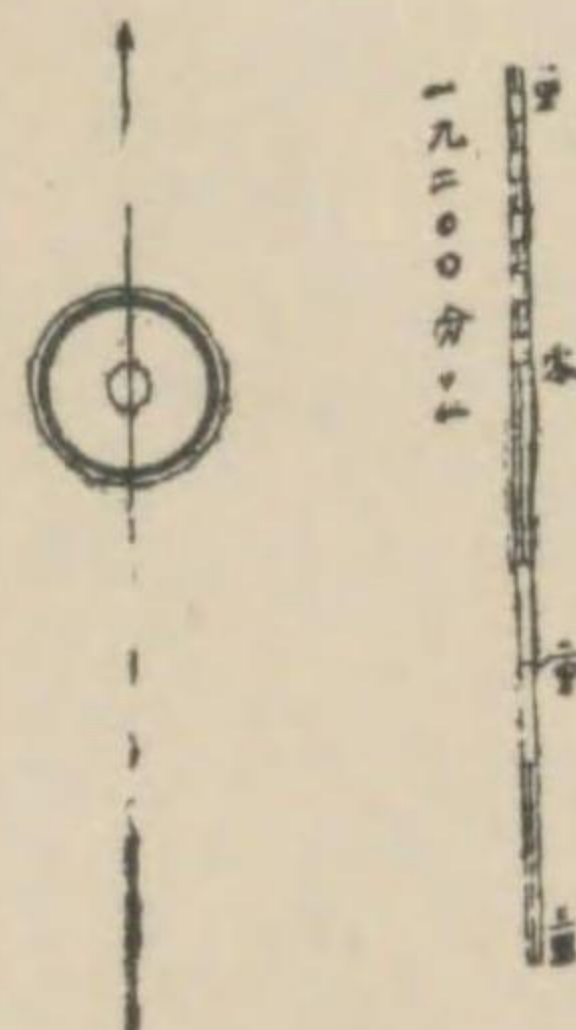
古來、長白山を中心として、それから流るゝ松花江・豆満江・鴨綠江等の流域一帯に居住したツングース民族は、はやくから漢族やその他の文化を吸収したのみならず、また政治的能力を有するもので、古くから東北方に於て優勢なる王朝を建設した。即ち彼の高句麗の如き、渤海の如き、金の如きがこれで、近代に於ては彼の滿洲の如き、またこの例を示す雄辯なものである。更に彼の百濟の如き、將又新羅の如きもまたその例であると云はねばならぬ。私は今これ等のうちから一つ、茲に渤海を選んで、考古學的と文化史的の上から聊かこれを記述することにしやう。

抑も渤海と云ふのは、もと長白山の北部や松花江上流地方に生活して居つ

唐代渤海國上京龍泉府圖



古	長	古	上	龍	泉	府	城	宮	廟	塔	碑	墓	石	壘	壘
城	子	城	京	府	城	宮	廟	塔	碑	墓	石	壘	壘	壘	壘
城	子	城	京	府	城	宮	廟	塔	碑	墓	石	壘	壘	壘	壘
城	子	城	京	府	城	宮	廟	塔	碑	墓	石	壘	壘	壘	壘



たツングース民族たる靺鞨と、鴨綠江畔から興つた同族の高句麗の敗殘者等の集合して出來た王朝である。これ等の靺鞨はすでに隨唐の文化を吸收採用するだけの程度に達して居つたが、これは既に已に隨唐以前から漢族の文化等を採用して居つた高句麗のこれに投合したから、是に於てか、長白山の北松花江の上流地に渤海といふ王朝を建設したのである。

渤海の文化はすでに自から程度も高くなつて居つたであらうし、また固より漢族のそれを採用したであらうが、彼等の文化は亦西方にある土耳其民族(Turks)たる突厥の分子も包含せられて居るらしい。這是今日私の興味をもつて研究して居る所である。當時突厥王朝はバイカル湖中に流るゝオルコン河畔のカラコルム(和林)に居城したものであつて、彼等の政治や文化は當時東蒙古一帯にも及んで居つた。渤海の如きその最初に於ては以上のカラコルムの王朝と互に往來したものである。然るに東蒙古に一度契丹が勢力

を擧げ來るに及んで、兩者の交通道路は中絶せられ、是に於てか、兩者間の交通は絶えて仕舞つたのである。斯くの如き事實は、渤海と突厥との關係を語るものであらねばならぬ。この兩者の事實に就て證明すべき材料は敢て少なくない。また彼等は朝鮮に接し、更に我が奈良朝から平安朝の文化に接したから、是に於てか、更に一層面白い社會狀態を呈して來たのである。

渤海はもと靺鞨であるから、弓箭に長じ、戰鬥を好む的性格、土俗であらねばならぬのであるが、彼等は敢てこれをせないで、専ら當時の隨唐の柔弱なる文人を以て自から任じて居つたのである。これは彼等にして中流以上のものは、いづれも詩を賦し、文を玩んだのである。我が日本に來た彼等使節の如き、何人も詩や文の出來ないものはなく、常に我が文人とこの詩文を通じて交つて居つたものである。渤海は最初少し許りその附近を征服したことがあつたが、その後は絶えて斯かる征服の事はなかつたのである。これを以て考

へても、彼等がいかに當時の文化民族であつたか、知られる。而かも彼等の地が松花江の上流であるのは、また最も興味をひくではないか。

彼等の當時の政治的組織は、五京・十四府・六十六州・一郡・一寨・百三十八縣・副員五千餘里であつて、その區域は松花江上流地點から、一方朝鮮江原道北部に及び、全平安道から南滿洲にまで及んで居る。そしてその都城たる上京は、今日吉林省安寧縣(寧古塔)下の牡丹江畔にあつたのである。私はこの都城に就て記して見たい。

渤海の上京は、寧安縣治(寧古塔)のある所から南七里許りの所にあつて、今日は此處を東京城と稱して居る。位置は牡丹江畔のバザルトから形成せらるゝ頗る廣い臺地の上に存在し、山影は遠くその周圍に展望せらるゝのみである。誠や此處の故都は周圍に近く山岳なく、僅に江水や城下の底地で守備せられて居るのみで、その土地の廣大なる中に、獨り渤海上京の存在して居る状

態は、そゞろに彼の洛陽・長安のそれを聯想せらるゝのであつて、彼等がいかに隋唐の帝都の地形をあてがれて居つたかを推知することが出来る。

この故都は殆んど四角形であつて、近頃吉林陸軍將辨學堂員傳明毓氏の測量する所によると、その東西の長さは九清里(一、一五二)で、南北は九清里弱である。城壁は今日は恰かも土城の如く見えるけれども、よくこれを見ると、昔は築土の外面にバザルトの岩石を博形に割つてこれを博の如く積み重ねたものである。それは尙ほその原形を窺ふ所が残つて居る。城門は各所に設けられ、昔の宮殿の跡は稍や北壁によつた所に設けられ、その位置は高くなり、今も尙ほその石礎も残つて居る。このあたりには他に建物の跡や池などの跡もある。そして以上の高臺から南門の方に向つて一筋の道路が通じ、その南門に近い所に寺院の趾がある。

城内の或部分は、稍や中央にある所に、現今の東京城の田舎式の小市街が出来て居るが、その外は概ね畑となり、畑中に石臼・石礎・瓦片などが散亂し、そゞろに當時城内の生活をしのばしめる。これ等は當時臣下や、その他の者の住居趾であつたであらう。

城内には古瓦が散亂して居るが、殊に宮殿の趾附近が最も多く残つて居る。私は此處を發掘して少し許りこれを採集した。これ等の瓦には緑・黄色のものもあり、文字を刻したのものもあり、丸瓦には却々面白いものがある。北門に近い所の宮殿の下に、今日一小廟や一小學堂が設けられて居るが、此處には發掘した佛像や兜なども保存せられて居る。尙ほ南門に近い所の古い寺院の趾には石造物で聊か見るべきものがある。

渤海及びその内城の状態は實に以上の如くであるが、これ等は彼等の當時を窺ふべき大切な資料である。斯くの如き文化の花が松花江の上流地方に咲いて居つたことは、誠に不可思議な様な氣がするのである。そして此處

より我が奈良朝から平安朝にかけて使節を送り、また日本からも此處に使節を送つて來たといふことは、實になつかしい氣がする。

(三) 遼の上京遺蹟

遼は即ち契丹人の國を立てた時の名である。彼等は今日の蒙古人の祖先であつて、古くから興安嶺附近・シラムレン河・老哈河等の地に居住したものであるが、一度その太祖阿保機に至つて勢力を得、附近一帯を征服し、是に於てか遼の王國(彼等は皇帝と稱して居つた)を創立するに至つた。渤海王朝もまた彼等によつて滅亡された。彼等は先づ天成元年に扶餘城に來寇し、更にその二年にこの城を攻拔し、更に進んで渤海上京を圍んで亡ぼしたのである。當時の渤海は文弱に流れ、文化人であつたから到底契丹人の敵ではなかつた。そして契丹人は渤海人を多く捕虜として、遼の上京附近に伴なひ行き、鍛冶屋

や車作りなどの業に従事せしめた。這是契丹人が渤海人の文化を愛して、これを己が地に移さしめたのである。

遼の勃興は實にすさまじいものであつて、その附近の民族は殆んど彼等に統一せられ、これが爲めに西方の突厥、南方の漢族、東方の朝鮮も誠に氣の毒な位置に立つことゝなつた。遼の文化はこれ等の影響を受け、また深い關係を有するものである。殊に政治上や軍團上の組織活動は實に美事なるものであるが、これ等は亡命や不平の漢人等のひそかに此處に投入し來つて、その事業を助力したのである。契丹人は斯くの如く己の武力と漢人等の智力とがこれを合成し、遂に優勢なる遼國を形成したのである。そしてその勢力の及ぶ地帯は、決して彼の渤海朝などの比較にはならない。

然らば當時太祖やその次の王などの居城は何處であつたかと云ふに、這是今日の東蒙古巴林^{バリン}蒙古であつて、位置は西に興安嶺の山脈を控へ、東南はシラ

ムレン河畔に面した所にある。尙ほ精しく細かく云ふと、抑も上京は後に丘陵的小山を控へ、左右に各々一河が流れて合流して居つた。この合流はシラムレン河に流れる。要害は頗るよろしく、這は彼の牡丹江畔の渤海城などの遠く及ぶ所ではない。斯くの如く左右と前に水あり、後に山を背負へる状態は彼等契丹人の最も好む所である。

遼の上京の城壁は太陽に乾しかはかした土博で築いたもので、各所に城門があつて、規模は頗る大きい。城門には二重門を設けて居る。

城内には後の方に高臺を設け、此處が皇帝のいます所であつて、黄緑の瓦が散亂して居る。城内の各所には宮殿・寺院の趾があり、その他臣下の居住した所には大石臼や石臼等が残つて居る。また大きな石の觀音菩薩の像も昔をかたらまほしい様に立つて居る。城外の左右には博塔が各々建てられて居るが、今はその中の一基が僅かに残つて居るのみである。この塔は博から出

來て居るが、それに赤色花崗岩片に佛菩薩・天人力士等の像を牛肉彫に彫刻したものを漆喰で附着せしめてあるが、これがその重量のために落ちて地上に散亂して居るのを認める。

以上は遼の上京であるが、此處は今や全く無人の境と變じ、僅かに城外に蒙古人が二三テントを張つて居るのみである。私は此處に來つて遼の當時とその勢力を追想すると、實に今昔の感にたへないのである。斯る有様を見るにつけ、英雄やさては人間の事どもは何だか夢の中に生活して居る様に考へ得るのである。

遼の遺趾は、更にシラムレン河に流るチャガンレン白河の上流にも、行宮の趾が残つて居る。此處も土博の大きな城壁が圍み、その中に宮殿・寺院の残り物がある。碑文の破片や臺石も残つて居る。尙ほ此處に大きな博塔が一基立つて居るが、これが白く塗られて居るから、これを蒙古人はチャガンサバラガ即ち白塔

と稱し、これが遂に地名ともなつて居る。また漢名で白塔子と云ふ。

以上、上京や行宮を中心として、東蒙古一帯には遼時代の小さい城や居住跡が各地に存在して居る。遼の中京は東喀喇沁蒙古にあつて、此處も土博の城で博塔も立つて居る。これ等は彼の錦州の塔を始め今日滿洲に存在する遼陽鐵嶺その他の博塔は殆んど總て遼時代の寺院の跡である。また滿洲の古城も大抵これである。斯く記して來ると、これ等の遺跡を知るには必ずや東蒙古にある遼の上京を知らねばならぬのである。以ていかに彼等の當時盛大であつたかは今から推知することが出来るであらう。

當時遼の盛大な上京、その他の繁昌して居つた状態は『遼史』『契丹國志』を始めとし、宋人の紀行文等を見ても大概は知れるが、殊に考古學上の事實はこれをよく證明して居るのである。

先づ彼等の文化を見るに、云ふまでもなく漢人のそれである。けれども彼

等の文化は各方面から見ると、實に頗る興味あるものが敢て少くない。今茲でその一つ二つを列擧して見やう。

滿洲各地の遼時代の遺跡に、多角形の石面に勝尊陀羅尼を彫刻して居るのを發見するが、これと同一なものはその行宮にもある。尙ほこれと關聯して頗る興味あるのは、大日如來の像の存在である。私は此處を探查した際に、以上に記した上京の塔の赤色花崗石の彫刻中に、大日如來の首部の破片を發見した。これは五智の寶冠をいただいて居る。この尊像のあるのを見ると、當時の遼には明かに眞言宗II密教の布教して居つたことを物語るものである。然るに支那や突厥や渤海朝鮮と接觸する關係上、また佛教も這入つて來たが、そのうちに密教の這入つて居るのは最も注意をひく。殊に俗人はその加持祈禱に重きを置いたのであつて、この點に於て固有のシャーマン教も密教も變

つた所はない。這は恰かも我が平安朝に於けるそれと少しも變りはない。遼にすでに斯る事實があつたとせば、彼の蒙古人の元朝が西藏から喇嘛教を入れたのは、すでに同族の遼がその先驅をなせるものと云はねばならぬ。

更に私は同塔の下で、赤色花崗石の天人の彫刻を得たが、その天人には羽根が生えて居る。私は支那日本の天人の經典等、法苑珠林の天人部などを参考とした始め、その有形美術で見ても、柔かな薄い軽いヒレの美しくとんで居るのを知つて居るが、未だ迦陵嚩伽の外、羽根を有つて居る天人を見たことはない。然るに遼の天人には羽根が生えて居る。這は彼のフツセ氏等が圖記せられたガンダラ式天人と何等か關係があるらしく、尙ほスタイン氏が支那土其斯坦で發見した羽の生えて居る童形の像もまた比較すべきである。グリオンウエーデル氏やルコツク氏などによれば、北部佛教の肖像に羽根のあるのはこれ多く波斯の影響であると云はれたのは、誠に左様であると思はれる。

のである。然るに今や遼の天人もこの形式がある、これ等は大に研究すべきものである。

以上の如く記るして來ると、遼の初期の文化は支那のみならず、尙ほ西の方のものも存在して居ることが知れる。これ等は私は突厥との影響と見たいのである。

尙ほ近頃滿洲の鞍山附近に發見せらるゝ綠泥片岩の表面に、半肉彫に彫刻して居る人物風俗を示せる畫像石があるが、その圖様はまた遼の初期のものらしく思はれ、而かもこれが所謂 *Mohamedan-persian period* と稱する範圍の圖様に類似して居るのである。私はこれ等の關係に就ては他日更めて記して見たい。

(四) 金上京の遺蹟

遼は東北方で優勢の位置に立つて、却々よく活動して居つたが、茲に遼に對抗する大きな大敵が現はれて來た。これは即ち金の勃興である。金はツングース民族たる女真人(女眞)の建設した王國で、その太祖は生女眞の阿骨打である。

女眞は渤海の時には、これに附屬して居つたが、遼が渤海を滅亡するに至つて、之に屬して居つた。然るに生女眞の堯顔部に阿骨打が生れ、長ずるに及んで頗る雄略武力あり、遂に松花江一帯を統一し、自から皇帝と稱した。彼は軍隊をもつて遼の各城を抜き、尙ほ進んで東蒙古にある遼の上京を攻め、遼を滅亡せしむるに至つたのである。斯くして金は遼に代つて蒙古や滿洲(後に支那にも)に君臨することゝなつた。

金太祖の興り金朝を建設した當時の都城(上京)は抑も何處であつたかと云ふに、それは北滿洲、阿什河畔の東京城である。この上京のある所はハルピンの東方にある阿什河驛の南で、位置は阿什河畔の平坦たる丘陵上に存在する。この河はハルピンの東に流るゝ松花江に合するものである。此處に金の古都の存在する上から考へて、今日のハルピンの繁昌するのは尤も至極であると云はねばならぬ。

阿什河驛からしばらく西南に行くと、今日の阿城縣の市街がある。この市街を通過して南門を出ると、郊外に道路がある。この道路を進んで行くと、南の方に丘陵の様なものが見える。これが即ち金の上京である。

上京は平坦なる臺地の上に存在して、その形状は稍や南北に延長し、その西壁の外は近く丘陵に接し、東壁外は略ぼ城壁に平行して阿什河が流れて居る。城の位置として先づ適當の場所であると云つてよい。以上の丘陵から阿什

河に幾多の小溝が流れ込んで居るから、これ等もまた要害の用をなしたものであらう。城内には丘陵から流れて来て同河に注ぐ一小溝がある。

城壁は

かくの如き形状を呈して居るが、ハルビン考古學者トル

マチヨフ

氏の意見によると、上||北の方が古く、下||南の方が新し

く、金時代のそれは北の方であらうと云はれて居る。支那人は北の方を敗城と云つて居るから、古いものであることが知れる。想ふに南の方は新しく築かれ、北の方の城壁に付け加へられて、此處を後に専ら使用したものであらう。そして北の方が敗城の名が附けられて居るのを考へても、これが全く不用になつて居つたことが知れる。一體支那人は前朝に使用した城は、迷信上再び使用せぬ風習がある。それは彼の明朝になつて、元朝の城を捨て、新に築いたのと同じである。斯くの如き城が使用せられず敗城となつて荒れ果て、居る所は支那の各地でこれを見ることが出来る。

この城は北と南とを合して、その周囲は二里二十六町であるが、今若し北の方を金の上京城として認めてその周囲を見ると、一里二十六町となる。さうすると金時代の上京は、これだけの大きさを有して居つたのである。

今、金の上京に就てなほ記す。城壁は土博を積み重ねて築造したもので各方面に門があり、外面に一定の距離に出張りがある。城門のある所は焼いた普通の博で築いて居る、これは立派に見せる爲めであらう。外城には濠を設け、その西門に接したる東壁には濠が正しく残つて居つて、その中に水が溜つて居る。これ等を見ても、當時は嚴重な防禦をせられたことが考へられる。城の内部は既に開耕せられ、その中に此處彼處に點々農家が存在してゐるが、皇后の趾や寺院の趾などは見るよしもなく、殆んど地ならしをして仕舞はれた。加之、石礎の如きも残らずその殆んどは阿城の市街に持ち運ばれ、市街軒下の踏石として並列せられて居る。石礎がこれ等に用ひられて居るのは

實に夥多しいものである。また城内農家の壁には城門其他の博が積まれてその傍に石臼や車製作用の石具等が散亂して居る。畑地からは特に開耕の際、シャーマン教の銅製人形博、瓦陶器の破片、古錢その他のものが掘り出さるゝのである。

明治四十年前後には、此處から鏡が多く掘り出されたが、今はこれを得ることは困難である。これ等の鏡は容貌を見る化粧道具でなく、専らシャーマン巫人の腰にさげた所謂腰鏡として祭時に用ひられたものである。これと最も深い關係あるシャーマン教の銅製人形は多く掘り出され、私は二個許りこれを買ひ求めた。以上で見ても、當時同教の盛んに行はれたことが窺はれるのである。

白鳥博士の此處で發見せられた碑文は、今や他に持ち運ばれ此處には残つて居ない。この碑文は寺院佛僧に關係したもので、その僧は東蒙古臨潢府あ

たりの遼人(契丹人)であつたことを記して居る。瓦の存在はまた寺院の存在したことを示すもので、その石礎の如きも、またこれと大に關係がある。けれども城内にも、城外にも博塔は一基も立つて居らない。

此處で金屬製の十字架クロスを發見した。これは尙ほ洮南附近古城の内でも得ましたが、これ等に據つて考へると、當時ネストリアン教の如き耶蘇教分子のすでに松花江流域金人の間にも、這入つて居たことが暗示せらるゝのである。私は城内をよく調査し、それから城外に出で更に調査する所があつた。城外には古墳や寺院の趾も残つて居る。

以上は概略金の上京古城の状態を記したのであるが、これを以て渤海の上京、遼の上京と比較すると如何と云ふに、私はこの事に就て、茲で少しく書いて見たい。

先づ渤海のそれと比較して見たい。渤海の城壁はバザルトの石を博の如

く打割つて、これで築いて居るが、此處は土博である。渤海城は平地に存在するが、此處は一方に丘陵を控へて居る。この點は大に相違して居る。また兩者の瓦を比較すると、互に類似の點が認められない。そして渤海の瓦は寧ろ西比利亞沿海州ニコリスク古城にあるそれとよく類似して居る。

然るに更にこれを遼の上京と比較すると、金の上京は聊か類似點が認められる。即ち城の位置が丘陵によれる所がよく互に類似し、土博で築いて居る處も類似して居る。これ等は金が渤海よりも、遼に時代が接近して居るから斯くの如き事實を示すに至つたものであらう。且つや金は遼を亡ぼすと共に遼の人々を多く使用し、彼等から遼の文化を採つた。彼の女眞文字は漢文字は固より、契丹文字から取つたことは云ふまでもない。佛教の如きも遼の東蒙古の僧侶を用ひたことは、當時の碑文によつて明かである。斯く考へて來ると、金の文化は固より漢族のそれを模したのは明かであるが、更に遼の文

化を受けつゝいたことは争ふことは出來ないのである。

この金の上京をもつて、遼の上京に比較すると、その規模と云ひ、城内の状態と云ひ、遼の上に出づることは出來ない、それ以下である。遼の方は實に堂々たるものがある。この事實から推考すると、金の未だこの上京を用ひて居つた時代には、その文化や規模は遼に及ばなかつたことが知れる。松花江上流に興つた金の女眞は、シラムレン上流に興つた遼の契丹よりも文化の程度は一段ひくかつた様で、この兩者の對照は最も興味を有するものである。

東蒙古、滿洲に城趾は多く残つて居るが、これを一般に遼金時代のものと見て居るが、抑もこの遼金時代と云ふ言葉に私は大に疑ひをもつて居るのである。即ちこの兩時代は相當に年數が相違して居り、その民族も一はツングースで一はモンゴルである。また文化の性質も聊か相違し、程度に進歩不進歩がある。これは私がすでに云つた如く、金の上京と遼の上京との比較で略ぼ

知ることが出来たのである。私は東蒙古・滿洲に存在する古城及びその發掘品を窺ふに、遼のものが金のものよりもよく出来て居る。これを證明するに瓦が最もよい、就中、その鬼瓦の圖様の如きは頗るこれを證明するに都合のよい。

私が兩者の鬼瓦に就て大に参考となつたのは、東蒙古・洮南附近の古城であつて、此處は嫩江に流るゝ洮兒河畔に存在して居つて、遼・金時代に涉つて用ひた居城である。此處から得た鬼瓦は、遼のそれは遼のその面影と彼等の氣性が發現せられて、頗る強い藝術を發現して居るが、これが金となつてはこれが退歩し、その作品は到底比較にならない。これ等は兩者の優劣を見るに最も都合のよいものである。

私を以つて見ると、遼・金の居城と云ふも、概ね最初はその城は遼の築城したもので、金はその跡に這入つたに過ぎない様に思はれる。それは築城法やその他の點に於てよくこれが窺はれるのである。

また東蒙古・遼西地方・滿洲等に存在する博塔も多くは遼のもので、金のそれは誠に少ない、殊に遼の初期の如きは遼の面影を傳へて居るのである。遼の上京や中京や、行宮等には立派な博塔が存在し、而かもこれが以上各地方のそれによく類似して居るのである。然るに金の上京には博塔が残つて居ない、而かも碑文にある如く或僧侶の如き遼人が來て居るのである。これ等の事實は、遼が金よりも文化が最初に於ては盛んであつたことが知られる。

私は兎に角、滿洲・東蒙古に於ける歴史時代の三大遺趾として以上の如く記した。この三者は同地方に於て實に代表的になるもので、その渤海・遼・金等の民族がいかなる文化をもつて居つて、いかなることをしたかは、これ等の三大遺趾がよくこれを物語つて居る様に思はれたのである。

懐かしいドルメン

朝鮮に巨石文化を表現するドルメン(Dolmen)の存在することは明かかとであるが、これがまた南滿洲にも存在する。私が滿洲でドルメンを最初に発見したのは、實に明治二十八年のことで、その場所は海城と岫巖との間の拆木城附近姑嫂石と云ふ所で、ドルメンの數は都合二つであつた。私が此處で以上二つのドルメンを発見したのは、同年十月十日私が小孤山の方から拆木城に行く際であり、それから二日許り此處でその調査をした。

當時、私は東京人類學會から南滿洲に於ける人類學上の取調を依頼せられて、同地を探查して居つたのであるが、この時の私は歳は尙ほ二十歳代の若輩で、この二つのドルメンを発見した時の心持は何だが鬼の首でも取つた様に嬉しかつた。そして私はこれを翌年の『太陽』第十五號に『遼東半島』の文

中に「石室」として記るし、當時私のスケッチした圖を附けて置いた。

私は今度、南滿洲を探查したが、若い時に發見した姑嫂石のドルメンのことが氣になり懐かしくなり、十月八日再び此處へ探查に行つて見た。然るに二つのドルメンはその時のその儘で、少しも變化がなく残つて居るが、私はこれを見て何だか久しく會はなかつた古い友人に會つた様な氣がして、無情のドルメンに向つてあつい涙を流した。誠やこの二つのドルメンこそは大陸に於ける私の人類學上貴重なる發見の一つであつて、またこれが最初のそのものとして、一番大きなものである様に思はれる。そしていつもこの二つのドルメンのことを忘れたことはない。今私は此處に來てこれ等のドルメンを見るに、いかに寒い雪や雨が降ればとて、いかに強い風が吹けばとて、その他いかなる嚴寒暑氣に會へばとてドルメンは平氣であつて、何に知らぬ顔をして居る様である。私はこれを見て恰かも私自身の守護神の様な氣がして、頗る

心強いのである。

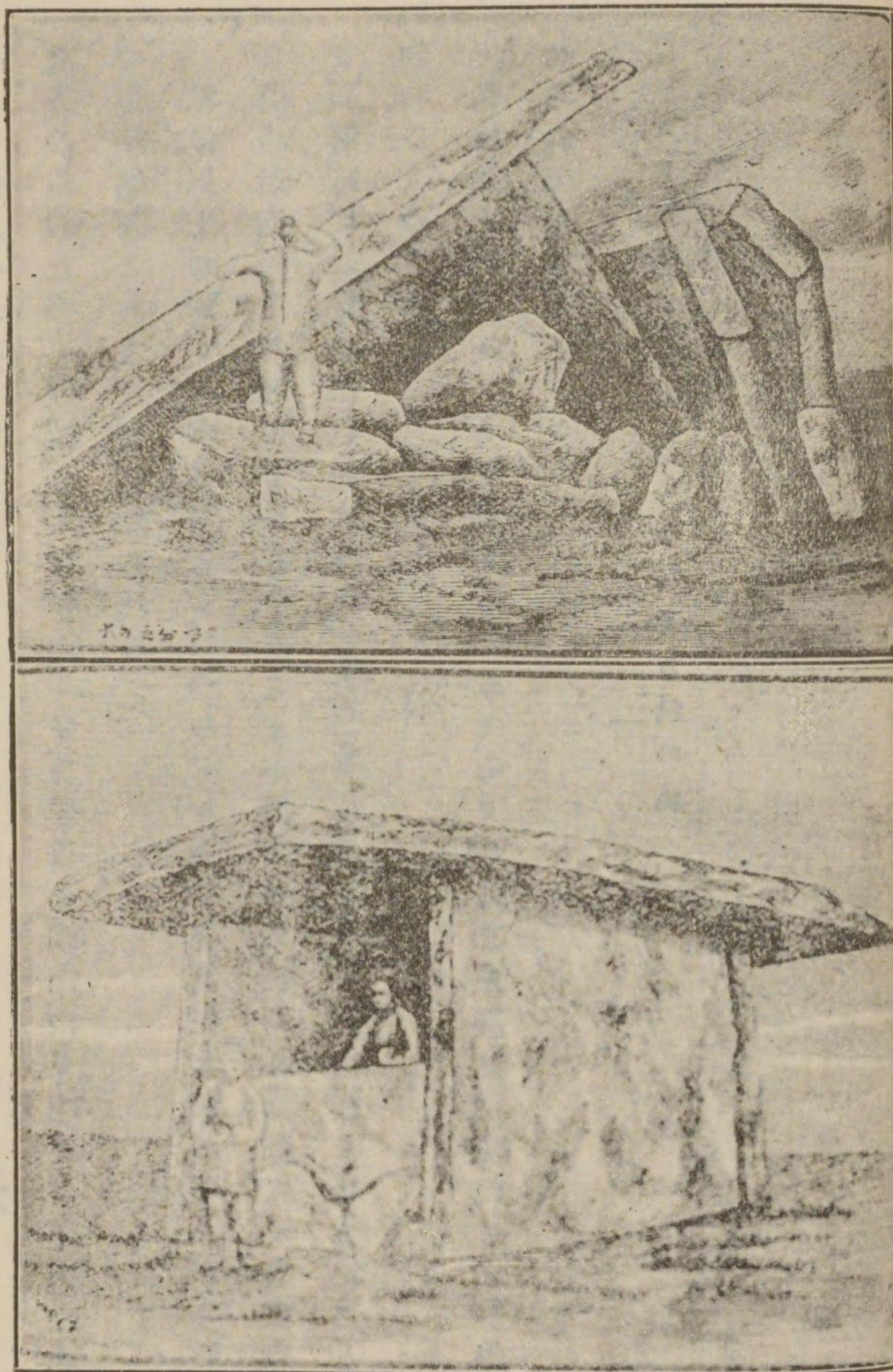
二つのドルメンのうち、その一つは完全であつて、僅かに一方の壁が半破壊せられて居る許りで、その高さは地上から八尺三寸、天井の長さは二十尺四寸と十九尺五寸である。他の一つは古く石工等によつて破壊せられ、その石材で大石臼を作らうとしたが、その石工は忽ち病氣となつたから、その儘にし今日に至るまで何人も恐れてこれに手を觸れるものはない。二つとも石材は花崗岩から出來て居る。

破壊せられた方のドルメンは、小高い丘陵の上に存在するが、完全な方のドルメンはこれよりも稍や高い丘陵の上にあつて、景色の最も佳なる所にあり下には沙河が靜かに流れて居る。土人はこのドルメンに就て、斯んな傳説を傳へて居る。それは昔々、此處に兄嫁と弟嫁との二人があつたが、兄嫁は丘上に登り歸らないで石室となつた、弟嫁も彼女を探しに行つてまたその下で石

室となつた。今日残つて居るそれは即ち兩嫁の化身である。この關係からこれを殊に姑嫂石と稱し、またその名稱から此處の地名を姑嫂石と呼ぶに至つたのである。

私は今回は更に以前よりも一層精密に、このドルメンを調査したが、その下附近から石器土器の破片等を發見した。これでこのドルメンが有史以前に石器時代民族によつて築かれたものと云ふことが確かめられた。

朝鮮には、南方の諸島嶼から北方に至るまで、ドルメンは夥多しく存在する。このことに就いて昨年東京モリソン文庫紀要第一冊に朝鮮のドルメン、(Les Dolmens de la corée) と題して佛文で發表し、またこれを本年アムステルダム開設の萬國人類學世界聯盟會でも發表した。要するに朝鮮のドルメンは、その形式に於て南方・北方の二つに區別することが出来る。南方形は基盤型であるが、北方形は机型である。然るに今、滿洲のそれを見ると、机型であつて朝鮮



(チツケスの私年八十二治明) シメルドの石嫂姪

北方のものと全く連結して仕舞ふ。さうすると満洲のドルメンは朝鮮北部の連続地帯であることが知られる。

私は以上の如く拆木城附近で、二つのドルメンを発見したが、それが今では普蘭店附近やその他にも存在することが證明せられ、乃ち満洲にも有史以前に石器時代の當時に巨石文化 (Megalithic culture) の行はれて居つたことが知らるゝのである。

私は以上のドルメンを記するに就て、そゞろにまた発見當時のことが聯想せられてならない。

ドルメンのあたまをなでる秋の風

第二十八章

獅子狩の圖様ある彫刻石

海城の城壁は、明代に築造し、清朝になつてこれを重修したものである。この城壁に就て、私の頗る面白く感ずるのは、その城壁の最下部が、明代最初からその以前に溯る碑文や臺石等の用ゐられて居ることである。讀者諸君にして若し一日暇閑があれば、一度これを調べて見るがよい。必ずやその城壁の下部に色々の碑石や臺石の積成せられて居るのを見るであらう。またその或ものは、海城の市街に持ち運ばれて居るものもあるのである。そしてこれ等の石材は、殆んど悉く綠泥片岩からなつて居る。

私は明治二十八年滿洲の第一回の探査の際、海城に来てその城壁でこれ等の存在することを認め、進んでこれを研究した結果、遂にその中から圖の如き獅子狩を現はした圖様の臺石を發見したのである。この石は臺石は長さは

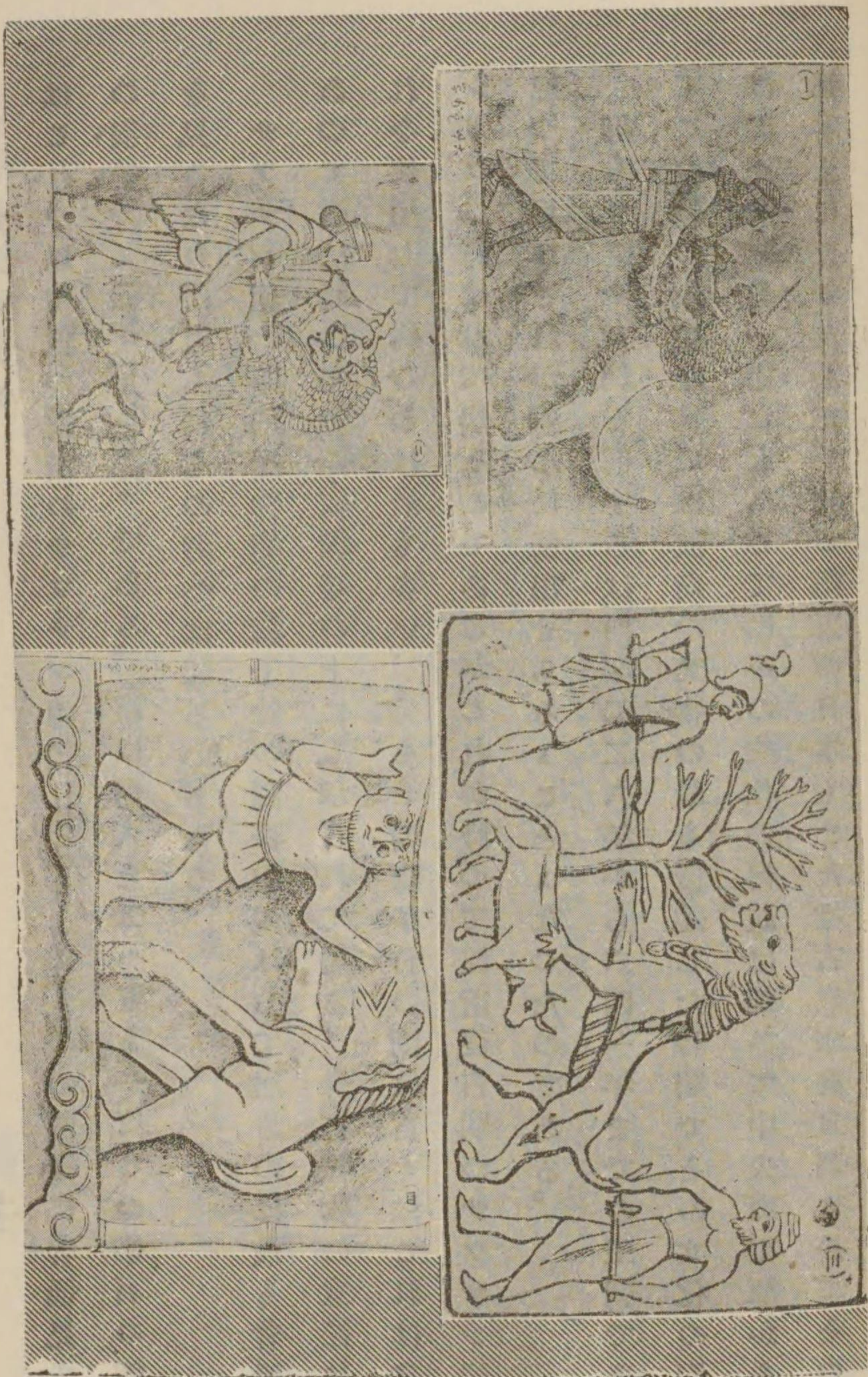
凡そ二尺八寸、高さ一尺五寸、幅は一尺七寸である。

臺石の圖様は、茲に圖する如く、中央には一本の樹木の如きものがあつて、その左右に人物と獅子とがある。人間は丸い顔で長鬚を有し、兩手を舉げ足を張つて獅子に向つて居る。人物は腰に裳の如きものをつけて居つて、その他は全く全身裸體であつて、その長鬚やその風俗は漢族やツングースやモンゴルとも大に相違して居るのである。

以上の中央の樹木の一方には獅子が前脚の一つを樹上にかけて口を開き、人物に向つて將に飛びつかんとする姿勢を示して居るのである。

この圖様は、まさしく人物と獅子とが互に奮闘する状態を示したもので、その下繪の圖畫は極めて巧でないけれども、その圖畫は聊か野趣を帯び、彫刻の手法と相對して稍や愛すべき所がある。

この獅子狩の圖様は、純支那圖様としては極めて珍らしいものであつて、私



獅子狩の圖

はこれを以て彼の波斯のサツサン朝[Sassanian periods]の圖様に普通見る所の獅子狩(Lion-hunting)である。這は何人と云へども、一度この臺石の圖様を見るなれば、直ちにその考へは起るであらう。

サツサン朝の彫刻・織物等の獅子狩の圖様を現はして居るのは、最も普通であつて、這は延ひて意匠・紋様等の上にも示されて居る。殊に織物の意匠にこれを使用して居るのは最も多い。抑もこの獅子狩の圖は古くはこれはアツシリアに行はれて居るのであるが、これが降つて波斯復古期のサツサン朝に至つて、再びこれが盛んに使用せらるゝことゝなつたのである。

抑もサツサン朝と稱するは、西紀二二六年から六四一年までの王朝であつて、この朝の極盛時代には波斯の文物の最も發達した時期で、その文化の影響は同王國附近一帯に及び、さてはその文化の傳波は延ひて、中央亞細亞から支那本土にまで及んだ。我が絶東の日本もまた推古以來奈良朝に於てその影

響を受けた。這は我が正倉院や法隆寺、その他に於てこれを認むることが出来る。殊に獅子狩の圖様は正倉院や法隆寺等に於て織物等の上にこれを見ることが出来るのである。

サツサン朝文化の影響は、我が日本の原史時代の當時に於て既に認めらるゝ所であつて、這は彼の馬具・甲冑・金具類等の紋様がこれを示して居る。加之、彼の筑後磐井の墳墓に獅子頭のバズレリーフ彫刻を施してゐるのは最も注意を要する。

サツサン王朝は日出の勢ひをもつて發達したが、一度アラビア人の勃興と共にサラセン王朝に征服せられ忽ち滅亡して仕舞つた。けれどもサラセン帝國の文化は、サツサン朝のその引き續きであり、それにアラビア式の加はり一種サラセンの所謂イスラム(Islam)の文化を形成するに至つた。さればこの時代をまたMohamedan-persian periodと呼ぶのである。

イスラム文化・藝術のうちにも、同じく獅子狩式の圖様が行はれて居るので

あつて、這は主として織物の上に於て見ることが出来るのである。海城で發見した獅子狩の圖様は、私の深く研究する所によると、這は寧しろサツサン朝盛時のものでなく、後のサラセン時代イスラム藝術等に現はれたるその圖様をとつた様に思はれる。即ちその圖様は大に退化し僅かにその中央の樹木や人物や獅子の面影を存するのみである。けれどもその人物に鬚をばやして居るのはこれ尙ほ胡人の性格を示すものと稱してよい。けれども波斯系統の獅子狩の圖様が滿洲に存在して居るのは、頗る興味あるものと云はねばならぬ。

然らばこの臺石は何時代のものであるかと云ふに、私はその圖様畫風彫刻法等の上から、これを唐代の中期・遼初期のものと思ふものである。

獅子狩ライオンハンティングの圖様は古くアツシリアに源を發したもので、これが波斯ペルシアに傳統し就中その中興たるサツサン王朝の藝術品に於て、最も多くこれを見るもので

あつて、同朝が一度滅亡し、次にイスラムのアラビア政治時代に入るも、この圖様は等しく使用せられて居る。そして這は、更にエジプトに入り、ビサンチン朝に入り、尙ほ更にこれが中央亞細亞を経て支那に入り、さては支那からまた日本の奈良朝に入るに至つたのである。

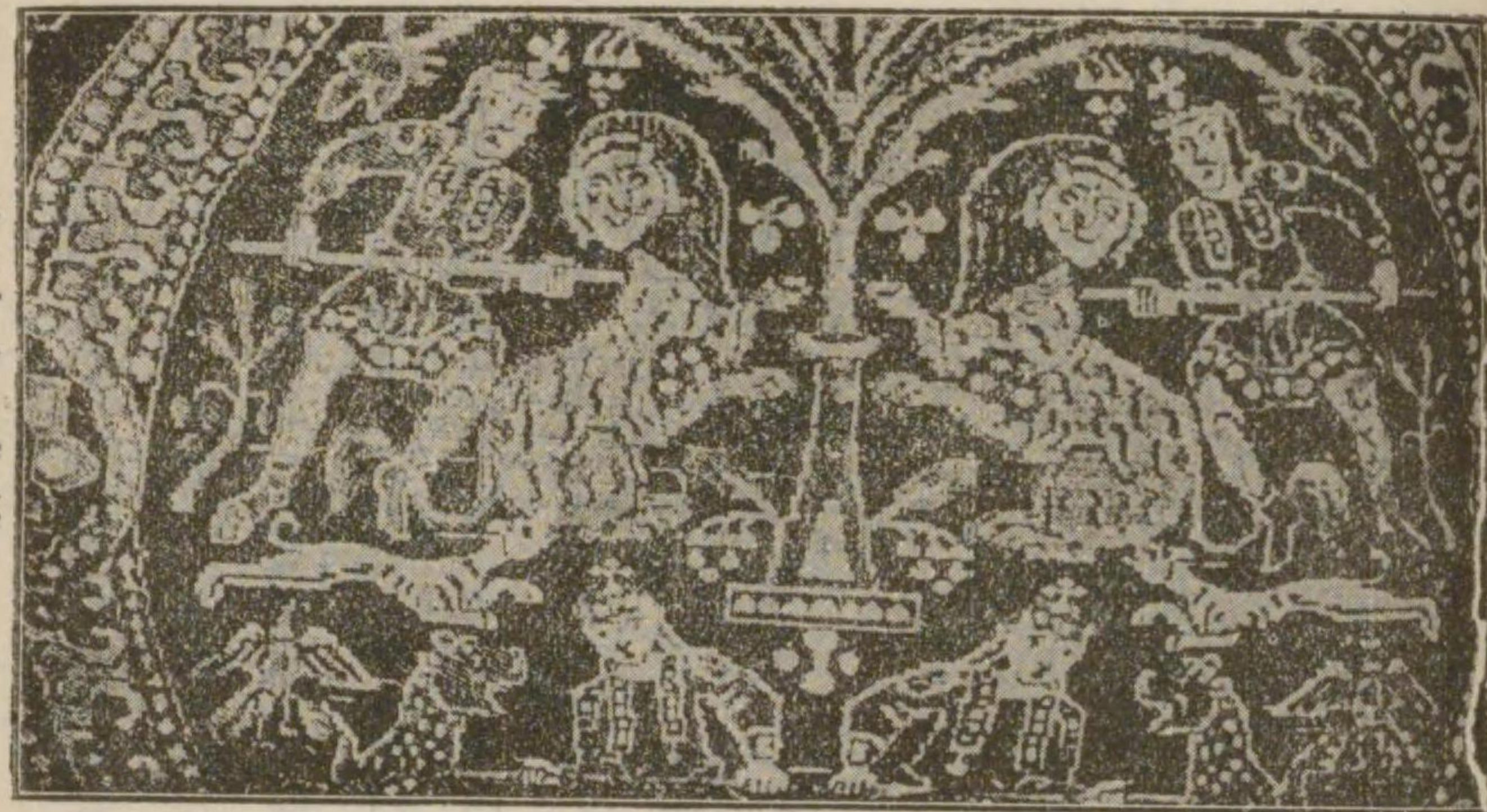
この獅子狩の圖様は、またこれをアシアチックシムボルと稱するもので、サツサン式色彩の最も強いものである。この圖様は多種多様あるが、要するにこれを二つに大別することが出来る。即ちその一つは甲馬カウ上獅子を狩るもの、他の一つは乙單シムに人が直接に獅子と闘ふて狩りをして居るものである。今海城のそれを見るに、這は乙に屬するものでよくその特徴を現はして居るのである。

茲に比較参考として、海城のそれに似た乙種の獅子狩の圖様を示して見やう。左に圖するものはエジプトのアンチノエから發見した織物で、サツサン



(る據に氏ケルアフ)様圖の狩子獅るあに物織見發エノチンア

朝の最も多く影響を受けたるものである
そしてこの布面に於ける意匠は甲乙兩種
の獅子狩の現はされたもので、この中に海
城のそれとよく似たものがあるのに注意
せよ。即ちこのうちに、上は裸體で下に腰
巻の様なものなし一方から飛びつかん
とする獅子に向つて居る所である。アン
チノエのこの人物や獅子の有様は海城の
ものとよく似て居る。更に布面の輪廓の
紋様や、中央に樹木を配置して居る状態は
サツサン式である。
次に圖するものは、サツサン式の織物六



(る據に氏ケルアフ)業圖の狩子獅るあ見に物織ンチンサビ

一七世紀であつて、這は中央に樹木を配置
しその左右で人が獅子を狩つて居る。こ
れも海城のそれとよく似て居る。
斯くの如き例をビザンチンやイスラム
時代にまで求むれば、枚擧に追がないが、先
づこれは略することゝするが、兎に角以上
によつて、いかに海城の圖様がサツサン式
獅子狩のアシヤチツクシンボルを示して
居るかを知るであらう。

私は明治二十八年海城で以上の臺石を發見し、こ
れを海城駐屯の陸軍當局に乞ふて、城壁下より多數
の人の力によつて抜き出し、これを公式荷物として

東京帝國大學に御用船で運送せられたが、どうしたものか、途中で紛失し遂に大學に到着せないで今日に及んで居るのである。私は學術上、これを最も遺憾とするものである。

私は大正三年、朝鮮慶尙北道慶州城壁取り壊しの際、不用石のうちから等しく獅子狩の圖様ある石一個を發見した。這是長方形眞四角の石で、墳墓礎石の隅に用いたものらしく、二面に彫刻を施し他の二面には何等の彫刻がない。そしてその一面には、一人の長鬚胡人が立つて居つて、他の一面には獅子が今しも飛びつかんとする姿勢を示して居る。這是海城のものよりも最も古く、時代は新羅王朝のものである。この彫刻石や朝鮮文武王陵の胡人石像や、サンサン式の朝鮮敷き瓦の圖様等に就ては、他日別に記す所があるであらう。(以上彫刻石は、今本山彦一氏の所藏となつて居る)

第二十九章

畫像石の種々

前章に於て、海城に於て獅子狩圖様の臺石の存在することを記したが、近時は等と相似たる畫像石が、遼陽に接近する鞍山及び千山驛附近から發見せられた。此の畫像石に就いては既に前に大體記したが、茲に更に此事に就いて稍々詳はしく私の意見を述べて見たいと思ふ。

先づ最初に、大連圖書館に今日保管する畫像石から初めて記さう。圖書館には、近頃鞍山から送つて來たものを保管して居るが、畫像石は總て十數枚ある。其の中で畫像の明かなるもののみを茲に紹介して見やう。是等の石材は總て、綠泥片岩の板石から成つてゐる。是は單に此の圖書館保管のみならず、鞍山等に存在する畫像石も皆此の石から成つてゐる。

以上大連圖書館保管の畫像石は其の大きさは一定せず、各區々で相違してゐる。

る。之に長方形のものもあれば、稍々四角のものもあり、一定しない。是等は
 何に用ゐられたかと云ふと、其の偏平にして一方に畫像が彫刻されてゐる有
 様を見れば、畫像の現はされてゐる面を正面に立てたのである。聞く所によ
 れば是等の石は總て一箇所から發掘されたといふから、之をストーンサークル
 ルのやうに立て連らねて居つたか、或は個々別々に之が立てられてゐたが、も
 とより知ることが出来ないけれども、此の畫像石が墳墓の何れかに立てられ
 てゐたことは想像に難くない。想ふに是等の畫像石は、墳墓の周圍に立てら
 れてゐたのであつて、石棺の外部を覆ふたもので、這是彼の西伯利の後貝加爾
 州や外蒙古等に見ゆる、所謂クルカンに類似したものであつたであらう。私
 は茲に詳はしく畫像石の圖様に就いて、之から説明して見たい。以上畫像石
 に現はれてゐる風俗は、人類學上文化史上最も注意すべき面白いものである。
 先づ順を追ふて言はんに、



第一圖

第一圖筒袖で冠を戴ける一人の男が雲の上に坐し、其の傍らにも雲形を描いてゐる。其の右の少し離れた所に人の顔のやうなものが表はれてゐる。(彫刻面の高さ九寸)

第二圖は上に大きな雲形を畫き、其の下に蓮華のやうな花が咲いて居る。(同一尺二寸三分)蓮華の下部に二の線を描いて居る。

第三圖、上に雲形を表はし、下に大きな葉を持つてゐる木から一

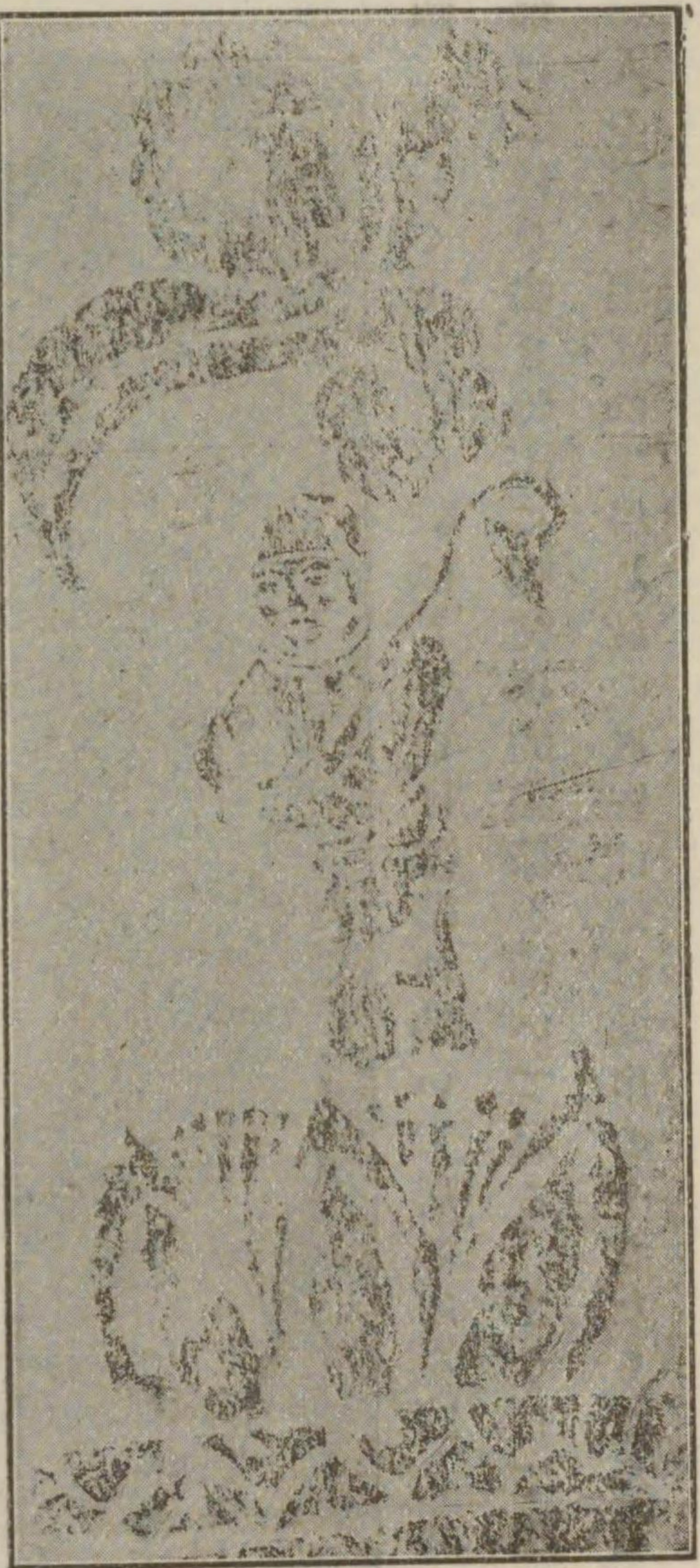


の花が咲いて居る。第一に於けるが如く、此の植物の下部に二線を引いて居る。さうして雲形と植物との間に、一人の男が坐してゐる。此の男の風俗は頭に冠のやうなものを戴き、襟を右に合せ、袖の長い衣服を着してゐる。(彫刻面高二寸一分)

第三圖



第四圖 等しく上に雲を表はし、下には蓮華の咲いて居る所を圖し、其の蓮華の下部に二線を書き、線内に幾何學的模様を描いて居る。さうして蓮華の中から一人の男が現はれて居る。此の風俗は頭に頭巾のやうなものを冠り、長衣で手に蓮の實のある幹を持つて居る。此の器具は何を意味するか十分に



分らない。(畫面の高さ二尺五寸)

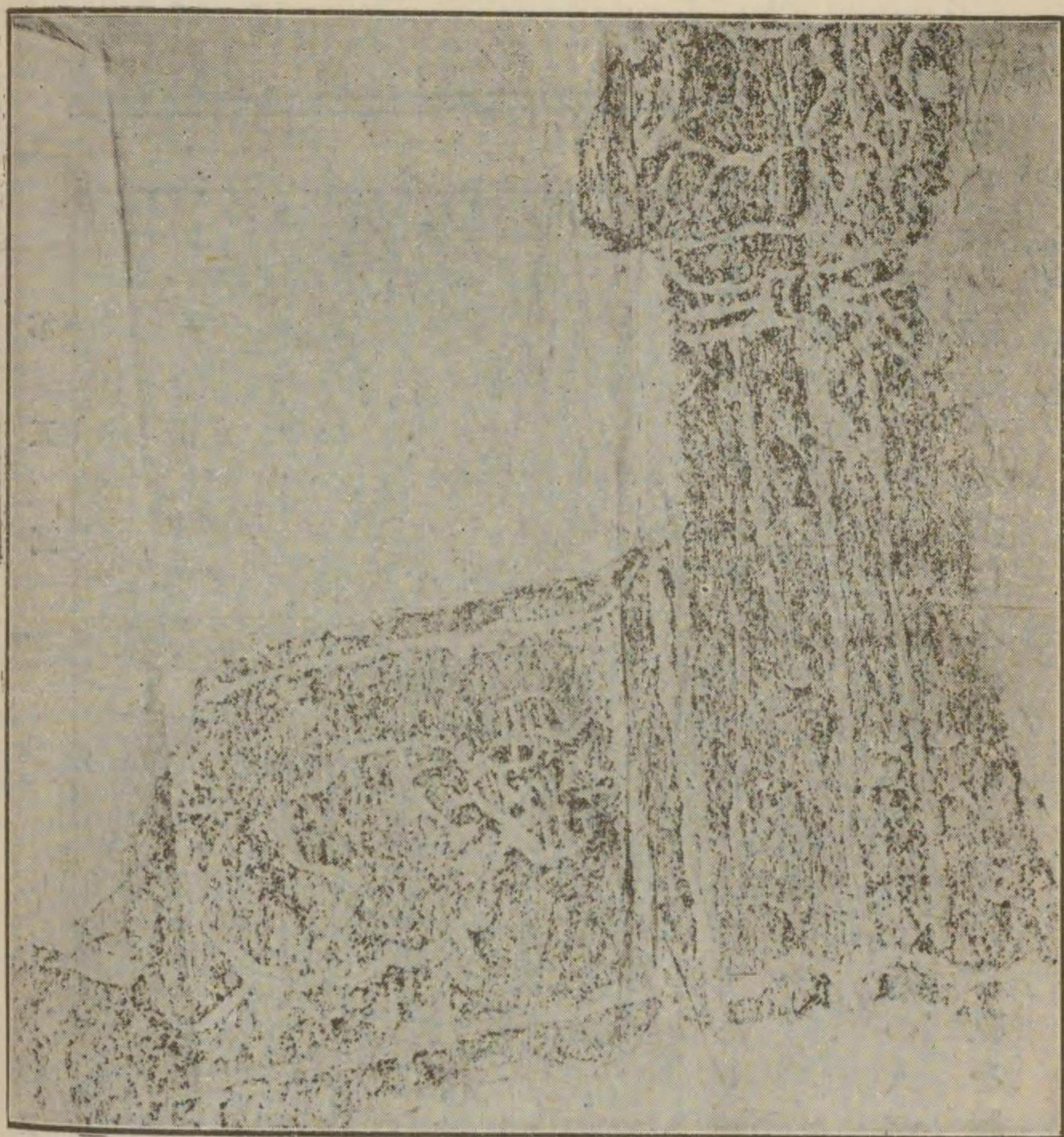
第五圖 例の如く上に雲を表はし下に大きな鉢を置き、其の中から蓮華が咲き、其の上には頭巾を冠り、長衣の人物が立ち、合掌して何か禱つて居るやうな状態をして居る。其の左に井戸のやうなものがあり、其中から龍の如き動



物が首を出して居る、龍は角を有し首は蛇形であり、其の傍らに雲を等しく描いて居る。(圖面の高さ二尺四寸)

第六圖 之は頭部の方が缺けて居るが一人の人が立ち、筒袖で長衣であり、腰の前で紐を結び、手を衣に入れ手を組み、足に靴を履き、其の足下の所へ毛氈

第七圖



第六圖

のやうなものを敷き
其れに一人の子供が
仰臥し、それを布で結
つて居る。之は北方
民族の搖籃の如きも
のである。(圖面高さ
一尺二寸五分)
第七圖 高さ二尺
一寸にして前の圖よ
り大きく、之は横に見
るべきものである。
圖様は劇的場面を示

して居るやうに思はれる、一番上に雷神かみなりの如く、背には太鼓を列ね鬼の如き男が背負ひ、さも恐ろしき形相をして下界に臨まんとして居る。さうして其の下には雲を描いて居る。其の雷の如き者が睨まへて居る右の下には、一人の男が倒れて居る。頭に頭巾のやうなものを冠り孔部を表はし脚部はよく表はされて居る。胸の處には縦に二線を描き其の上に四本の線を横に交叉して居る。此の人物の状態から見ると、或は雷神に撃たれ殺されたものであらうか。其の人物の下には、大きな魚を畫いて居るが、鯉魚を示したものであらうか。何故に斯く鯉が此處に描かれてゐるかといふに、これは雷の振動などに驚いて水中から飛び上つたものであらうか。最初此の圖を氷の上に人物が臥し、氷の下に水があり、其處に鯉が泳いで居るとも考へられないこともなかつたが、雷が上に鳴つて居るのを見ると、夏の感じがして冬の感じが起らない。それから雷の眞下に、一人の人物が居る。頭に朔北民族の用ゐる冑を頂き、そ

れに布の垂れをつけ、身に鎧を着けて居る。多分布の上に縫ひつけた扎鎧さよろぎ所謂布甲をつけ、武者は反身そみになり腰をかけて、何物にか一方の手をつけて居るやうに見える。これは椅子のやうなものであらうか。雷に驚いて、或は撃れて人が倒れ、又魚は驚いて居るに拘はらず此の武者が傲然として一方を睨まへて居るのは、或強い英雄を表はしたやうに思へる。斯くの如き圖面が、此の石に彫刻されて居るのを見ると、這は何か當時行はれた説話を暗示したものであらうに思はれる。此の鎧は蒙古人ツングース乃至朝鮮等に行はれた甲冑と同じであるが、又雷が太鼓を背負へる形態は、支那説話の雷と同じ思想のものである。

第八圖 高さ二尺一寸。之も横に長いものである。此の圖様は非常に不可思議を呈してゐる。所謂冥府殊に佛教の地獄の有様を描けるやうに思はれる。先づ下の方から云へば右の下に腰をかどめた人が居り、手に衣服やう



第八圖

ものを持つてゐる。此の人物は頭を結び衣服は筒袖であるか、多分婦人らしい腰をかどめて居る状態から見てもさうらしく見える。其の左の方に一人の人物が立ち、これも女性のやうで、筒袖で膝に裳のやうなものをつけて居る。其の左方に一匹の馬が歩んで居り、人の如きものを乗せてゐる。之は人物の所が缺損して十分に分

第九圖



らぬが、人たることは明かである。一人の老女が手に衣を持てるは三途さんずの川の老婆のやうな氣もする。更に其の上には、一方に雲を描き、其の傍らに男が裸體のまゝで胡坐をしてゐる。其の少し上の左の方に、一人の男が裸で横たはり、其の上に鬼の如きものが鞭でうたうとしてゐる。之は鬼が地獄で、人間を苛責して居るやうに思はれる。這是全く佛教の地獄の様を現はして居るやうに考へられる。

第九圖 は茲に圖するが如きもの

第十圖



で、上部の方は損して居るが、此の畫像は十分に認めることが出来る。即ち上に車を置き、其の下に駱駝が休んで居る。其の車の下に或獸が休んで居る。此の奇獸は、屢々北方の發掘品に見えるものである。此車も正しく駱駝の牽くもので、これにより湖北との面影を傳ふるものとして、面白いものである。

以上は鞍山から出た畫像石であつて、現今大連圖書館に保管せられて居るものである。更に斯る畫像石は、尙今日鞍山から發掘せられ、當時鞍山中學に保管せられて居るものがある。之に就いて、茲に説明して見やう。

第十圖は高さ十一尺六寸五分である。之は上に幕のやうなものを張り、幕には垂れがあり、其の幕の左右に唐草模様のついた柱亦額のやうなものがついて居る。之は一方のみ存して一方は見えない。幕の下に四人の人物があり、其中の二人は相坐し、左右の二人は直立してゐる。此の坐して居る二人の左の一人は、床几に腰掛け、人物態度から見て、或王の如き威嚴を有して居る。右の方に坐せるのは、左の方より稍々小さく、其の姿勢から見れば女性らしく女王のやうな態度である。胸の處に一人の子供を抱いて居り、另の方の傍らに立てるは從者で、筒袖を着、靴を履き手に一本の棒を持つて居る。王妃のやうなもの、傍らにあるは女性の風俗の如く、王妃に侍する女官のやうなもの



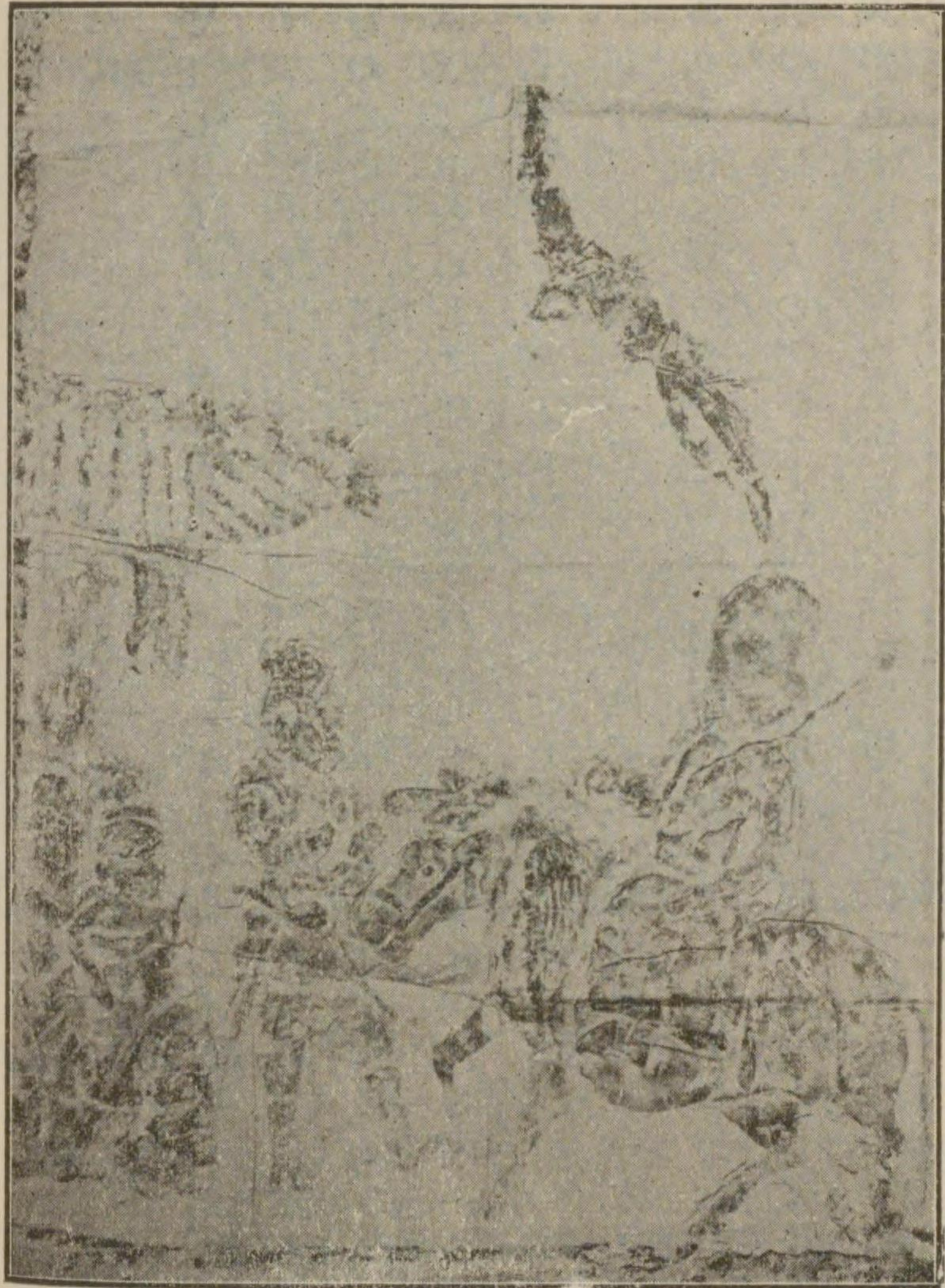
第十圖

であらう。此の圖様は大連の圖書館の畫像石と餘程異にして、より壯嚴の感を引き起す。是等も何等かの説話を示せる劇的性質を有つて居るやうである。

第十一圖 高さ二尺。此の圖は周圍に輪廓を描けるが下はない。輪廓に唐草模様を描いて居る。此の模様はサラセン式のそれによく似て居る。以上輪廓内の圖

様は、毛氈から成れる車上に設けられたる移動式家屋である。即ち前に車輪が見え、其の上に天幕から出來た家屋が建設されて居る。之を一寸見れば、車の上に造られたる毛氈の家と云ふことは考へられないが、此の形は現今鞍山の舊兵營内に存在する、此の種の圖と比較すれば直ちに然ることを考へられるのである。而して其の後にある樹木は、之れは牡丹であつて、其の葉と花とはよく之を示して居る。牡丹は北方に野生に咲ける唯一の草花である。此の圖様は明かに朔北の様を傳へて居るものである。

第十二圖 高さ一尺九寸。之は周圍に輪廓を施し一方に瓦の屋根の家があり、それに鐸のやうなものが吊され、其の下に二人の男女が出迎へてゐる。其の處に一人の男が馬に乗りて此處を訪問しやうとして居る。馬前には馬夫があり手綱を取つて馬を駐めて居る有様である。此の圖様も劇的場面を表はして居るやうに思はれる。



三八

第十三圖

高さ二尺一分。周圍に輪廓があり、其の中に樹か人物の如きものが一つあり、其の下に馬が描かれて居る。多分一人の男が馬に騎つて居るやうにも思はれ



第三十圖

る、或は木に繋がれた馬のやうでもある。馬は飾られて居る。一方に杖をついて人の如きものが居るやうであるが、磨滅してハッキリ分らない。

第十四圖

三九



第十四圖

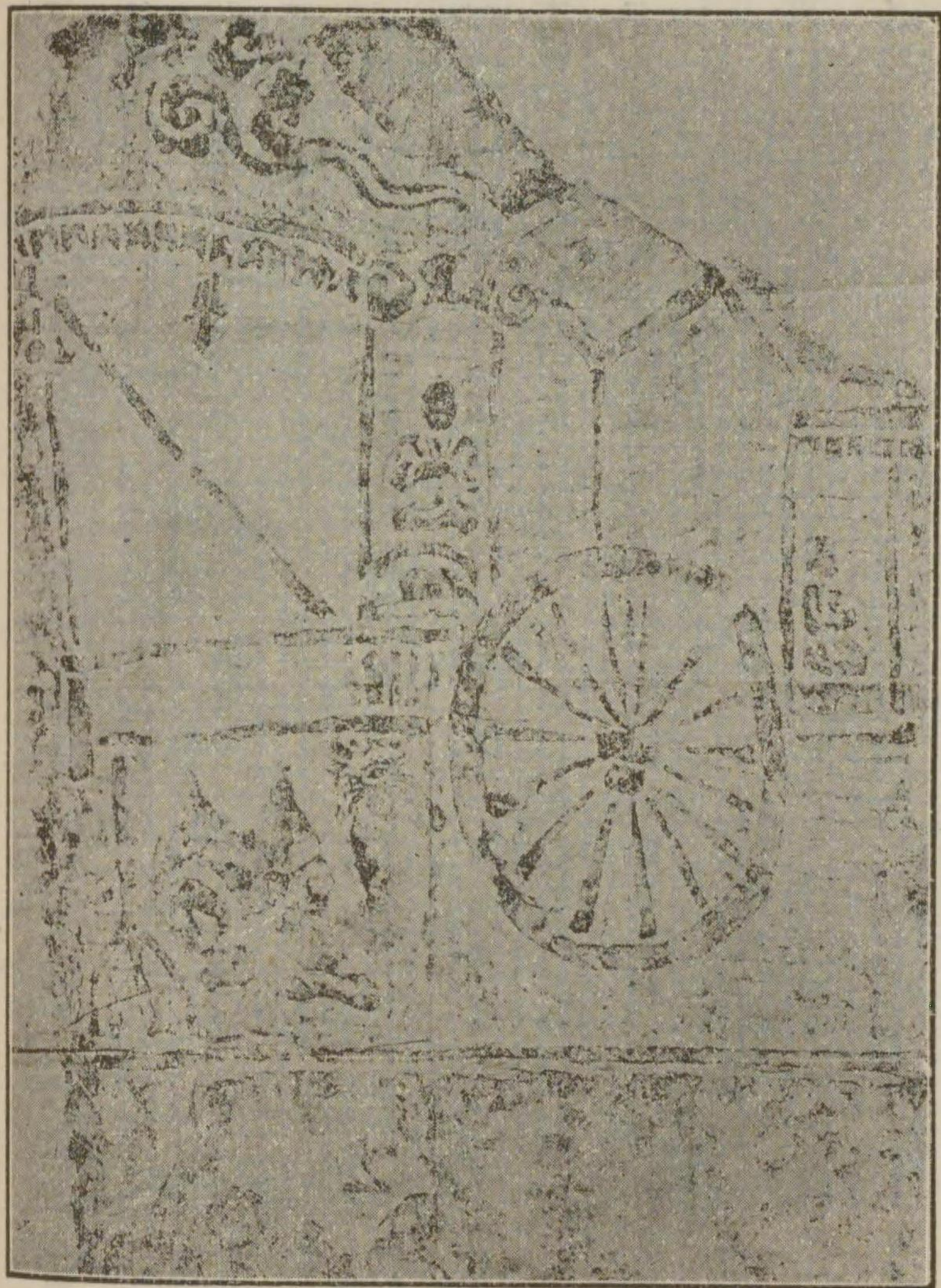
高さ一尺七寸。此の圖様も前の物と同じく、一人の男が馬に騎つて何處へか行く所である。一方には人の如き者が立つて居るやうである

が、ハッキリ分らぬ。けれども膝をやゝ屈めて居る様は、前と似て馬上の訪問者に敬意を表して居るやうに思はれる。

以上は鞍山中學校に保管する畫像石である。是等は共に同一場所から出て來たものである。

尙畫像は鞍山及び千山驛を中心として各所に散在してゐる。今私の調べたものを茲に記さんと思ふ。私は鞍山中學矢澤校長梅本教諭と共に此の調査に行つた。先づ鞍山驛から乗車し、次の千山驛で下車した。すると直ぐに日本の舊兵營跡がある。其處で畫像石を一つ見た。これ

第十五圖である。高さ三尺。此の畫像石は彫刻圖様として最もよく出來て居る。此の圖様は鞍山中學校に保管する第九の圖様の明瞭に描かれたものである。即ち立派に車の輪が見え、其の上に毛氈で移動家屋が造られてゐる。さうして天幕に垂れを設け、それに裝飾の紐の如きものがあり、中央に



立派に家屋を
 設け一人の男
 が坐して居る。
 尙車の後に従
 者の如き筒袖
 を着た男が坐
 して居る。車
 の上に垂れが
 下がつて居る
 傾斜した一本
 の線は毛氈を
 結つて居る多

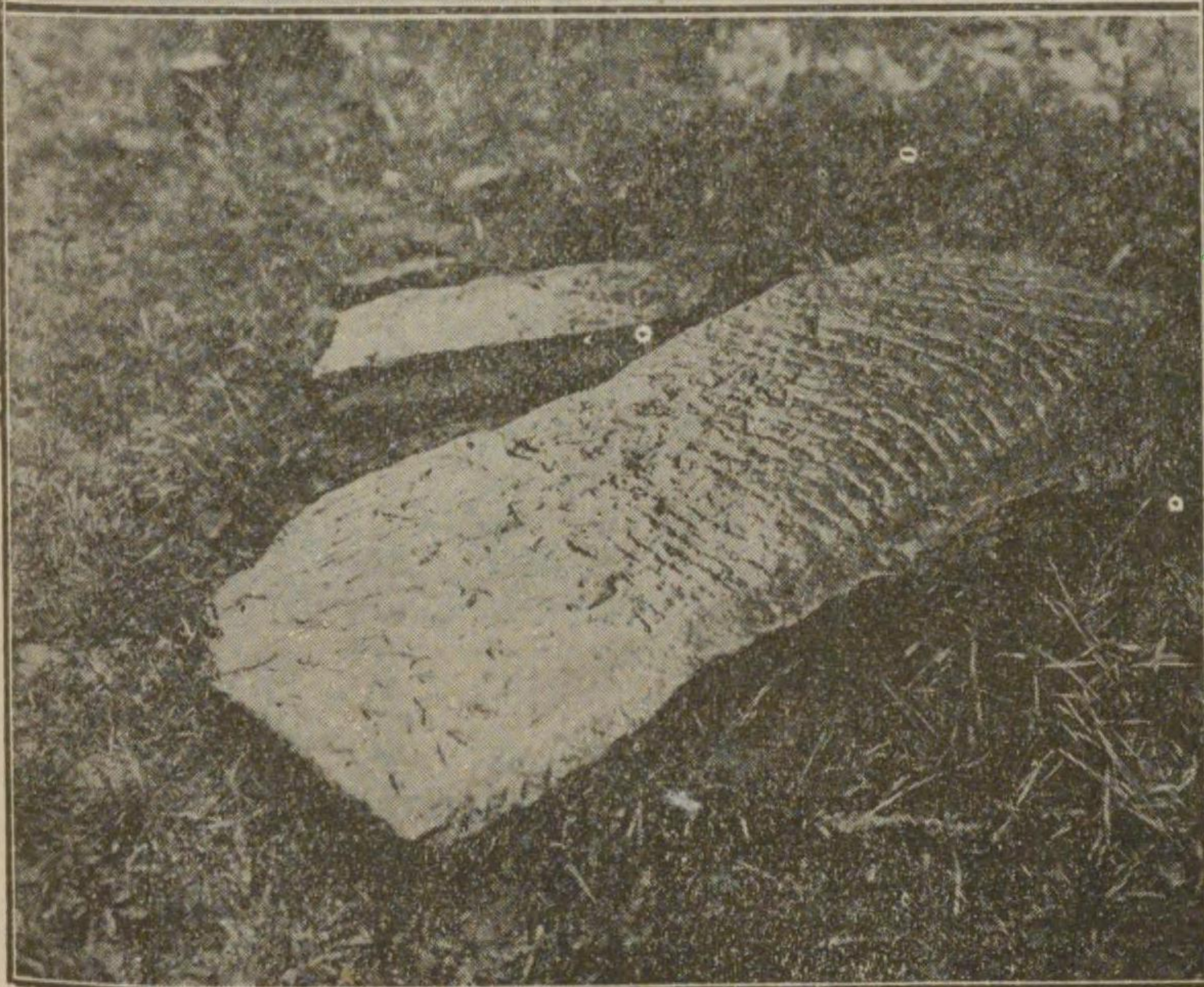
分馬の毛から絢はれた綱であらう。車の前には、一本の木を切つて出来た助けが置かれてある。車の下には駱駝が居る。其の背は亞細亞駱駝の二峰を示して居る。此の圖様は駱駝に牽かす車が靜止して居る所で、其の有様がよく示されて居る。斯くの如き圖様は明かに朔北の佛を示して居ると云つてよい。此の畫像石にも等しく上に雲が描かれてゐる。

此の兵營内に尙一つ注意すべき石片がある。(第十六圖)之は別に表面に何等の畫像は描かれてないけれども、茲に面白いことは、一種文字の如きものが刻られて居る。併し惜むべきことは、兵營の靴稼ぎになつて居た爲め表面が磨滅し、只僅かに文字らしきものが認められるばかりである。之れにはさし込みをしてゐたものと見え、其の石も附近に見える。石は等しく綠泥片岩であつて、畫像石と同一時代のものたるは明かである。而して其の石面に表はれた文字様のものは私は固く斷定は出来ないが、之はウイグ似前の所謂ル

第十八圖 千山驛長宅前にあるもの (拓本より撮影)



第十六圖 千山元兵營跡にありしもの文字を刻せるものと思はる (鞍山中學校所蔵・現地にて撮影)

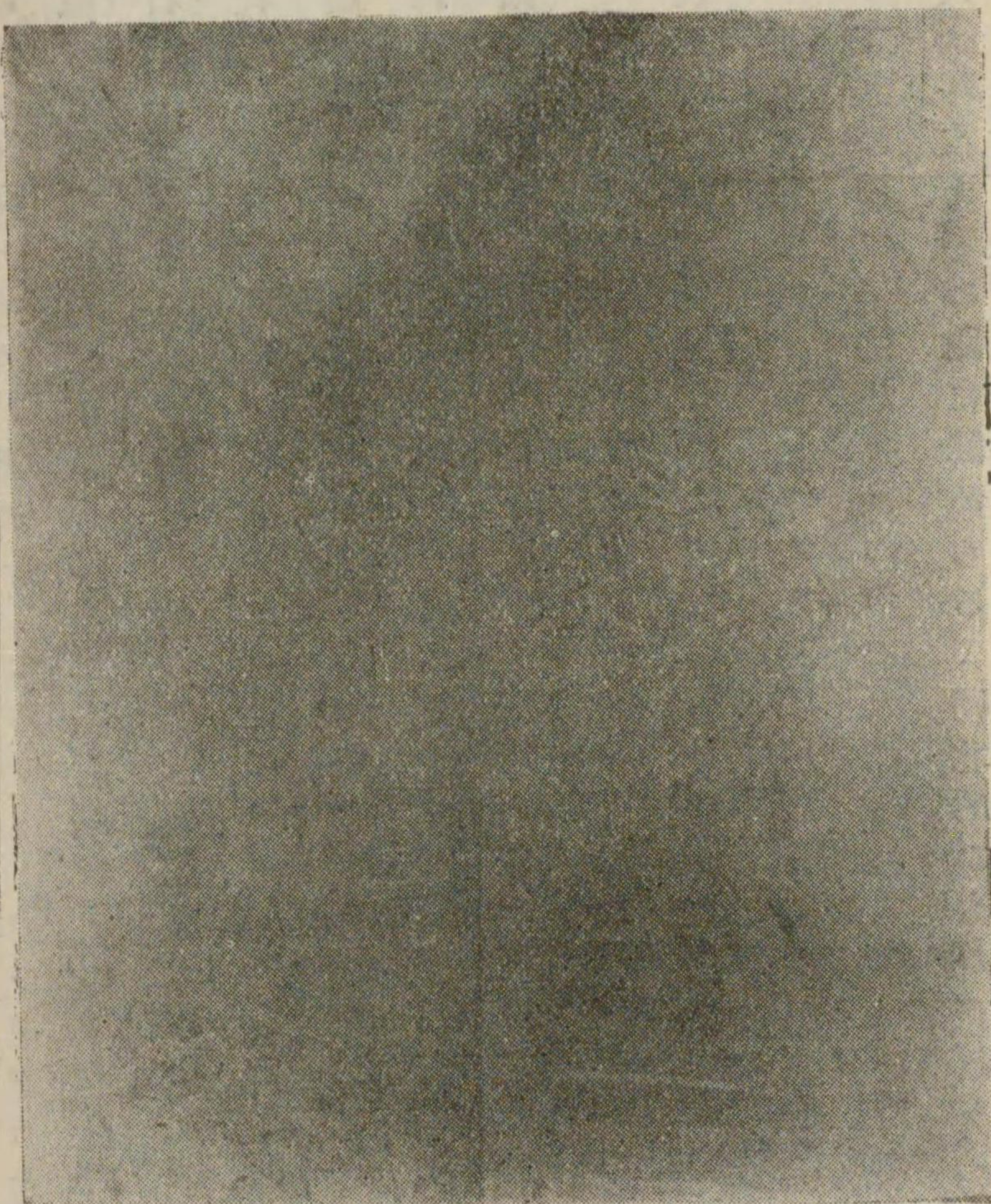


ニツクと稱する書體のやうに思ふ。

第十七圖 右終つて、それから更に停車場附近の千山神社に行く。其の境内に畫像石が一つ立てられて居る。此の畫像石は中央に男女を描き、男の側には男の従者か一人立ち、女の側には女の従者が一人立つて居り、中央の人物の一人に腰に丸い巾着の如きを下げ、共に筒袖であつて、中央の女は王妃のやうに思はれる。王及王妃の後には一本の樹があり、其側に鳥が飛んで居る。

第十八圖 千山神社附近に、千山驛長の官舎がある。其の前に一つの畫像石が立つて居る。之は一人の男が中央に居り、其の側にも一人立つて居る。これは王及王妃の如く矢張り思はれる。其の傍らに侍女の如きものが跪づいて居る。王及王妃は袖の中に手を入れて居る。王の左の上には長方形のものがあつて、其の中に子供が搖籃の中に入れて居る。斯の如き搖籃は今日蒙古人、土耳古人等の間に認めらるゝ朔北的のものである。

第十圖

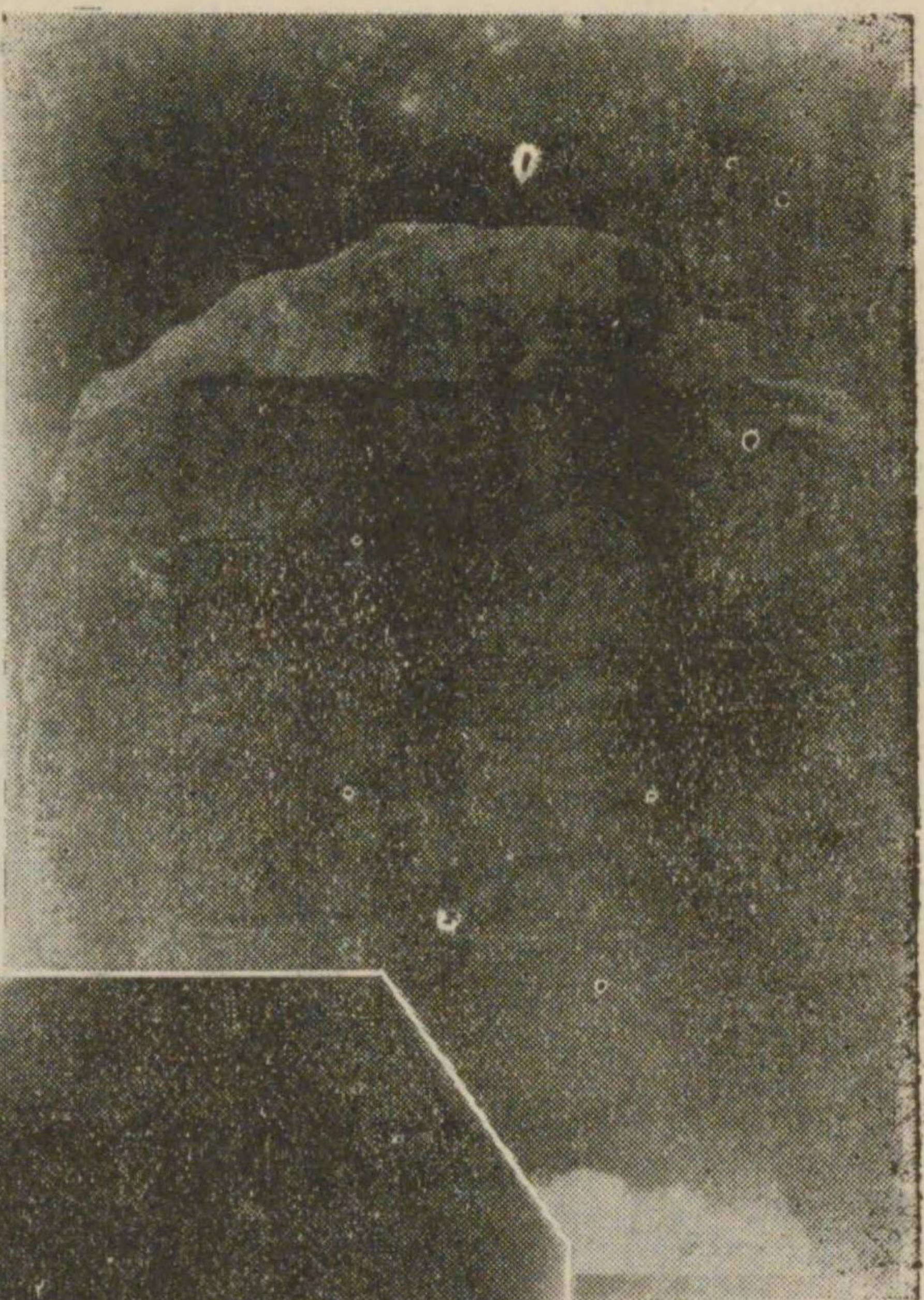


此の所を暫く行くと、観音堂がある。観音堂に二つの畫像石を保存してゐる。一は左の如きものである。

第十九圖 之は男女相對して立つて一人は筒袖に長い靴を履き、一方は女性が子供を抱いて居る。此の圖様は前の第十八圖のものと關係があるやうに思ふ。即ち第十八圖の搖籃にしばらく置かれた子供は、此處に成長して母が抱き父なる人が見て居る所である。さうすると、此の圖は前圖の連続であり、何等か子供を中心として劇的場面が現はれて居るやうに思ふ。

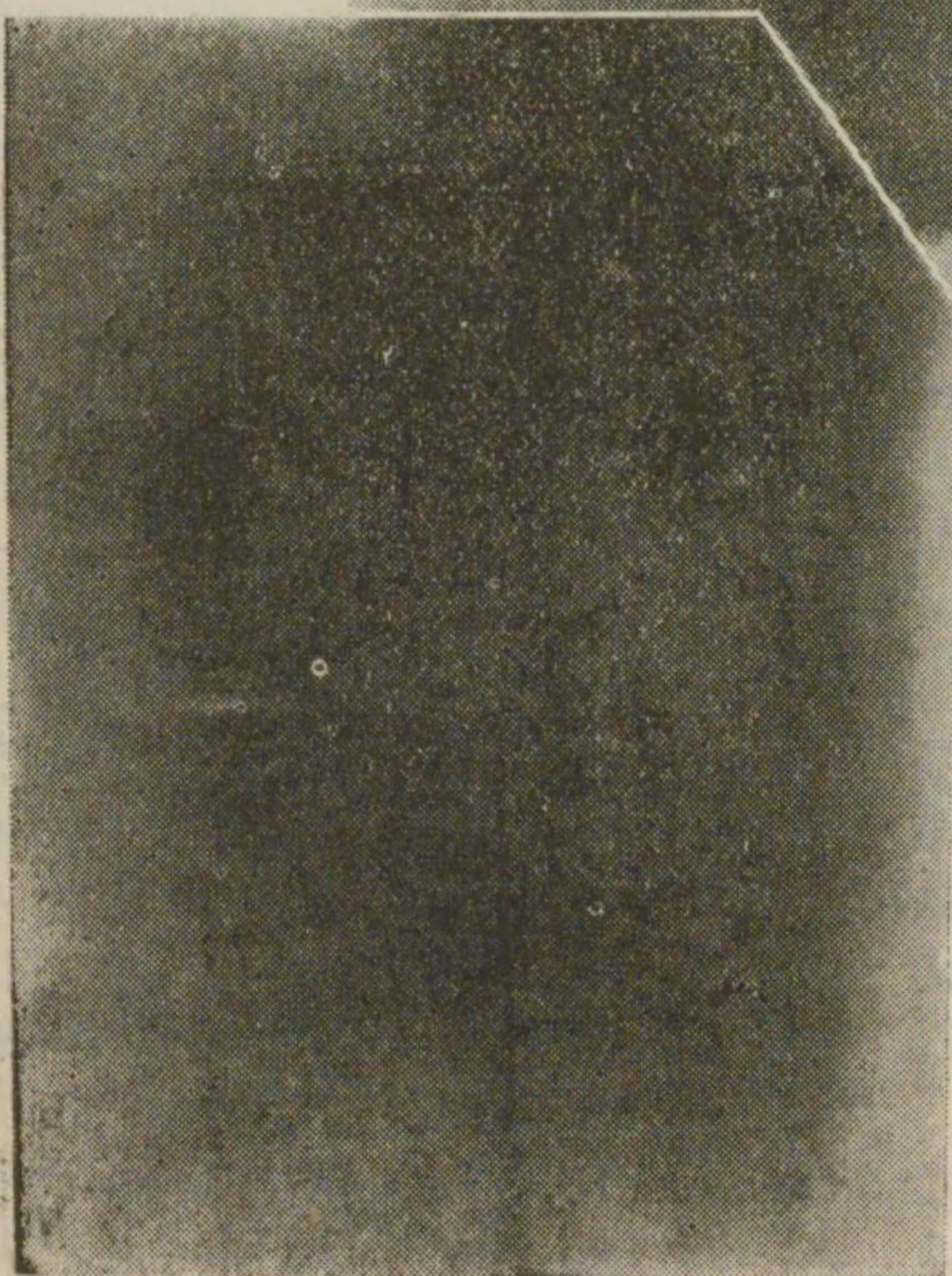
第二十圖 寺の尙一つの畫像石は、其の圖様、上に雲を描き、其の下に蒙古人の如き帽子を冠り、筒袖の男が坐し、其の側に鳥籠の如きものが見える。之は正しく天幕の家屋を示したものである。此の圖様は餘程よく朔北の佛を示して居る。

第二十一圖 私は矢澤梅本兩氏と千山驛を出發し、再び鞍山驛に下車し、之



(第二十圖)

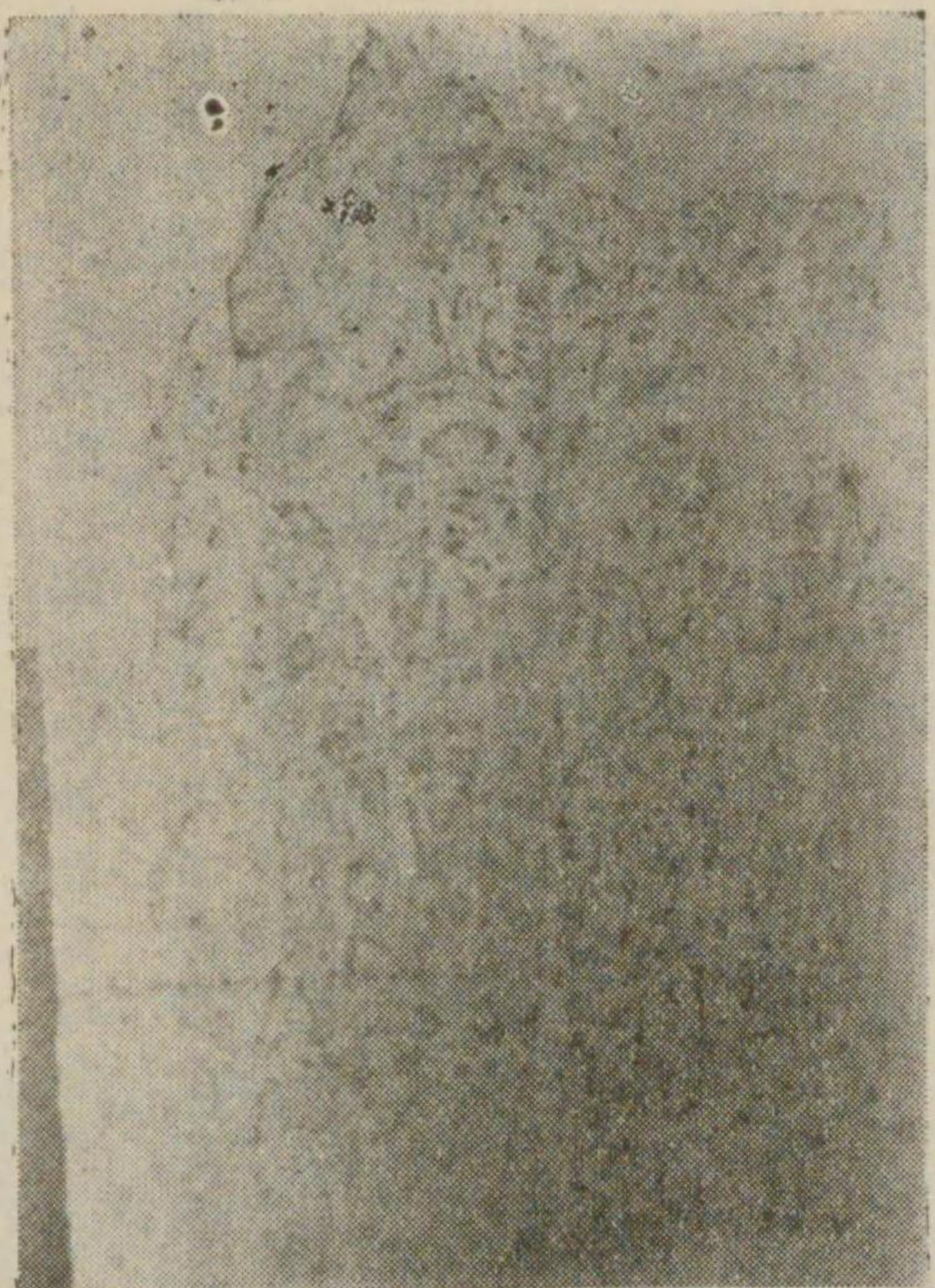
(第二十一圖)



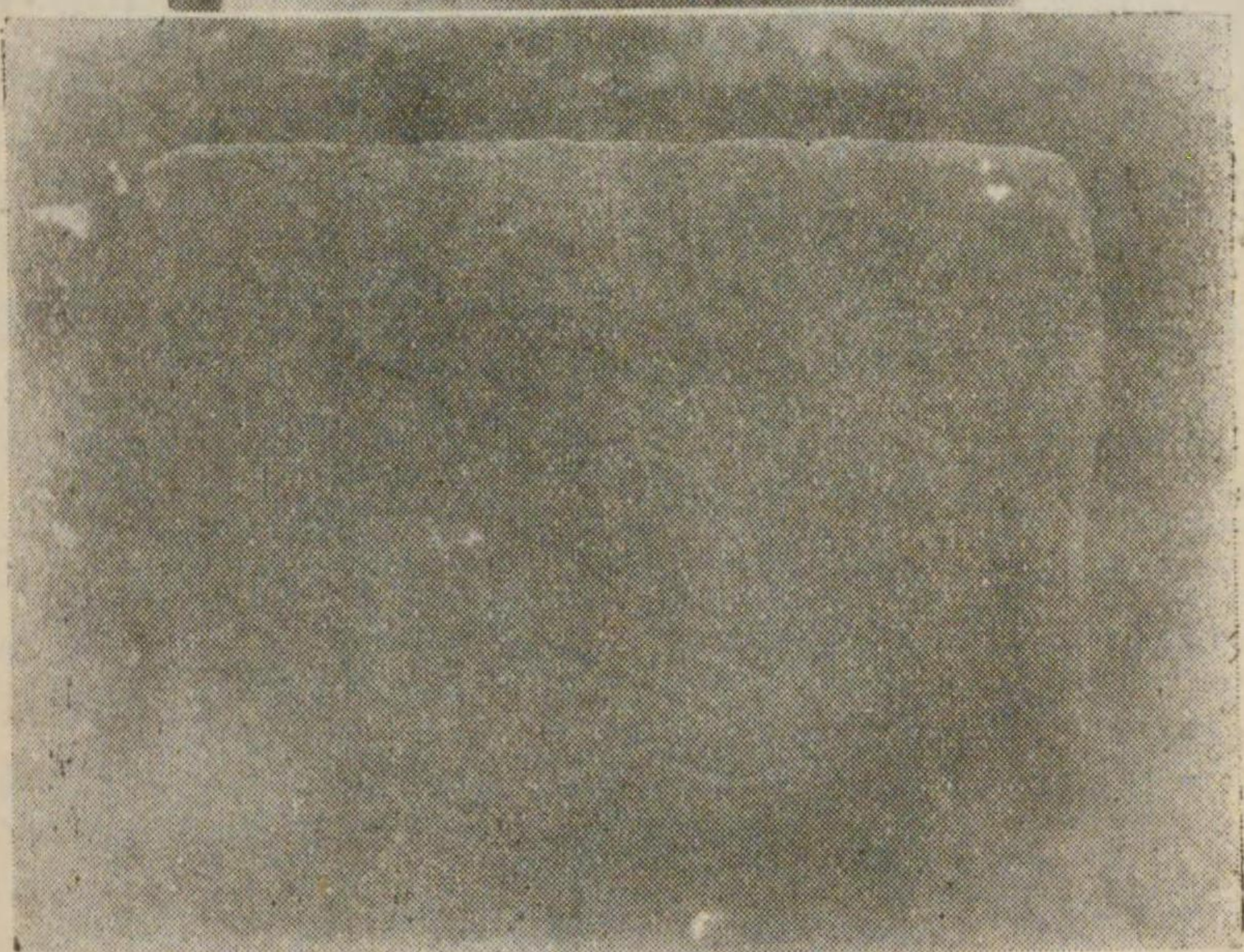
から同市街にある畫像石を調査した。先づ眞言宗寺院に保存する畫像石を見た。此の圖は輪廓を畫き、唐系を模様とし、輪廓内に寺院の如き家屋が一方に望まれ、其の前に錫杖の如きものを杖にせる僧侶が立つて居る。其の前に筒袖を着た男が馬より下りて禮拜をして居る。其の男は一方の手に馬を牽いて居る。馬を牽き禮拜せる状態は今日蒙古人・土耳古人間に見る形である。而して寺院が瓦葺になつて居ることは注意を要する。僧侶の服裝、錫杖を有せる有様は、彼の朝鮮に存在する高句麗の壁畫に見る所のとよく似て居る。是等の人物、寺院の上には例の雲が描いて居る。

第二十二圖 右の處から更に其の附近の日蓮宗寺院に行つた。此處にも畫像石が一つあつた。此の畫は中央に王の如きものが盃を手にして坐し、側の一人は従者であらうか、之に酒をつがんとして居り、傍らの一人は立ちて見て居る、が之も従者と見るべきである。

(第十七圖)



(第二十二圖)



畫像石は以上のものが、今日私の知つて居る總てである。一體以上の畫像石の圖様は何を意味せるかと云ふに、之は風俗畫と宗教畫との二が含まれて居るやうに思ふ。けれども此の畫像中に、錫杖を持つて居る僧侶の外は佛菩薩等を示して居るものは一もない。其の寺院の如きものや、地獄のやうな場面蓮華等によつて、佛敎的色彩のあるものであると云へるのみである。而して、雷の如きは、之れ明かに支那の説話に屬するものであつて、這是確に漢民族から入つた傳統と見てよい。殊に太鼓を背負へる有様は、之は他の民族が容易に斯ることを想像するは出來ないものである。大體から云へば、もとより此の畫像石は漢民族の影響佛敎の關係等を認めらるゝけれども、又一方から見れば、此等畫像石に一種特有の所がある。

先づ風俗の點から云へば、襟を前に合せ長袖の漢族の風も畫像中に認めらるゝけれども、其の多くは筒袖長衣の胡服を着し、頭には一種の冠物があり、足

には長靴をはいて居る。是等は確かに朔北の風を示したものである。而して馬の乗り方や牽き方や、駱駝・毛氈の移動車・搖籃等は明かに朔北的である。されば此の風俗の有様畫像石の存在する地方等の上から、之が北方民族のものであることは知り得られる。

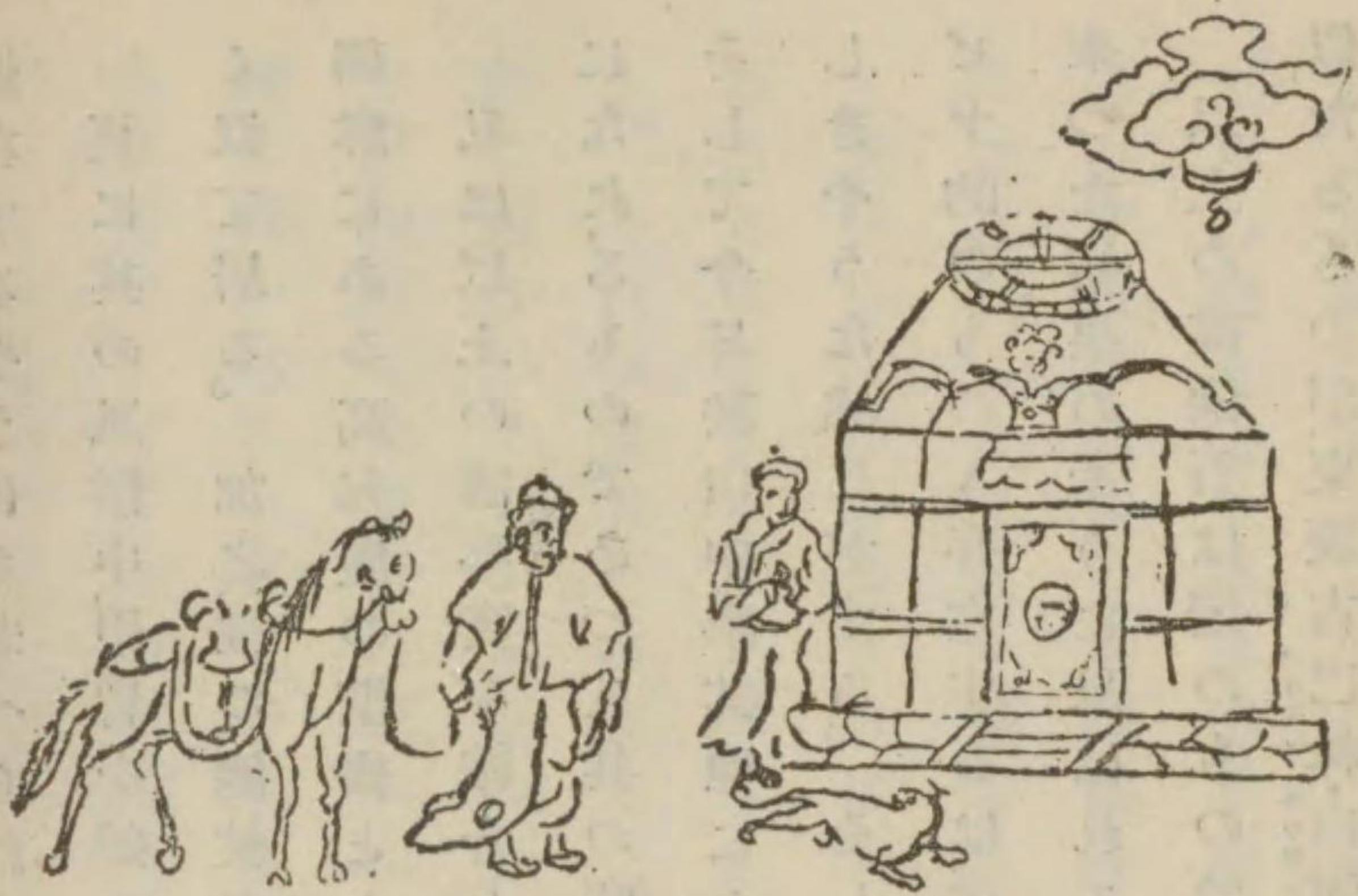
尙茲に注意を要するは、其の圖様である。此の圖様は漢族の感化を蒙つてゐることはもとより明であるが、同時に茲に最も珍らしく思はれることがある。それは畫像石の多くに、一種の焰の如き雲の描かれてゐることである。此の雲はサラセン人等の手になりし圖畫の上に著るしく現はれるのである。之が鞍山の畫像石に現はれて居るのは餘程注意を要する。更に畫像石の周圍に描かれたる唐草の如き、又サラセン式の所がある。實に其の圖様の如きも、波斯・アラビア的の説話の所があるやうにも見える。殊に場面に子供の搖籃に入れるもの、其の成長し母なる人の抱ける有様などは、又基督教的説話の

混在するやうにも考へられる。

更に其の風俗中、甲冑を鎧へる武者の状態は、突厥・靺鞨・遼・金・元等のそれによく似て居る。加之、彼の錫杖をつける僧侶の如き、盃を手にする人物の如きは朝鮮にある高句麗の壁畫とよく似て居る。

私は以上の諸事實を綜合して、此の畫像石がモンゴル或はツングースの手になれるものであつて、其の時代は蓋し遼の初期邊りのものと考へられる。そして今日鞍山中學其他にあるものが稍々古く大連にあるものは稍々新らしきやうな感じがする。そして其の文字やうのものや、其の圖様に波斯・アラビア的のものゝ存在するは、這は當時西方に存在せし突厥の文化が茲に入り來つた結果のやうに思はれるのである。

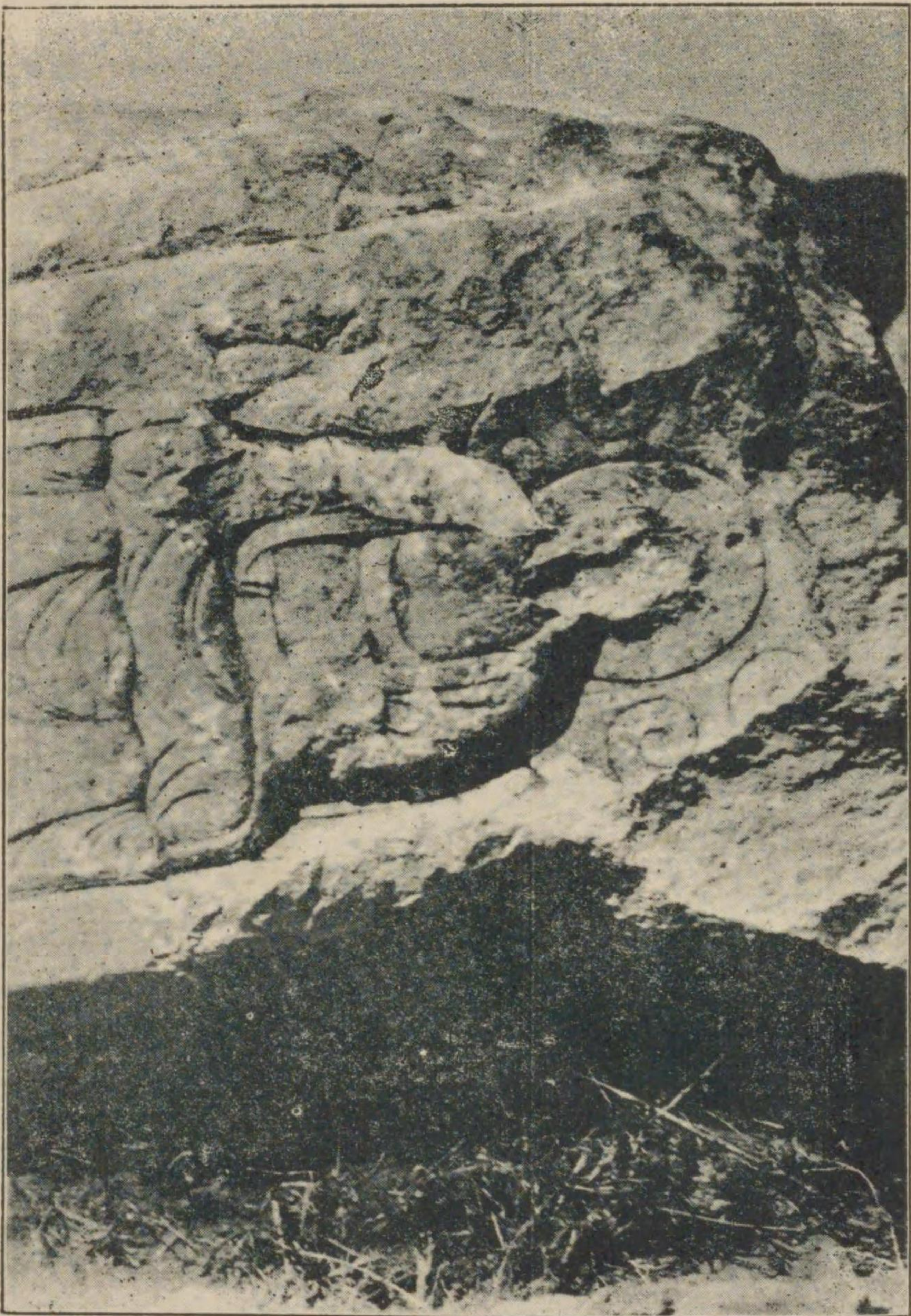
以上の畫像石は遼のものであると考へるが、之に對して面白くことは、之に似たるものが、東蒙古巴林・白河の上流、興安嶺内の遼行宮内に、寺院の跡があつ



蒙古人の畫しき繪

て其處に圖の如き佛像を彫刻した石がある。此の佛像に就ては別に言ふべきこともないが其の像の上左右に雲が描かれてゐる。此の雲は鞍山の畫像石に稍々似通つた節がある。之は遼と關係あるといふことに就て多である。此の圖は蒙古人の畫人に描かしたものであるが、彼等は圖の通り雲を描いた。此の畫風は蒙古人の古から書く傳統的畫で少之れが參考になるものと思ふ。

今日の蒙古人の描く畫を見ると其の畫の上に等しく雲を描いて居るのである。之は左の圖がそれあつて、由來彼は契丹と同族の



蒙古巴林内宮に佛石るおに注意せよ

血脈的關係を有つてゐるから、此の畫風が尙今日に残つて居るといふことも亦大に研究する餘地がある。

第三十章

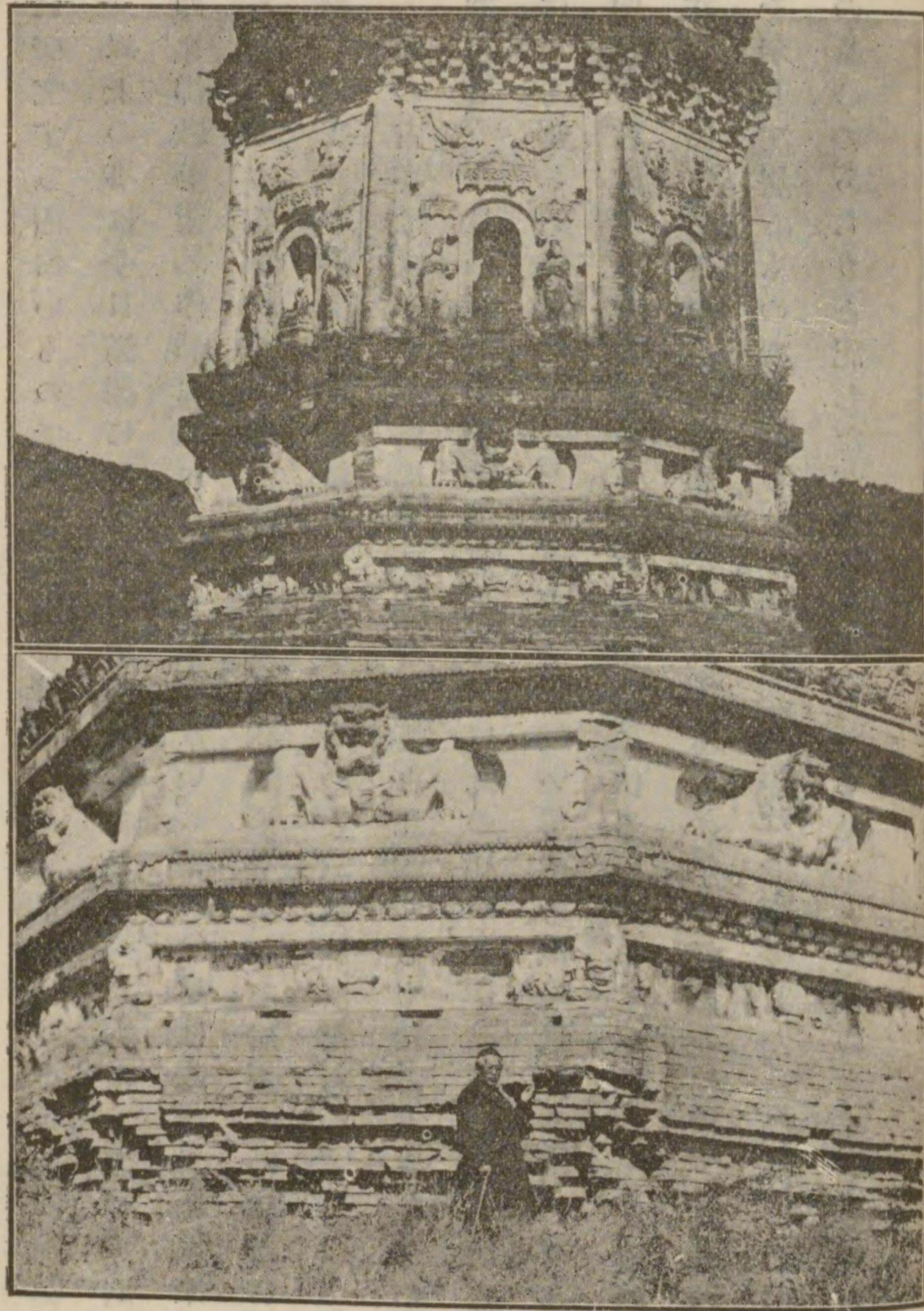
(一)

滿蒙の文化史上最も注意すべきは、契丹即ち遼の文化である。遼の今日遺跡として認むべきは、東蒙各地に其の寺院の跡、博塔、土城等が遺つてゐる。而して其の附近を探查すれば、其の時代の遺物が存在して居る。前章に於て記した如く、遼の文化は遙かに金のそれよりも進歩發達して居つて、斯學上最も研究するに價がある。今茲で其の一例を、博塔に於て述べやうと思ふ。

先づ滿洲の博塔から初める。滿洲の各地に是等の博塔が遺つて居るが、是等は主として遼時代のものであつて、之を見ても如何に當時佛教が行はれ、又之に伴つて其の藝術も發達して居つたかを知ることが出来る。其の中で茲に一例として、拆木城附近に存在する博塔に就いて述べて見たい。

拆木城附近に鐵塔と稱する古塔が立つて居る。尙此處を離れた所に鐵塔

及び金塔と稱する塔も存在してゐる。私は是等の三塔に就いては、既に第一回の探査の時に發見し、聊か之を研究して私のスケッチを附して、當時の雑誌『太陽』に載せたことがある。私は當時是等の塔を以て唐代のものとして居つた。私は今回拆木城にドルメンを再び探査する機會に是等の塔の所に行つて尙聊か調査をして見た。私は今回専ら其の一の金塔に就いて注意を拂つた。此の金塔と稱するものは、左に掲ぐる寫眞の如きものであつて、塔は主として博より積み重ね、その下の正面には各々佛菩薩を出し、其の上に天蓋をつけ、其の上に飲食の鉢を捧げた相對せる天人を示して居る。佛菩薩の下には蓮華座を設け、其の下には獅子が之を支へ、其下には更に金剛力士が肩を以て其の臺座を捧げて居る。其の金剛力士のある周圍に、技藝天女が樂を奏して居る圖を示して居る。之にはいろいろの樂器を奏で、居り、又それにつれて、天人の舞踊をして居ることを示して居る。是等の天人の風俗姿勢等は、大



寺塔金(圖下) 刻彫の寺塔金(圖上)

に研究する面白いものである。

以上の塔は、今日滿洲に存在する博塔中最も見るべきものであつて、斯くの如き佛教藝術的作品は他に存在して居ない。他の博塔は大變よく出来て居るものもあるけれども、斯く複雑する佛教藝術を示して居るものはない。此點に於て、此の塔は斯學上最も大切なるものと云はねばならぬ。

此の古塔は、之を支那洛陽長安等の博塔と比較するも、殆んど遜色ないものである。今日滿洲の如き廣漠たる土地に此の藝術的作品の遺つて居ることは最も嬉しい感じがする。此の古塔に就いて金塔の附近に廟があり、其處に明代の古碑が立つて居る。此の碑の文に依ると、此の塔が元代の當時既に存在してゐることを記して居る。けれども此の塔の様式を見ると、唐代のそれを示して居るものである。私は既に『太陽』で発表した時滿洲の塔が唐代のものであらうと記したが、それは今日から見ると遼代のものであるといふ

考へになつて來た。之には種々の理由がある。其の事は後に記述する考へである。そしてたゞ此處の塔のみは、尙當時の意見の如く唐代のものとしたい。けれども注意すべきことは、佛菩薩の像などは明かに唐代の佛を残して居るけれども、技藝天人其他のものを見ると之より稍々下つて居るやうな感じがする。之は少くとも唐代のものには相違ないが、唐の初代を稍々経過したものであつて、遼の初期に通つて居るやうに思ふ。

之は俗傳ではあるが、此の塔に就いて滿滿一般の人々の語る所によれば、唐の太宗は高句麗を征服した當時に數多の彼等を殺戮したから其の死靈を吊はんが爲めに、茲に博塔を建立したと云つて居る。這はもとより俗説で取るに足らない考へであるけれども、由來滿洲は高句麗の居住した土地であつて之を太宗が滿洲から更に朝鮮に兵を進めて之を征服したことであるから、此の説の起るのは尤である。而して以上塔の様式から見て、其の年代も略々一

致するやうに思ふ。是等は何等かの暗合であらうと思ふけれども、兎に角其の傳説と此の塔とが合するやうに想ふ。

私は此の塔に就いて遼としては最も初期のものと認めねばならぬ。けれども遼の太祖の時には未だ斯くの如き塔が果して建られたか、どうか疑問である。然らば之を渤海にもつて行くべきものであらうか。將た唐が高句麗を征服した後に唐の勢力が此の土地に及んだ頃に、之をもつて行くべきであらうか、此の點に就て私は大に疑を挾むものである。そこで私の今日の考へでは此の塔は少なくとも唐太宗以後に建立せられたもので、之が後に至つて屢々重修せられたものである。這是此の博塔が、各時代の様式を重修の上に加へられたるの故を以て知ることが出来る。兎に角、此の塔は滿洲に於て最も古い塔のものに屬する。(蒙古の朝陽には唐代の四角形の塔がある。)

いづれ此の事に就いては他日別に之を一論文として發表する考へである。

以上塔に於ける佛教藝術の上から見れば、此の様式は支那佛教の様式と少しも違はぬのであつて、之を支那本土のものと比較して、殆んど同じである。斯る塔は遼西から東蒙古一帯に存在して居る。是等の事實から見て、當時如何に佛教が行に行はれて居たかといふことが知られる。

要するに、滿洲遼西、東蒙古等に於ける博塔の中心地は何處であるかと云ふと、それは遼河の上流東蒙古の巴林バリンの地が本據地である。此處に遼の上京行宮が存在して居る。されば滿洲の塔の如きは又此の巴林の上京より線を引いて見ねばならぬ。塔の中心地は實に東蒙古である。遼の盛んな時は滿洲は東蒙古の領地であつたのである。

遼の上京の位置は前は遼河の上流シラムレン河畔に存在し、其の後は興安嶺に接して居る。此處には遼の當時には立派なる都が存在して居つたのである。従つて寺院も多くあり、之に塔も建つて居る。上京にはもと夥しい塔

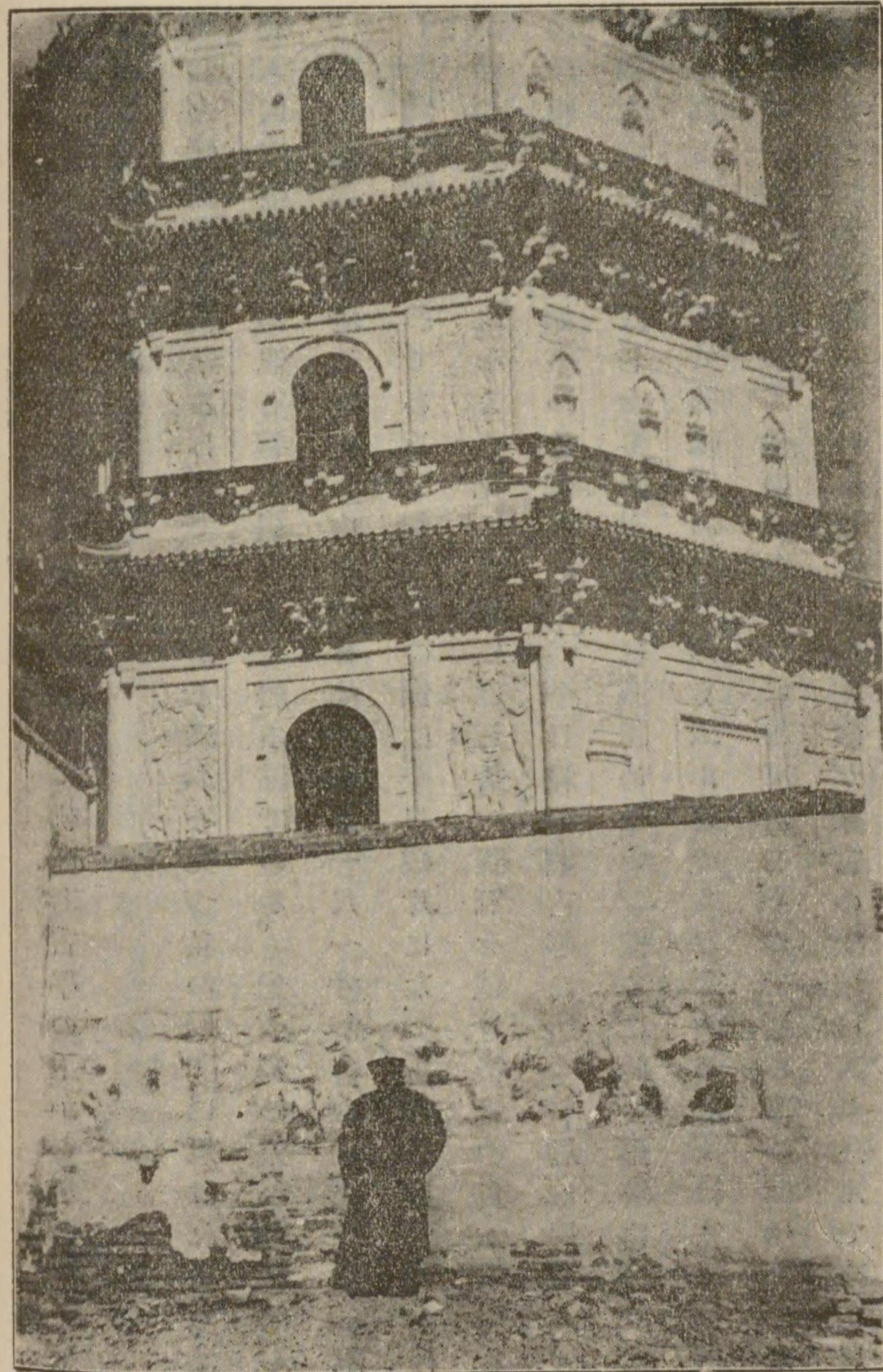
があつたであらうが、今日は多く破壊し、其中稍々完全に認めらるべきものが一基存在して居る。尙遼の行宮には、完全なる博塔が一基建つて居る。此の塔は白く塗られて居るから、一名白塔子チヤカシヤウツカと云つて居る位である。是等の塔は滿洲乃至遼西に於ける博塔と共に、比較すべきものであつて、而も之は時代的標準を示すものである。

(II)

尙ほ塔に就いて記さねばならぬのは、東蒙古上京に在る博塔である。此の博塔は線を以て積み重ねて居ることは、他と少しも違はないが、佛菩薩天人、金剛力士等の像は、赤き花崗岩の板石に之を半肉刻に彫刻して居つて、其の板石を博塔に嵌め込んで居る。以上板石が長い間の風化、重力等の爲めに、地上に落ちて居る物が少なくない。私も當時その二三を採取して、東京帝國大學に

持ち歸つて居る。此の佛菩薩天人に就いて、佛教考古學の上から私は聊か意見をも有するものである。

此の疑問は如何なるものであるかと云ふと、先づ私の疑問に思はれるのは佛天人等の様式が他と聊か相異して居る點である。先づ佛の方から云はんに、私の採取して居るものゝ中に、大日如來(高さ一尺一寸)がある。之は左に記した圖が即ちそれである。即ち此の像は、今日破片になつて僅かに頭部だけが残つて居る。之をよく見ると、頭には五智の寶冠を戴き、後光を負ふて居る。之は明かに大日如來の尊像である。今日滿洲蒙古等に遺つて居る博塔で、大日如來の像を現はしたものを何處にも認めない。然るに此の博塔に於て認められるのは極めて興味がある。抑も云ふまでもなく、大日如來は密教たる眞言宗の本尊であつて、他の佛教各宗に於て之をもつて居るものは殆んどない。さうすると、遼の當時に於て、既に密教が蒙古の土地に入り込んで來て居



塔塔るあに宮行遊林巴古蒙

四〇六

たことを考へられる。之れ歴史上最も注意を要すべき事實であると思ふ。密教眞言宗は唐の初期から支那唐京に於て、新に興つた所の宗教であつて之が段々支那各地に傳播せられ、我が弘法大師の如き又唐京に於て此の教を受け、更に面白いのは天臺宗の如き、又天臺に交ゆるに此の密教をも加へるに至つた。遼に既に大日如來の尊像があるとすれば、當時新勢力を得た密教は尙東蒙古方面にも行はれたことを知るに敢て難くはない。一體滿洲を初め東蒙古に次で尊勝陀羅尼石が存在する。遼の行宮に於ても、私は之を發見した。尊勝陀羅尼は密教とは關係が深いから是等も密教の行はれたことを物語るものである。

密教は他の佛教各宗と相違し、加持祈禱を行ふものであつて、此の點は一般の民間信仰に投じ易い性質を有つて居る。我が平安朝當時に於ては、宮中の如きすら加持祈禱を専らにし、求子・安産・求福物^{もの}・怪退散^{もの}・病氣平癒等は皆之れ密

教と深い關係を有つて居つた。之は日本の固有宗教たるシャーマン教と、同一の行動を取つて居たものである。遼の契丹人も由來シャーマン教が固有の宗教である。眞言宗は又加祈持禱の上に、之れに似て居る所がある。されば密教が契丹人に喜ばれる性質があつて、當時の俗人は密教もシャーマン教も、同一の考へで、信仰して居たものではなからうか。又遼の王宮貴族等も此の考へで信仰を有つて居たものではなからうか。要するにシャーマン教といひ、密教の加持祈禱といふとも、彼等民衆の眼から見れば、同一のものであつたらう。兎に角、當時新宗教たる密教が、契丹の地に入つて來たといふことは實に興味があることであつて、朔北佛教史上大書特筆すべきものゝやうに思へる。

喇嘛教は、西藏より蒙古に元時代に入つて來、遂に國教としての勢力を占め、今も尙引續いて此の信仰を有つて居る。けれども由來、彼等の固有宗教はシ

ヤーマン教であつた。彼等は今日喇嘛教を信仰して居ると雖も、彼等一般俗人の信仰はシャーマン教に於けるが如く、現世の希望を充すのが主である。此の點に於て契丹人が密教を信仰したも同じ状態であるやうに思はれる。而して契丹人の密教と、蒙古人の喇嘛教とは、非常に信仰上似通つた點があるのみならず、此の兩民族は人類學上同一民族に屬するのである。さうすると喇嘛教の蒙古人に行はれた其の先驅者は、契丹の密教にあつたと云はねばならぬ。學識ある僧侶は別として、一般俗間の者より見れば、密教も喇嘛教と皆同一に見られるのである。

(三)

更に注意すべきは、天人の様式である。私の大學に採集して來て居る天人(高さ七寸)は殆んど全形を保存せられて居る。圖様は天人が飲食の鉢を兩手



四二

で捧げて居るのであるが茲に注意すべきは、此の天人の肩の所に羽根の生えて居ることである。抑も支那本土及び日本に傳はれる天人の肖像を見るに何時も翼をもつて居るものがなく、何れも薄衣の鱗の如きものを肩からかけて、空中を飛ぶ時に柔らく之が動いて居る様を示して居るのである。(唯だ伽陵嚩伽のみは羽翼を持つて居る然るに遼の天人を見ると羽翼をもつて居る。這は面白い事實のやうに思ふ。

滿洲遼西等にある博塔に示されて居る天人は、何れも支那式である。獨り此處のものゝみ羽翼のあるのは、何ういふ理由であるか、之れ研究を要するところである。

佛蘭西の佛教考古學者フツセ氏は印度の北部、ガンダラの天人に羽翼のあることを發表して居るし、又獨逸のグリユウエデル氏は、北印度の佛教藝術中に羽翼のあるものは波斯の影響を受けて居るものと言はれて居る。此の印



度の北部ガンダラ佛教藝術品に、羽翼の生えて居るものゝあるは注意を要する。更に近時スタイン氏が支那トルキスタンに於て、羽翼を有する童子の像を發見して居る。是等もガンダラ式の影響を受けたものと言はねばならぬ。由來印度の北部ガンダラに興つた佛教藝術は、希臘・波斯の影響を受けたものであつて、之が次第に中央亞細亞の方に進んで居る。是等の事實は今日佛教考古學の上に於て明かに認められる所である。

然るに遼の上京にある天人に羽翼をもつて居るものゝ存在するは、又以上と關係を有するものたるや明かである。さうすると遼の文化の中には、其の西方の文化を有つて居ることが知り得らるゝのである。此の點に於て遼の文化の分子は非常に複雑したものを包含せることが推知せらるゝのであつて、文化史上最も深い考慮を要するのである。

北滿・東蒙と基督教

金の古城の中からいろいろの物が發掘せられる。其中で面白いのはシャーマン教の銅製人形である。これは小さなものであつて、上の處に穴があき之に紐がつき、首に掛けて護符のやうにしたものである。又之を恭しく布類皮類等で包み、神像として所持することもある。現今の蒙古人の中にも、之と同じ像發掘品を所藏しシャーマン教の巫女が、之を神像として鏡と共に崇んで居る。私はこの事實を東蒙古扎魯特^{チハルクト}で調査したことがある。蒙古人は之を稱して、オンゴツトと云つて居る。金の遺跡からは是等のオンゴツトが盛んに掘出される。私も今回之を三個ばかり買ひ求めた。

尙金の上京から盛んに鏡を掘出したものである。今は殆んど取り盡され、私の今回探査の際には、一品も手に入れることが出来なかつた位である。斯

くの如く、金の居住地に鏡が多く存在してゐるのは、何故かといふと、是等の鏡は化粧用にしたものでなく、何れも宗教上の儀式に用ゐたものである。それは金の時代には、シャーマン教の巫女が神前で祈禱をする時に、神が巫女に乗り移り、或は死霊がのり移つて狂亂のやうになる。而して遂に悪霊、死霊等を退散せしむるのである。之をなす儀式は一人の人が傍らで太鼓を叩き、巫女は手に鈴の如きものを持ち、神前で舞踊をなす。其の時腰には五六枚の鏡を革帯に下げる。之を稱して腰鏡と云ふ。其の腰にまた原始的鈴をも付ける。是等が神賦りになり、巫女が熱して來ると盛んに舞踊し、其れが爲めに腰の鏡が光りを發し、相觸れて一種の音響を出す。之は彼等の最も尊嚴なものとして崇ばれて、悪霊、死霊を退散をさすのである。斯る關係から鏡が存在して居るのである。此の風は、今日の黒龍江方面のツングースから西比利亚一帶の民族の内にも行はれて居る。又、日本の上代に於ても、此の風があつたことは

埴輪士偶等にも鈴鏡を腰につけて居るのが認められる。

以上のオンゴット或は鏡等の上から、金人が其の當時宗教用として是等を盛んに用ゐたことが分る。此の事實は、即ち彼等が其の固有宗教たるシャーマンを如何に深く信奉して居たかを窺ふに足る。

彼等は固有の宗教として、シャーマン教を信仰して居つたけれども、當時既に佛教が此の土地に入り、上流社會から中流社會にかけて、之が盛んに行はれて居つたことは言ふまでもない。考古學上から之を見ても如何に彼等の古城内に寺院の跡があり、又佛像を初め寺院に關する碑文の存在して居ることから以て見るも知ることが出来る。文獻の上からは固よりである。彼等は實に當時シャーマン教を信仰すると共に、又新宗教たる佛教をも信仰して居たのであつて、此の二つの宗教が相混がらかつて居たのである。

茲に言ふべきは、更に彼等の間に、基督教が入つて居たであらうといふこと

である。私は之に就いて聊か疑問を有つてゐる一人である。それは私は金の上京に於て金屬製の十字架の發掘せるものを見た。又、洮南附近、洮兒河畔の遼金古城内にて金屬製十字架を一個採取したのである。以上の十字架は何れも金(遼)の古城内に存在するのであつて、是等は彼のシャーマン教の神像たるオンゴツトと共に發掘せられるのである。此の事實から見ると、此の十字架が少くとも金時代に屬することは明かである。果して然らば、基督教の影響は既に金時代の當時に於て、北方に行はれて居たものと見ねばならぬ。之と共に彼等金人はシャーマン教、佛教と共に、又此の新教の信仰者であつたやうな氣がする。

抑も元代に基督教が、北方民族としての蒙古人に行はれて居つたことは、今日考古學の研究に依り、蒙古各地から基督教の墓碑等の發掘されることにより、知ることが出来る。蒙古の初期に於ては如何なる宗教と雖も、蒙古人及び

蒙古の領地に行はれることを默許し、少しも之に干渉を加へなかつた。今日蒙古人が喇嘛教をのみ信じて、其の他の宗教を信仰することを許さないのは、之は喇嘛の勢力が強く壓制的に民衆を壓迫する結果である。元の初期には決してかゝることはなかつたのである。

抑も蒙古に基督教が何時のころから入つて來たかといふと、一千二百五十二年(日本、後深草天皇建長五年、支那の宋の理宗の寶祐元年)に佛蘭西のルイ王九世は、蒙古王朝に基督教の僧侶ルブルツキー(Rubruquis)を派遣した。此の時の王都は外蒙古のカラコルムに在り、其の時の王はジンギス大汗が亡くなり、其後の拔都汗の時であつた。何の爲めに彼の基督教僧侶が來たかといふと、當時十字軍の盛んに出兵、遠征した時であつて、ルイ王九世はパレスチナに出陣をして居たのである。佛王は殊に基督教僧侶に親しく書面を持たして蒙古王の處に行かしめ、敵を東方から攻撃して十字軍の爲めに助力せられん

ことを請ふたのである。これに對して蒙古王から、佛王に宛てた書面が今日も尙残つてゐる。此の書翰の文言は、ウイグル文字で書いたものであるが、一千六百二十九年に羅典文に翻譯されてゐる。

以上の使節は十分に目的を達せずして還られたが、此の旅行は非常に歴史的に大切な事實で、ルブルツキは長途の珍らしい地方を旅行し、蒙古王都に着したのであるから、其の見るもの聞くもの一として珍らしいものならざるはなく、歸國するや否や旅行人情風俗及び當時の蒙古の狀態等を詳はしく世に發表した。此の報告書は今日非常に大切なもので、當時歐羅巴に於ても如何に世人を驚かしたかと云ふことを考へられる。殊にルイ王が蒙古王に助力を頼みて敵を撃つ等は、如何に世界的であつたかを考ふるに足る。

之が初めて基督教僧侶が公式に蒙古の土地に入つた最初である。其の時彼は十字架其他の物を持つて來て、各途中到る處に之を置いて行つたといふ

ことも考へられないことはなく。

同教はルブルツキ師に續いて、一千二百八十九年ルイ第九世の時に、羅馬法皇から蒙古に基督教布教として派遣せられた。這是同教の蒙古布教として最初に屬する。その時の僧侶は最初七名、同行したが途中から歸つたり死したりして、その中のコルヴァン師 (Mont-Corvin) 外二名のみ残り、非常な困難をかして目的を達し、遂に當時の元都カムバリック (Khambalik) に一千三百〇八年に達した。このカムブリックと云ふのは今日の北京である。そして師は基督教を熱心に傳導したのである。現今蒙古に残つて居る同教の遺物は専ら師からのものである。

以上に依つて見れば、元に基督教が入つて來て居ることは明かである。當時の基督教に關する遺物は北京の Favier は此の事實を圖記し世に發表して居る。又之をミュンステルベルヒ氏が近來出版した『支那藝術史』の中に

書いて居る。

元の初期に、北方に基督教が入つて居つたことは、否むことは出来ない。然らば、今滿洲の松花江上流金の上京及び東蒙古の洮兒河々畔に於て、金時代に基督教の影響が認められるのは、之は如何に解釋すべきか。金は元の初期よりも、其の以前に屬してゐる。之は大に研究を要することである。

茲に注意すべきは、彼の唐の時代に行はれた基督教の一派たるネストリアン(Nestorian)即ち景教である。抑も此の教は西暦四百二十八年から三十一年まで東羅馬の首都コンスタンチンノーブルに於て、東方教會の總管長ネストリヤスを開祖とするもので、這是正統の基督教會より破門になり逐はれて、東方に傳導することになり、其の一派は波斯に入り、波斯王の下に布教し、更にこれがアラビアに入りて回教と關係した。以上の西亞細亞から唐代に支那長安に來り、唐の各帝王の保護に依つて、之の布教を許されたのである。今日

残つて居る唐建中二年の同宗教碑文に記する所によると、同教の長安に始めて來たのは、唐太宗貞觀年間であつて、これより歴代高宗、玄宗、建宗、代宗等に至る唐朝もこれを保護布教せしめ、殊に高宗の時に至つては、高宗大帝克恭、繼祖澗色、眞宗、面於諸州各置景寺、仍山宗、阿羅本、爲鎮國大法主、法流國富、元休、寺滿山城、家殷景福と記して居る位である。之は日本の聖武帝の時に置かれた國分寺の如き状態である。而して景教は佛教の分子も取り、又儒教の祖先崇拜も取り入れ、唐の當時に於て最も民族化されたやうな宗教の形式を採つた。其の爲め此教は不知不識の間に行はれたのである。殊に此の宗教は當時唐に於て特に興つた密教と微妙な點に於て結び合ひ、弘法大師の如きは密教に加ふるに、此の景教の分子をも加へたとさへ傳へる位である。斯うして景教は唐で廢佛の興るに至るまで、これが支那内地に盛んに行はれたものと思はれるのである。

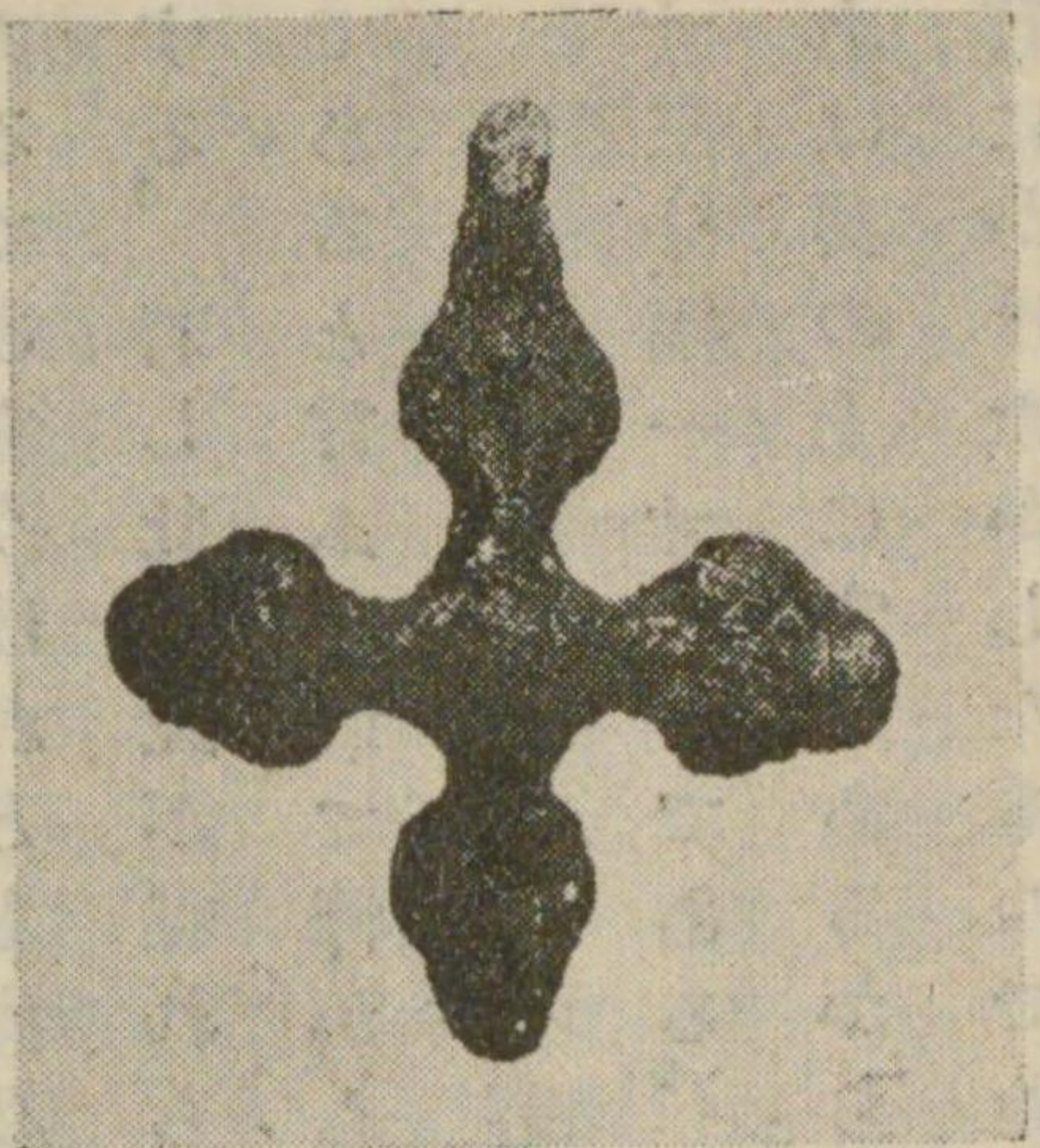
以上の景教の支那に於ける布教は、實に侮るべからざる勢力を有して各地に擴まつたことは考ふるに敢て難くない。

此の景教が、蒙古に擴まつたことに就ては、今日學者の研究により知ることが出來た。それは十二世紀頃に景教信者が既にあつた。蒙古のケライト部 (Kéraités) の酋長トグルルウング汗 (Togroul-Cung-khan) であつて、之は其の部族と共に景教の洗禮を受け、靈名をプレトルジャン (Prete-Jean) と稱して居た。此の酋長はジンギス大汗と同時代の人であつて、最初はジンギス大汗と同盟したが、千二百年彼に反對したが爲めに殺された。此の景教信者たりしプレトルジャンのことは、ルイ第九世より蒙古王廷に派遣された基督教僧侶ルブリキイ及びジョアンブイルの記す處と一致して居る。之に依つて見れば、景教はルブリキイの派遣以前既に景教に依つて擴まれてゐる。景教の擴まつた状態は、景教の碑文によつて見るが如く、支那各省に擴められた。尙

後のものではあるが、マルユボロの旅行記中に西南支那に之の盛んに行はれて居る状態を記載して居るのは大に参考とすべきである。

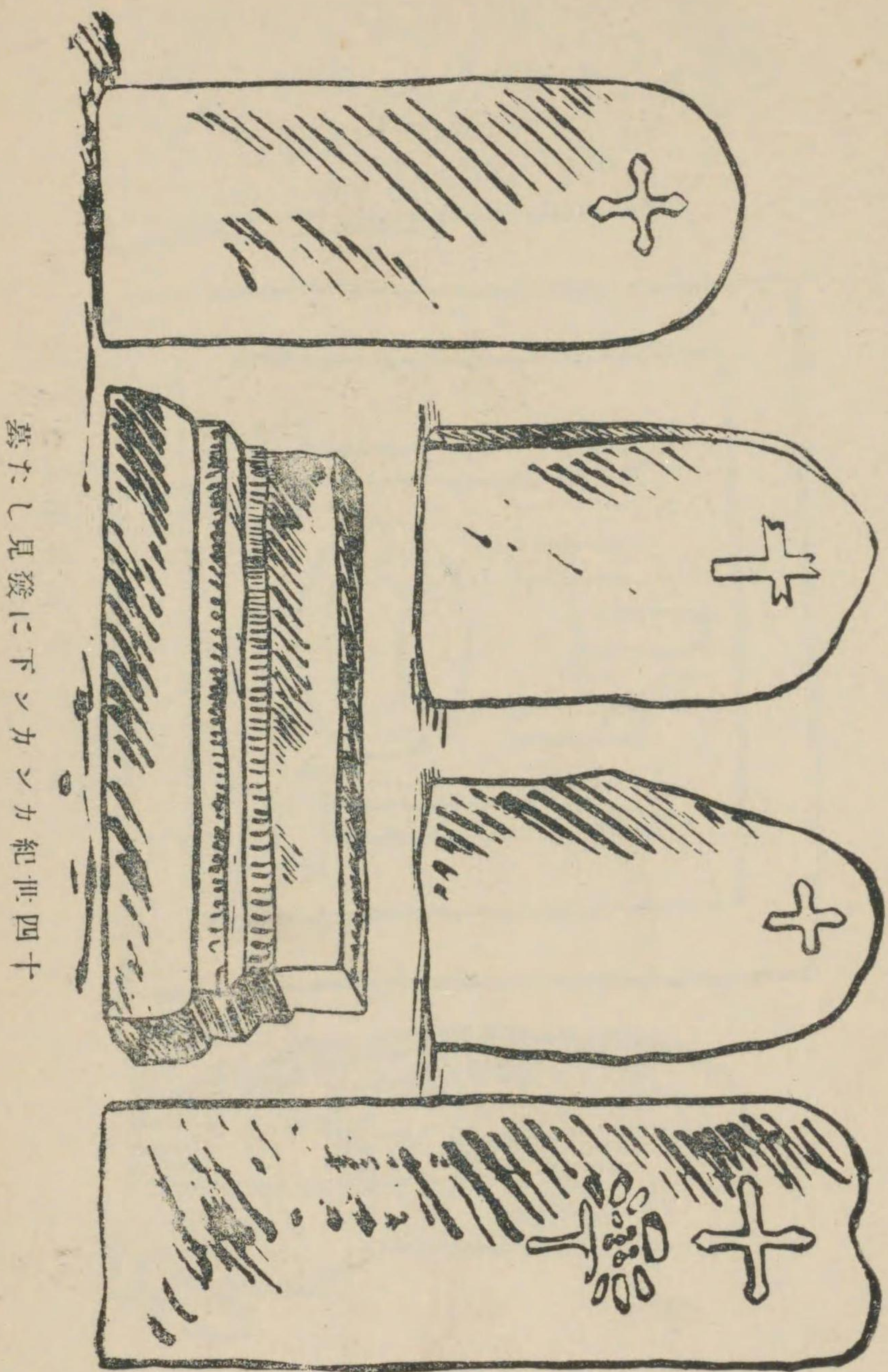
若しも、ネストリアンが全く金に影響したとすれば、此の十字架の解釋は敢て難かしいことはない。私は以上の事實に於て景教の傳導は東蒙古から北滿洲にかけても行はれたものと考へたい。而して金人は固より之に關係はあるであらうけれども、尙私は契丹人(遼)の之の傳播の中にあつたやうな氣がする。若し此の説が容れられるならば、金に於て基督教を布教したのは、景教であると言ふも敢て憚らない。

茲に圖する金屬製十字架は、洮南附近の古城より發掘されたもので、長さ一寸三分、幅一寸一分である。もと此上に鍍金でもして居たやうに思はれる。之は其の上の穴があるからコンタツの眞珠につけたか、或は穴に紐をつけて首にかけたかしたものであらう。そしてこの十字架は (rois aux branches en

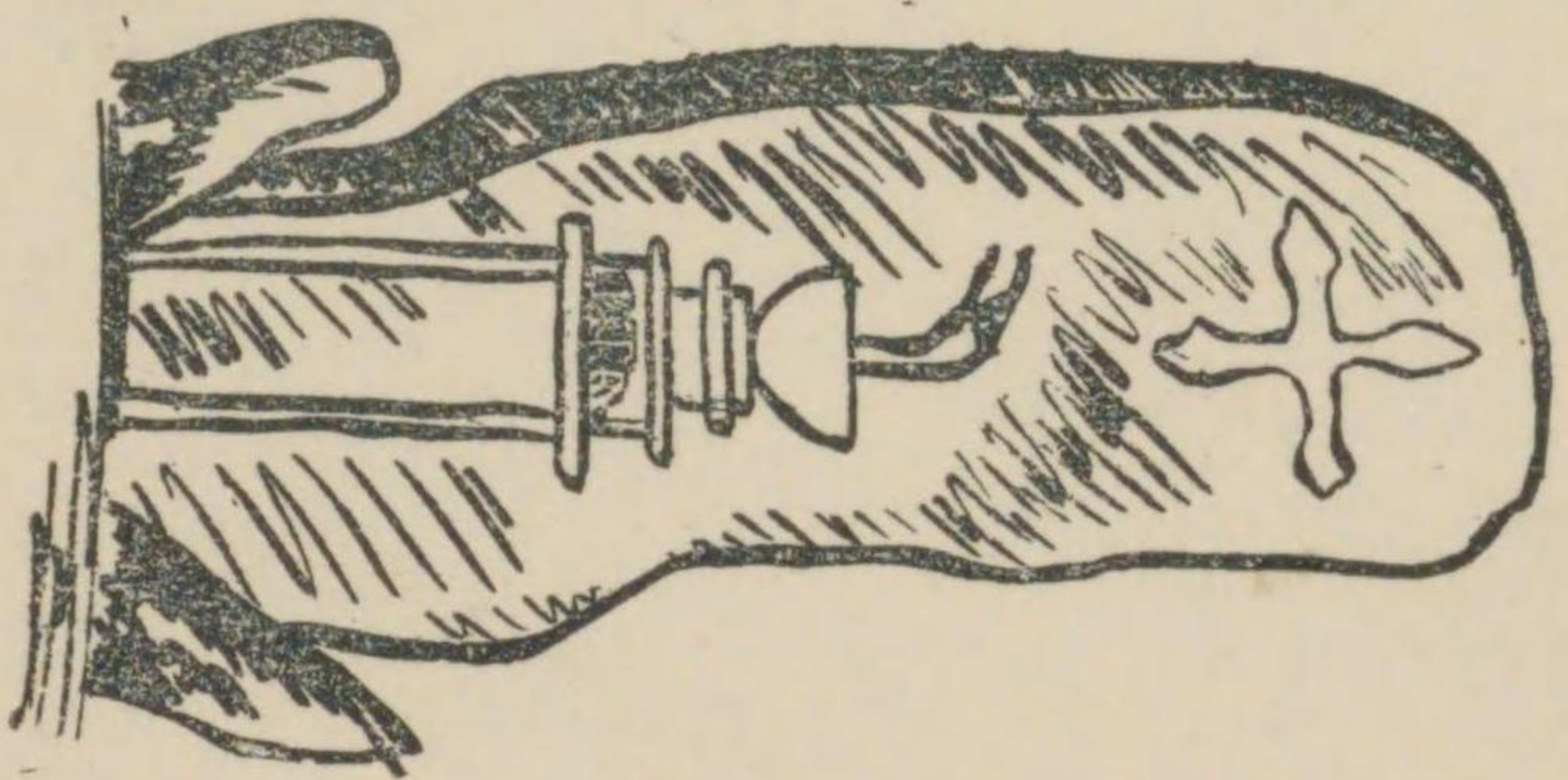
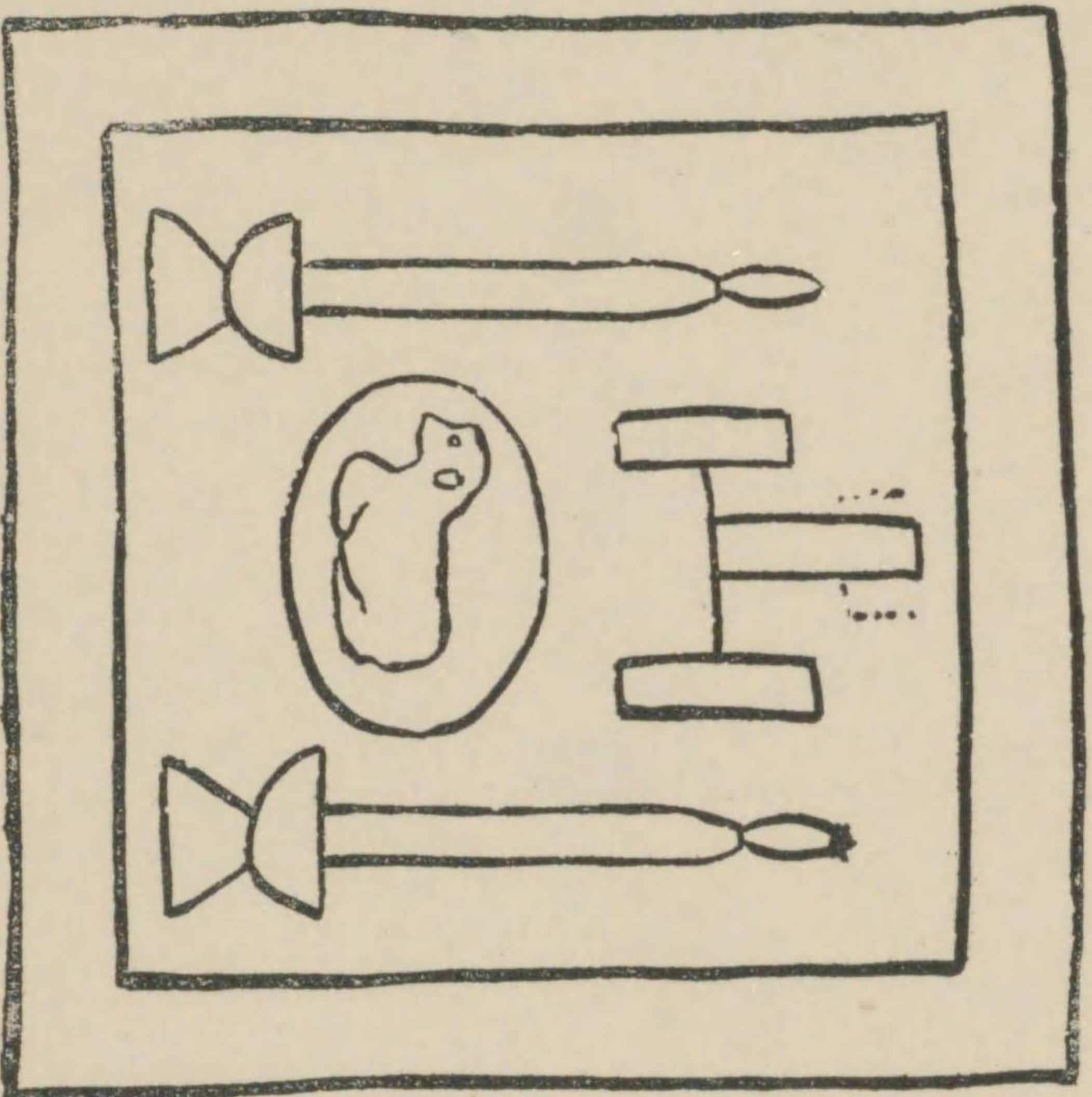
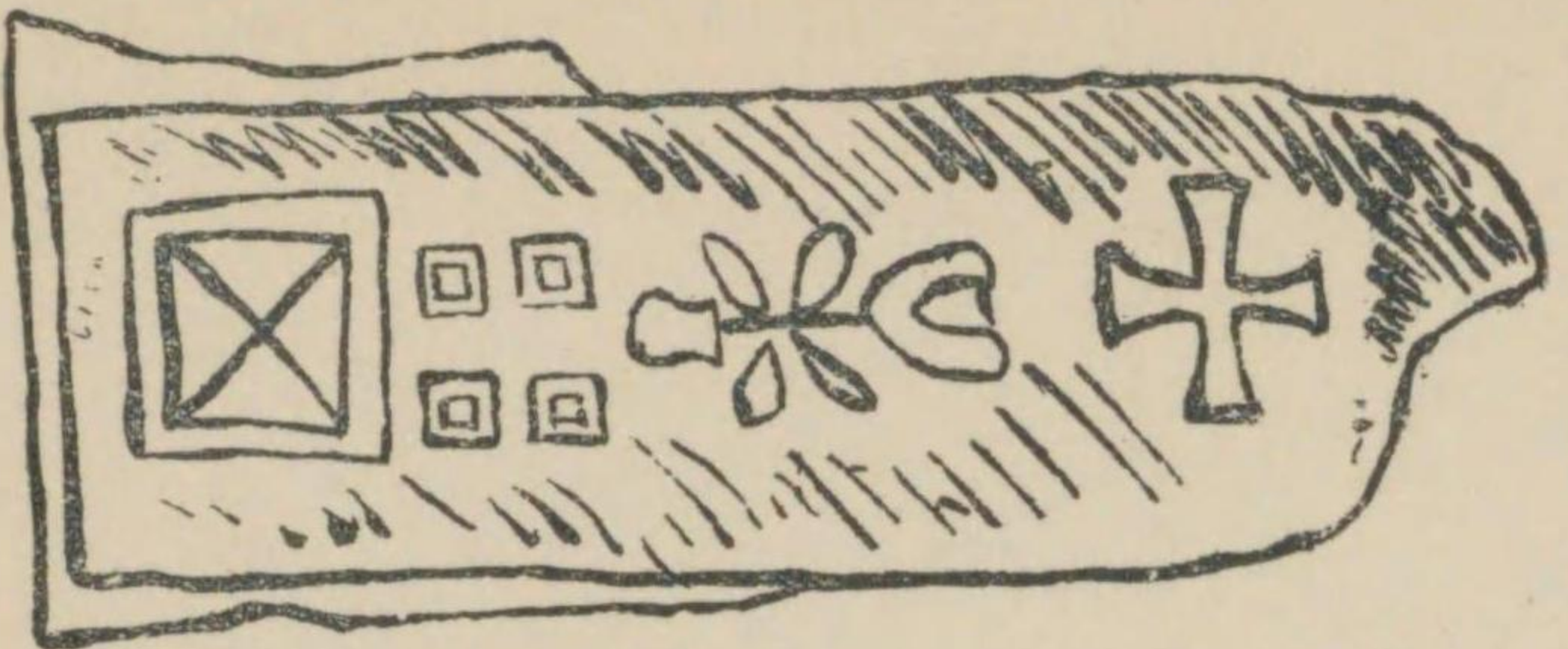


洮南古城發見金製十字架

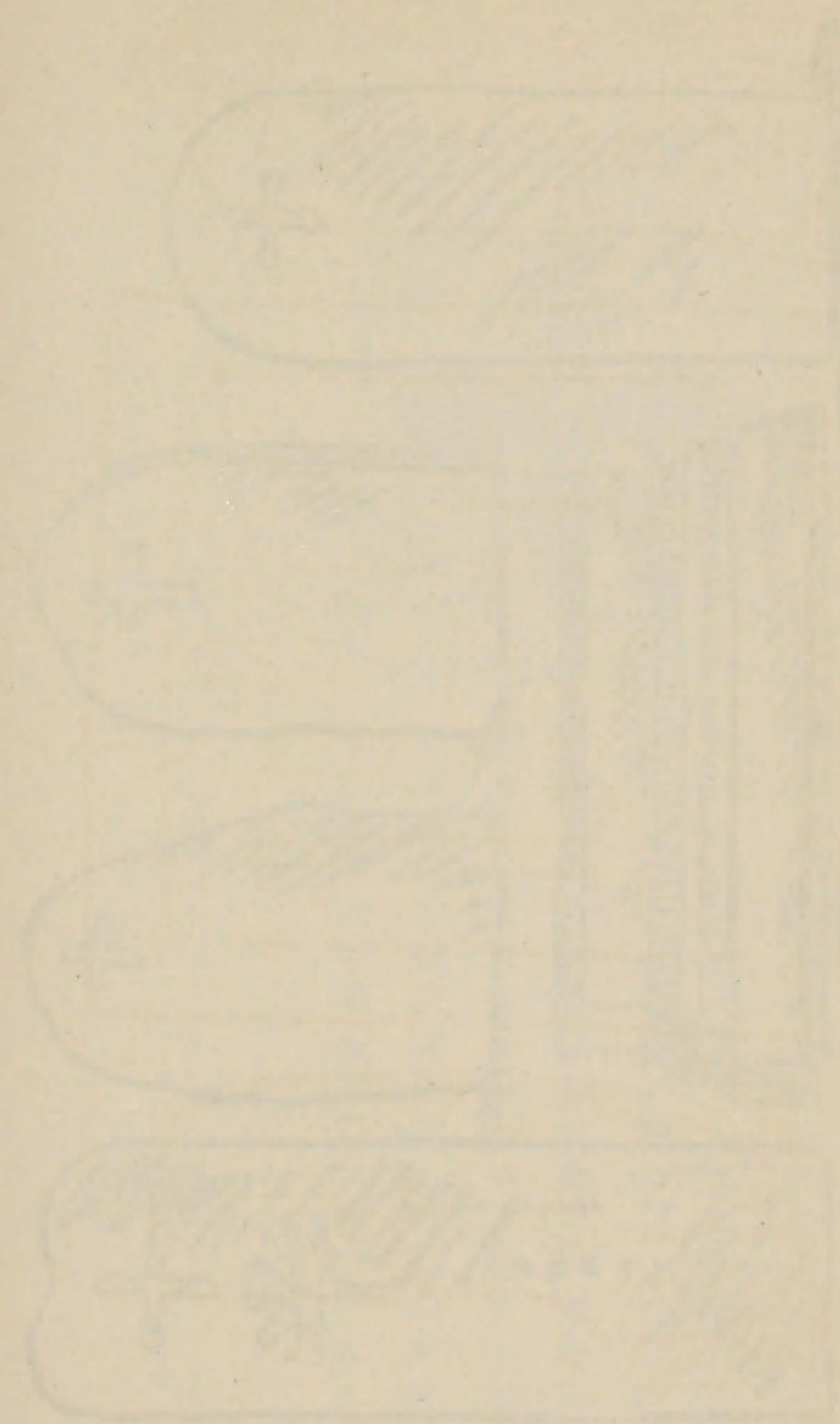
terminées の種類である様である。之が既に東古の洮兒河城及北滿洲の松花江上流から出たとすると、當時彼等の間に固有のシャーマン教佛教等の間に又此の基督教的分子の存在して居たことを知らねばならぬ。是等の事實は亞細亞東北方に於ける宗教史文化史の上に於て最も注意を要することと思ふ。



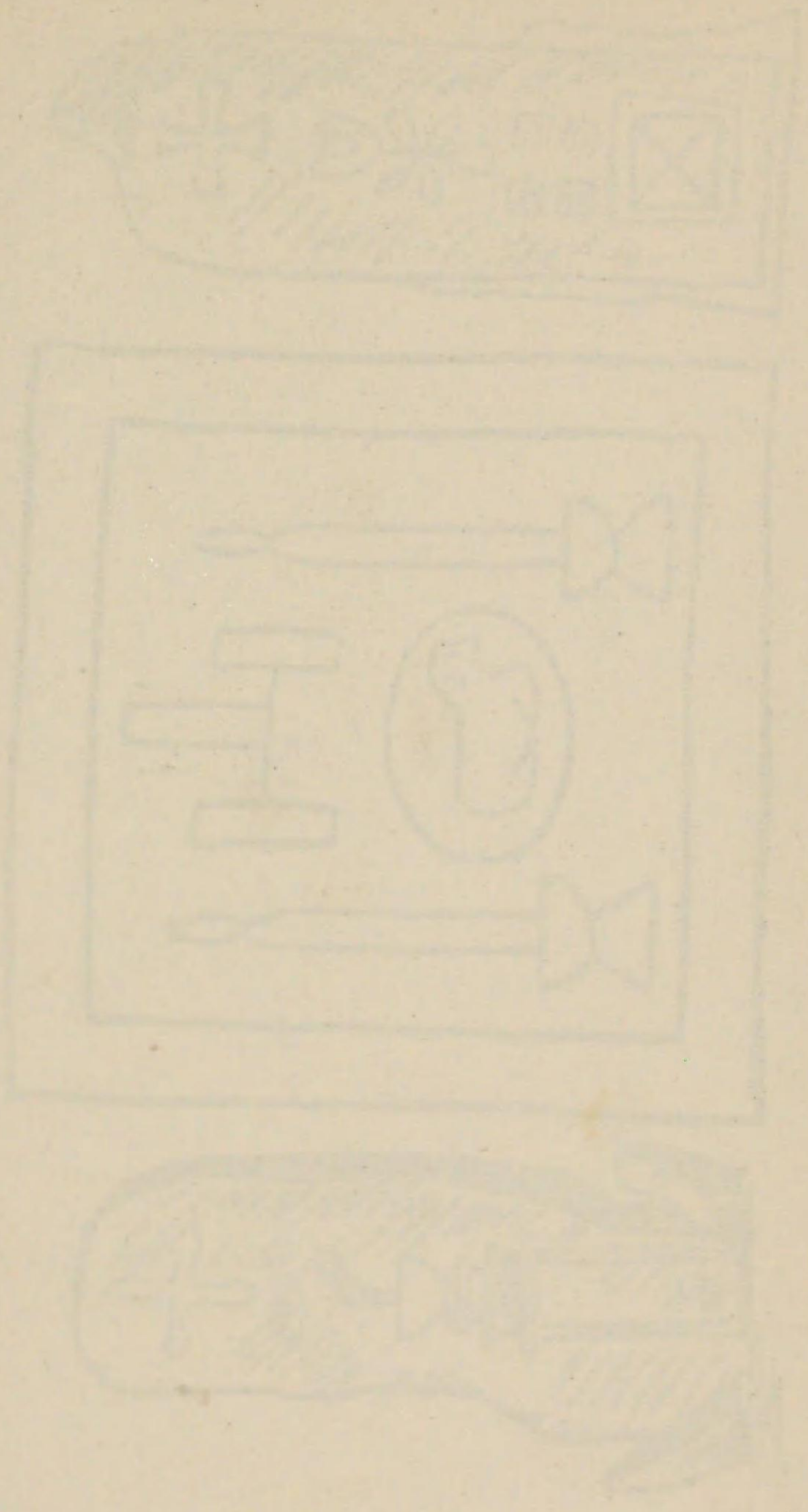
十四世紀カソカ下に見發した墓



石墓るす存在に古蒙



第三十二章



滿洲に於ける漢時代の遺跡

左の一篇は、私が明治四十二年、第一回滿洲調査の結果を南滿洲鐵道株式會社に出した大部の人類學的報告中の漢族遺跡(當時の題名は漢、未、三、國、一、晋、時、代、に、於、ける、漢、族、の、遺、跡)のみに關する一部のものであるが、這は僅かに一百部のみ印刷した許りで餘り廣く世に公にせられて居ないから、茲にこれを記載することとする。本文は今から始んど十九年以前の發掘調査にかゝるものであるが、滿洲に於て未だ漢代の遺跡をかくの如く大計畫のもとに發掘調査して報告(論文)の出版を見ない今日であり、且つこれ等の事實は最も大切なるものであるから、本書中にこれを附記するのは敢て不都合でないと思ふ。本篇の文章は他の各章との關係上たゞ文章體を口語體に變へたばかりで、文中の事實字句は一つも改めた所はない。されば這は滿洲に於ける漢族に對して私の懐しい十九年以前の頗る幼稚なる智識記録である。

遼東に於ける漢族の歴史

南滿洲即ち遼東は往古より漢民族の侵入移住せし所であるから、北滿洲と

は夙に其の状態を異にして居る。周の初め此の地は漢民族より幽州の名を以て呼ばれたるも、斯は唯名稱を附せしに止まり、漢民族の本據を此の地に定めたるものは極めて僅少であつたらう。降て戰國時代に至つては、當時の遼河の左右は燕に屬し、其の後秦の時此の地を遼東遼西の二郡に分ち、南滿洲は遼東郡に屬した。滿洲に於ける漢民族の勢力の認め得べき程度に至りしは實に此の時を以て始めとする。漢も亦秦の制度を襲用せしが、武帶の時に至り、尙一層堅固なる位置となり、朝鮮を拓き、遼東の屬邑を併割し、樂浪、玄菟、眞番、臨屯の四郡を置いた。昭帝の時、臨屯、眞番の二郡を省き、後漢亦之に因つた。後公孫度の據る所となり、度は自ら平州の牧と稱し、之を四世に傳へたが、魏の景初二年(西紀二三七)司馬懿討て之を滅した。更に三國の魏は東夷校尉を置き、襄平に治し、而して遼東、昌黎、元菟、樂浪、帶方の五郡に分ち、平州を置き、晉は遼東郡を改めて國と爲せしも、仍ほ平州に隸せしめた。又「通典」の記する所に

れば、魏は公孫度の舊に因て遼東を五郡に分ち、平州を置き、後また幽州を合し、東夷校尉は襄平に居る、晉の咸寧二年(西紀二七六)仍ほ平州を置き、慕容廆を以て刺史となし、昌黎に治す、永嘉の亂に屬し、終に其の地を有するに至つた。

又大興三年(西紀三二〇)慕容廆の據る所となる。大和五年(西紀三七〇)苻秦に屬し、又後燕に屬す。晉の太元十年(西紀三八五)高句麗遼東に寇す、後燕王を將として之を討つた。高句麗の敗る所となり、遼東、玄菟、遂に高句麗の陥るゝ所となる。是年慕容廆復之を取る、後魏之を得、仍ほ遼東、昌黎等の郡となし、尋て又高句麗の據る所となる。唐高句麗を征し、初て遼、蓋二州を置き、後都督府を置き、又安東都護を置き、之を統べた。

以上は滿洲に於ける周以後の歴史である。此等の事實に依つて見るも、漢民族の既に古代より南滿洲に侵入せしことは明かだ、彼等は此の地に遼東郡を設け、又其の東に玄菟郡を置いたが、晉末に至り、南滿洲は高句麗の爲に占領

せられた。高句麗は唐初まで此の地に在り、太宗の征する所となつて、終に此の地を去つた。南滿洲は其の高句麗の統治する所となつた以前に於ては主として漢民族の爲に支配せられた土地で、玄菟郡を以て朝鮮西部の樂浪帶方等の郡と連絡し、東方に於ける漢民族の重鎮であつたのである。

文獻史上より見たる漢民族と南滿洲との關係は大略右の如くであるが、更に之を考古學上より見ると如何、文獻史上の事實果して眞なりとせば、南滿洲には以上の遺跡・遺物存在すべき理で、現に私の調査せる所に依れば、南滿洲には晉末以前の資料が多く存在してゐる。依つて以下之に就て聊か述べて見やう。

漢族の遺跡

南滿洲には前漢末以後の遺跡各所に存在する。而して此等の遺跡を發掘

せば、玉裝飾品、銅器、劍、鍔、矛、素焼土器、貨幣等を得るであらう。此等は學問上最も注目すべきものであつて、前漢末以後の滿洲を知るに便利なるのみならず、學術上亦最も研究すべきことに屬する。

前記の遺跡は之を二種に大別することが出來やう、即ち一は墓所で、一は即ち住居跡である。而して墓所は尙之を細別して、石槨、石棺、磚棺、貝墓、貝槨棺の四種となすことを得。私は先づ此等各棺に就て説明し、次に住居跡並に其中より出づる遺物のことに及び、最後に此等各項に對する結論を試みやう。

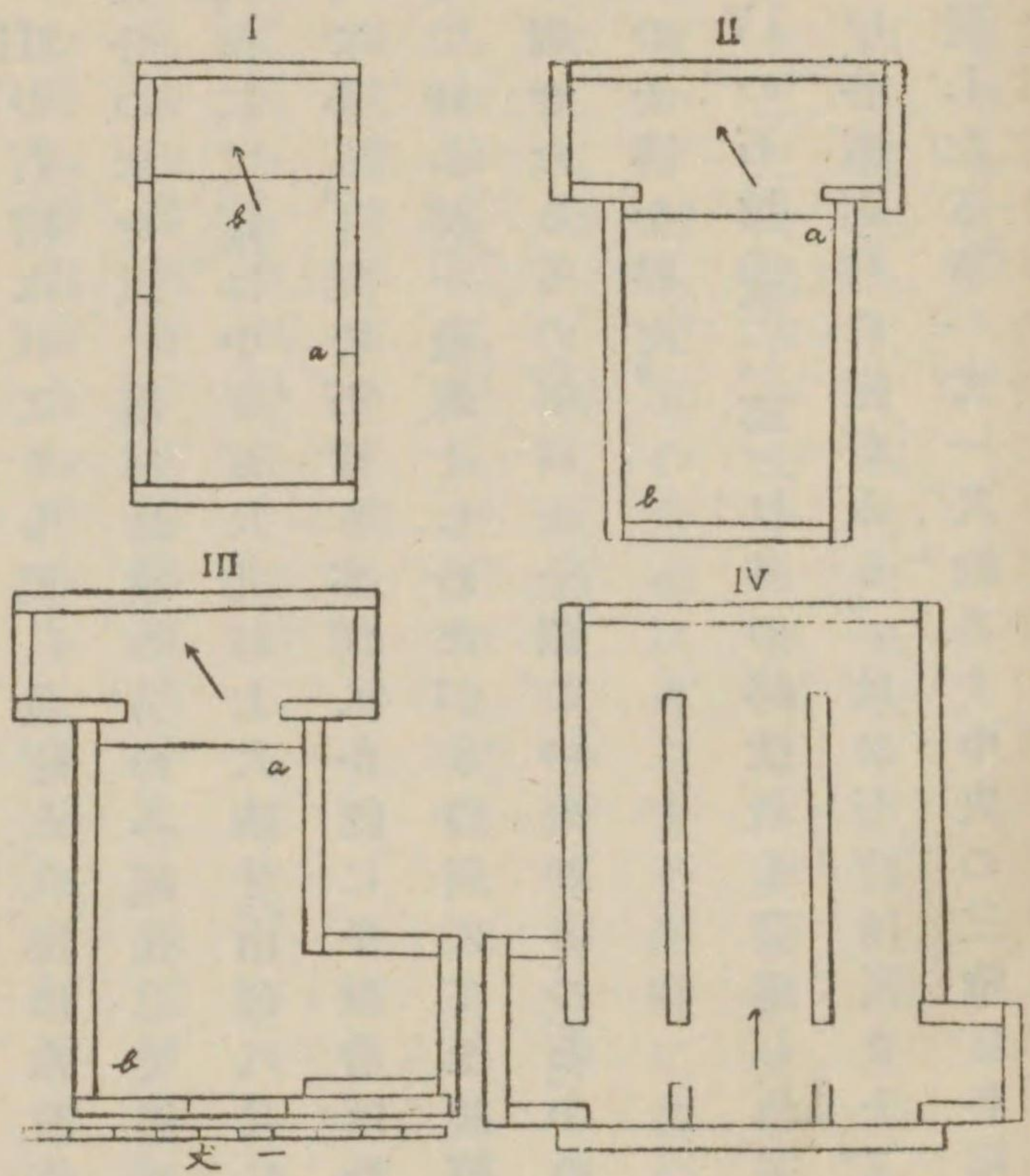
(一) 墓 所

(一) 石棺 石棺は主として遼陽の太子河畔に存在す(第壹圖)同河畔に存在する石棺は、私の發掘せしもの及び既に發掘せられて正しく地上に露出せるものを合せて、其の數凡そ三十許り存在する、尙ほ破壊せられたるもの、地中に埋没せるものを合せば、其の數何程あるか知れない。此等の石棺は太子河上

流地方より石材を採集し來り、之を組み合せて作つたもので、我が國に存在する石棺の如く、一個の大石を刳りて作りたるものを見ない、右の石棺に使用せる石は孰れも大なる板石で、之を組み合せたものであるけれども、或は其の壁として小さき石を積み重ねたのもあり、其の形状一様ではないが、私の實査する所に依れば、概ね、左の四種の形式に限られたるものゝやうである。

Iの石棺第五圖は土中に存在し、其の形状は長方形である。長さ一丈(内部にて)幅四尺三寸にして、北の部分に高さ七寸許りの床を設く、底には扁平なる石を敷き詰め、底より上までの深さ三尺四寸である。

外壁は南北の二部は、各々一枚石を以て作つてあるが、他は左右各々三枚宛の石を繼ぎ合せて作り、石の厚さ五寸五分ある。此の石棺も既に發掘せられたもので別に、蓋石を存せず、私は試に之を發掘したが、aの所に西に面せる頭蓋骨横はり、bの所に下肢骨の斷片存在し、而して其の頭蓋骨の在つた西方に



石棺の平面圖

德利形の土器を發見した。此の石棺は其構造最も簡單なるものである。

IIの石棺(第三圖)は、Iよりも稍々發達し、北の部分には少しく高く床を設け、更に之を左右に延長せるを以て其の形状はT字形を呈す、棺

の長さ一丈一尺許(内部にて)幅は中央にて四尺九寸、床の所にて七尺六寸である。此の石棺亦既に半以上發掘せられたものであるが、私は尙其の内部を精

密に調査せしに、床の右方の石壁に接したる邊に於て、土製の机上に魚を載せたる模造品を得た。

IIIの石棺はIIよりも更に發達し、北部は左右等しく延長して、高さ一尺三寸五分の床を設け、南部は東の方のみ延長して居る。棺の長さは一丈一尺七分（内部にて）、幅は中央五尺、北部七尺四寸、南部八尺にして、底よりの深さは五尺五寸である。此の石棺も亦何人か既に手を着けたものであるが、私は人夫を役して其の跡を發掘せしめたがaの所にて土製模造品の扁平なる箱の中に魚を書きたるもの（第四十一圖の中央のもの）と、bの所にて、徳利・高坏等の如き素焼の土器を得た。

IVの石棺（第二圖）は其の構造最も發達し、凸字形を呈し、且つ中央部に壁を設け、各區劃共に室がある。此の石棺は長さ十二尺（内部）、幅は中央八尺、南部の延長したる所一丈一尺餘あり、中央の三室は各幅三尺にして、石の厚さは七寸

許りである。

以上は主として石棺の形狀を記したのであるが、其の存在位置は孰も地上より二三尺以下の土中にあつて、一度發掘せられたるものゝ外は、地上に露出し、ない。而して其の分布は専ら太子河畔に在つて、其の存在の狀態は互に群をなしてゐる。蓋し此處は當時の墓場の跡であらう、其の標本として最もよいものは、（第二圖）に示す如く遼陽の方より太子河を渡り、十四五町を進みたる鐵道線路の右方に在るのである。此處には石棺の既に發掘せられて露出して居るものが尙多く存在して居る。

私は日露戰役の際、遼陽西門外なる鐵道線路附近にて博棺發掘の際、二三石棺の既に發掘せられたるものを見たが、其の中一個は第1圖の如きもので、内部に土器があり、又五銖錢も存在して居た。在遼陽石川末松氏の語る所に依れば、氏は昨年第IV圖の石棺を發掘したが、内部に三室あり、其の中に人骨各一

體宛都合三體存在し、中央の人骨の頭部の所に打缺きたる丸瓦(第三十二圖)にある紋様のある瓦及び第(二十圖)一個あつて、其の頭の傍には銀製の簪(同圖)上段、壺の傍にある物は簪あり、而して向つて右方の人骨は手に指環(同圖)瓦の傍にある指環を箆めたらしく、頭部の邊には、四瓣花形の銅製の頭飾(同圖)上段の壺の傍にある花瓣形を置いてある。向つて左方の人骨には何物もなかつたが、此等各人骨の胸邊には五銖錢を置き、就中左右の人骨には最も多かつた。三體の人骨の臥した其の頭部の上の方には、又一つの小室があつて、右の隅には土製の皿五個、左の隅には大きな壺が二個あつた。此の人骨の状態より考ふるに、之は合葬よりも殉死で中央の人骨が其の主人であるやうである。而して此の主人は男子なるが如く、左方のものは女子であるらしい。

附言 普蘭店附近にも石棺がある。けれど、こは年代最も新しく遼陽の其れと比す可くもない。故に今これを此の中に加へない。

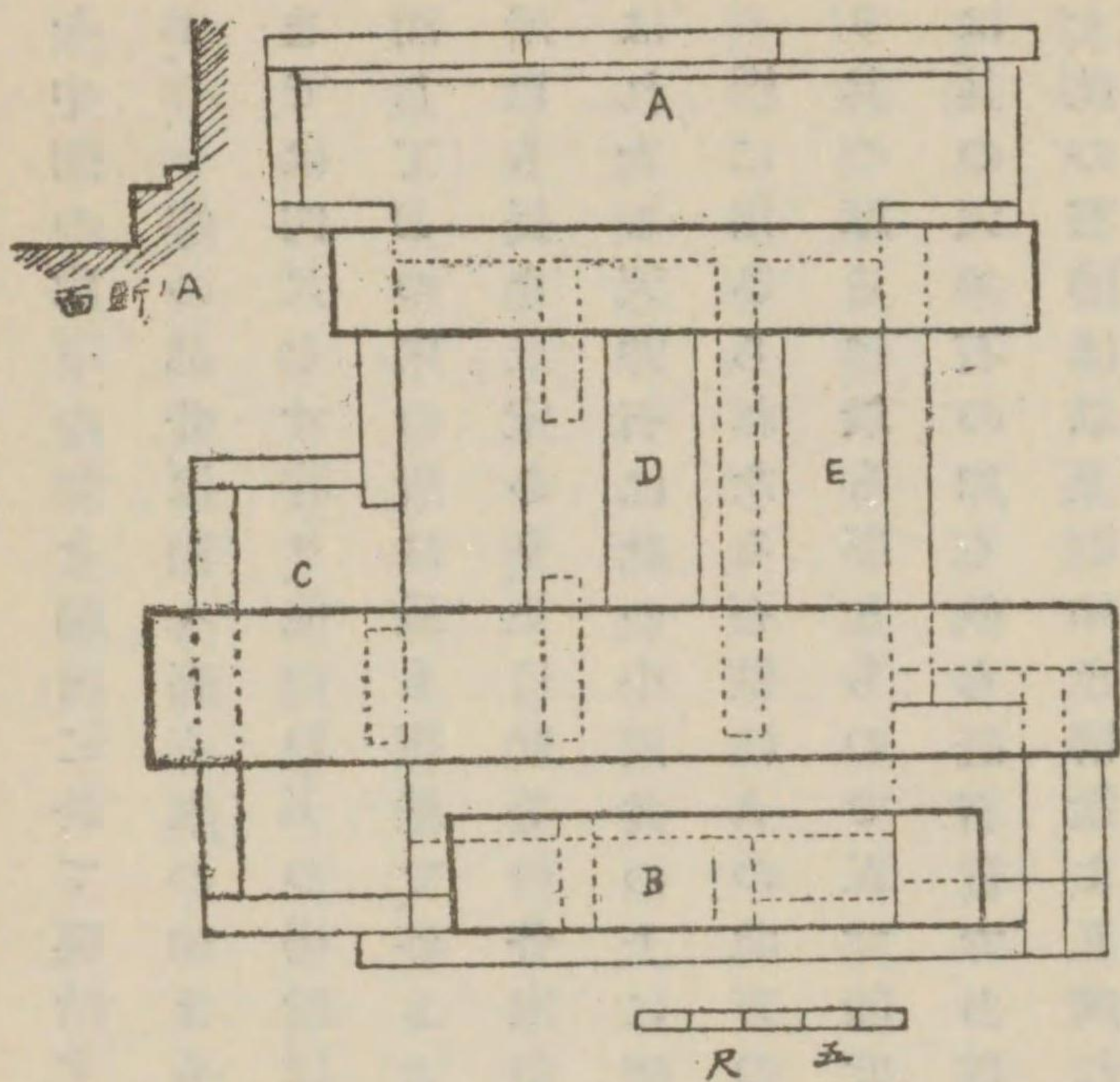
(二)石槨 石槨(第四圖)は遼陽の南門外にある、私は南滿洲の各地を跋渉して調査したが、斯くの如き石槨を見たのは唯僅に此の地のみであつて、他の地方では一も石槨の存在するのを見なかつた、されば私は之に就て詳細なる説明を試みやうと思ふ。

遼陽の南門外に一大石棺が土中に存在することに就ては、同地到着の際、石川末松氏より聞いたので、私は之を實際に調査せんと欲し、四十二年四月二十一日、氏の案内に依りて現場に至りしに、全部地上に露出せず、唯僅に人の出入し得る程度の穴を地上に認むるのみであつた。依つて私は石川氏等と共に此の穴より中に入つたが、内部の構造は最も大きくて、其の形状よりせば決して石棺でなく、寧ろ石槨と稱すべきものであるから、私は今之を石槨と呼ぶ。然れども其の構造よりせば石棺のIII、IV等に類似し、其の最も大なるものと云ふことが出来ないことはない。

石槨は地上には存在せず全く地下に在る。故に其の上を覆へる土を除かねば、其の全形を認むることが出来ない。そこで私は南滿洲鐵道株式會社の人夫五十人許りを役して、先づ上部の土を除かしめ、次で内部の發掘に及び二日間此の調査に従事した。

石槨は土中に存在し、上部は土を以て覆はれて居るが、別に高い盛土の如きものは存在せないから、何人も其の上を歩んでも、其の下に石槨の存在するとは全く知ることが出来ないのであつて、這は彼の石棺博棺貝墓等に於けると全く同一状態である。此の石槨の作られた當時に在りては、其の地上に一種の墓標、若くは墓碑の様なもの、が建つて居つたかも知れないが、今日は之を確むべき材料は一つも存在しない。

私は先づ人夫をして上部の土を除かしめしたが、其の厚さ約三尺あり、其の下は直に十數枚の大きな天井石を架す。此等の石質は孰も砥石の如きもので、太子河の上流地に存在する岩石なれば、明に此處より切り取つて運び來つたものである。



第三十二章

次に天井石を取り去つたが、始めて内部の構造を認むむことを得た。(第四圖)に示すもの即ち石之で、更に之を平面圖とせば上の槨通りである。

の槨は其の長さ一丈四尺で幅は北方の部分に於て一丈二尺餘、南方は一丈四尺、中央の所は九尺である。而して其の構造は恰も前後に各々室を設けたるが如く、之

を中間の廊下の如き場所に於て連結す、檨の底は扁平なる石を敷き、其の中A、B、C、D等の部分は稍々高く床の如きものを設け、床の高さ一尺餘之より天井までは四尺七寸許り、他のD、Eの場所は天井までの高さ六尺七寸許りである而してBの床の所は最も複雑で、各々三個の小室を設け、且つ其の前のD、Eの所にも長き三室あり、更に此等の各室の上に細長き天井石を置く、即ち最初現はれたる天井石は此の小天井の上に架せられたるものである。

檨に用ひられたる石壁はAの北方の部分を除くの外は、悉く一枚石より成り、其の厚さは最も厚きもので五寸餘である。而して室内に用ひた石材の質は、其の天井石の如く孰も砥石質である。

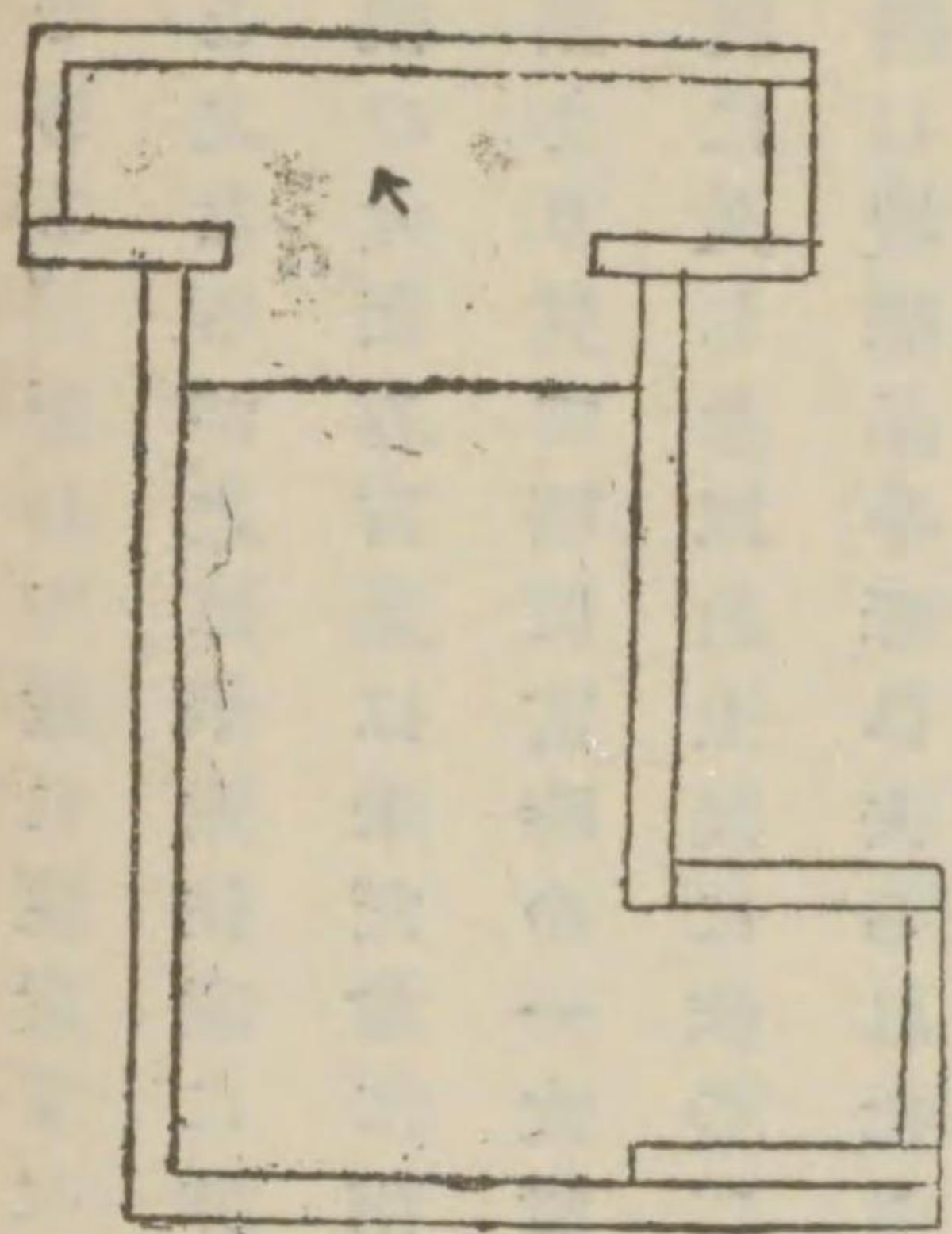
此の石檨は以上の如き構造より成れるものなるが、私は其の形状より推して、之は當時の住家を模せしものならんと信ずるものである。奥室廊下天井等の形状最も克く之を證し、彼の石棺の如きも、亦住家の形状を簡單にしたも

のである。而して茲に注意すべきは、此の石檨の何處にも入口の存在せざることを之なるが、之は畢竟住家に非ずして石檨なるが爲であらう。斯くの如き規模の大なる古墓は未だ曾て南滿洲に見ざるもので、私は其の構造の壯嚴なる點より見て、明に當時の一大貴族を葬りたる墓なりと信ずる。又此の石檨は既に久しき以前土民に依つて偶然發見せらるゝと共に、其の内部を密かに發掘し、埋葬品を奪ひ去られたものであることは明で、其の上部に開かれたる一小穴は即ち、其の當時に穿られたるものであらう。

私は石川井上の諸氏と共に人夫を役し、内部の土を以て埋められたる所を發掘したが、一も完全なる遺物を得ず、之は土民の既に遺品を奪ひ去つたが爲めである。けれども尙精密に之を検したが、C所にて人骨の破片(頭蓋及び四肢骨の斷片)を發見し、尙其の傍より一枚の五銖錢の破片を得、又各室に於て素焼土器の一小破片を得た。

上記石槨の構造・人骨及び他の石棺・博棺・貝墓に關する事實等より推して、此の墓も亦主人を中心とせる殉死的埋葬法（或は合葬）を行ひしものなることを知るべく、各室は即ち其の死體を安置せし所であらう。

私は右の石槨を發掘調査せる際、尙他に於て當時の石槨に掘り當て、之を發掘し、其の石材を取り去つて地上に運搬せられた場所のあることを發見した。これは私の調査した前記石槨より西方十四五町程の所に在つて、天井石及び



内部の中央に置かれた石は取り去られ、固より完全な形状として見る事は出来ないが、試に其の平面圖を擧ぐれば、即ち上の如く其の形状は長方形を呈すれども、三方の先端各々突出し、北方に高さ一尺三寸五分の床を設く。尙中央部及び

南方にも何等かの設備があつたらうが、今や石材を取り去られたから、一も存在するものがない。槨の長さは一丈一尺七寸で、其の幅は中央の部分にては五尺であるけれども、北方の突出せる所は七尺四寸、南方の突出せる所は七尺九寸である。底には悉く扁平なる石を敷き詰め、底より天井までの高さは中央の所にて五尺五寸である。上部は天井石は既に取り去られたが、其の上を覆へる土は凡そ三尺許りあつて、明に前の石槨と同一の形式なることを知るべきのみならず、彼の石棺の形状にも最も類似すると云へる。私は石川氏と共に此處を發掘し、其の南西の壁に接する部分に於て、完全なる素焼土器數個を得た。最初こゝを發掘の際面白い完全な土器を多く出でたが、私は其の三四個を所有者より譲受け、大學に携へ歸つた。此處より出でたる土器は保止支・小判形皿・壺及び其の他長櫃及び厨子の模造品等である。

(三) 博棺 博棺とは博を築きて棺を作つたものであつて、支那人の所謂「甄墓」

と稱するものである。此の種の古墓は分布最も廣く、南は旅順の岬角より普蘭店、復州、熊岳城、遼陽附近等に至るまで、主として渤海灣に向ひたる方面に存在し、他の方面に於ては未だ之を發見したことがない。之は最も注意すべき事に屬する。而して南滿洲に於ける博棺分布地方中、其の最も見るべき地は、遼陽方面であるから、私は先づ遼陽附近の博棺に就て記述し、他は其の後に附記することとする。

私が遼陽にて此の博棺を發見したのは、實に日露戰役の際で、當時我が陸軍病院の敷地に於て調査したのを嚆矢とする。而して此の調査に就ては當時の陸軍一等軍醫正賀古鶴所氏及び當時の陸軍三等軍醫伊藤壽氏に依つて受けたる補助便宜が最も多い。私は茲に厚く深謝の意を表す。

私の當時調査した遺跡は、遼陽の西門から西方約十四五町、鐵道線路に接したる左側(大連の方より)にある。此の遺跡は曾て露人が鐵道線路を設くる際、

其の附近の土を取り去つたが爲に露出したものであるが、私の最初茲に到着して見たときには、其の上部は僅に地上に現はれたのみで、單に之のみを見れば、其の何物たるかは容易に知ることが出來ず、當時往古の家屋跡の敷博であらうとの説が多かつたが、私は其の下に何物か埋藏せられて居る様に考へたから、賀古氏と協議の上、病院の人夫をして之を發掘せしめた。此の場所は土を取り去られ凹地となつたから、雨水溜溜して一小池沼の如くなつたので、先づ其の溜水を排出した後、之を發掘したが、其の敷博の如く思はれたるものは孰も博を以て積み重ねられたる博棺(博墓)なることを認めた。こは第三十圖A、Bで示したるものである。而して露人は單にこの上の土を掘り取つたのみで、其の博棺に就ては一も知らなかつたやうである。

博棺は多く互に群を爲して存在し、私の計算せしものでも、完全なるもの及び破損せるもの等で、その數凡そ二三十許りであつたが、今参考として其の博



墓中存存の形状

棺の存在せる状態の一例を示せば上の如くである。

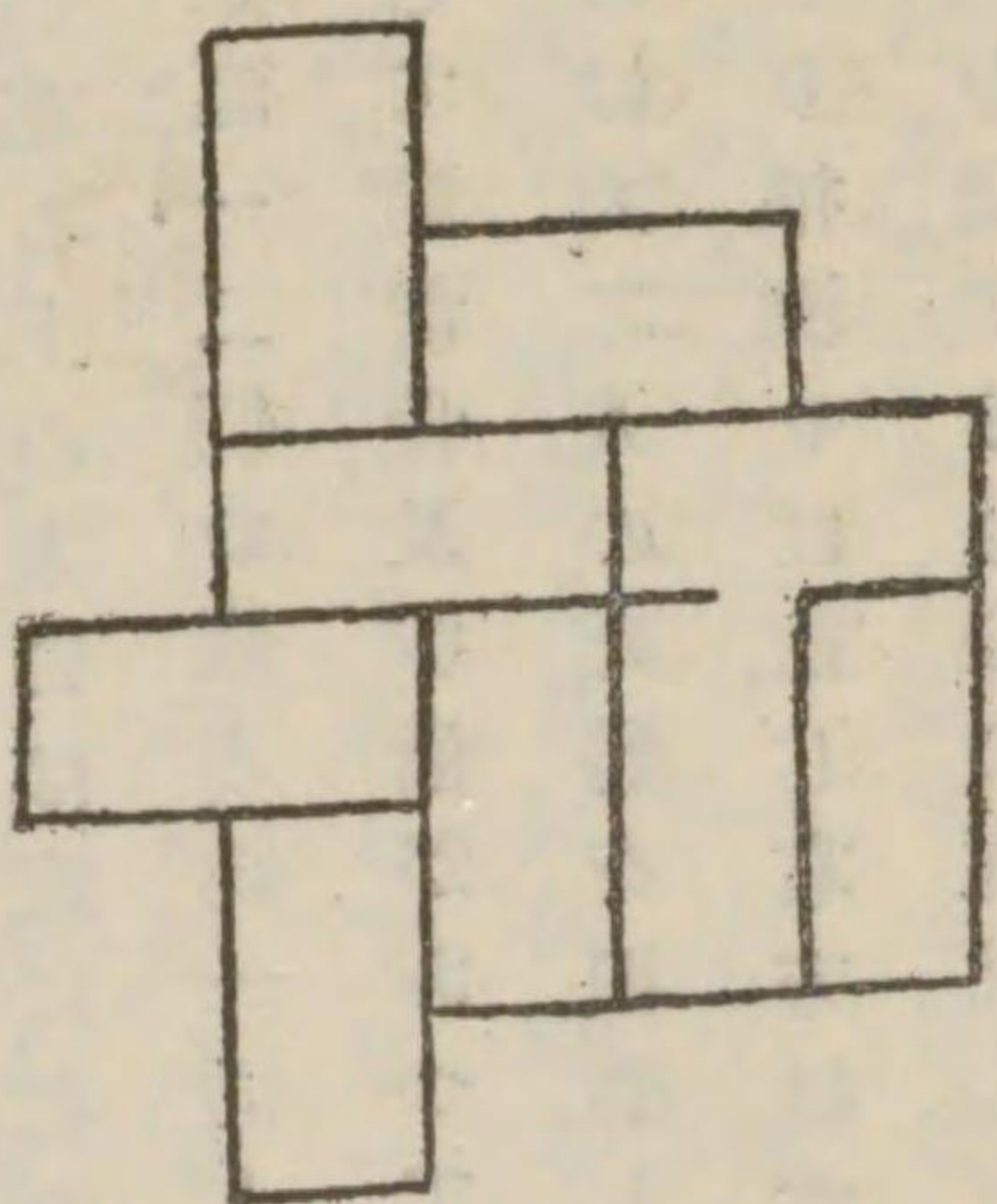
以上は博棺の一群なるが、これにて其の形状及び存在の状態等は略々了解せらるゝであらう。今私は之に就て左に稍々詳細なる説明を

爲さうと思ふ。



私は最初A圖博棺の土を除きたるに、棺はアーチ形に組み立てられたる同一の博の蓋を以て覆はれて居た。(第七圖)

私は更に蓋を取り去つたが、内部は空洞で恰もI圖の如き形状を呈し、長さ一丈一尺幅三尺周囲の博の厚さ各々六寸で、深さは二尺六寸であつた。而して底には又博を組んで上に圖するが如く作つてある。



博の底の組方

棺の中には僅に人骨の存在するを認むるも、骨質は多く細末となり、唯齒の或部分が其の形を完ふするのみである。而して人骨の頭部(北東)と、足部の邊に土器を安置してある。次にBの棺(第六圖)二人の支那人の立てる棺は二個互に相合したるもので、其の形状は圖の如く、二者各々其の大きさを異にし、向て

左方のも右方のもはよりも稍々大である。前者の棺の大きさは長さ一丈、幅三尺五寸であり、後者の棺は長さは前者に等し、幅は三尺である。而して深さは各々一尺八寸五分。周囲の博の厚さ亦各々六寸であり、底はIと同である。此の左右の二棺にも人骨があり、各々其の頭部の方に土器が存在して居る。左の棺は上部の中央の所に正しく一個の壺があつたが、右の棺は

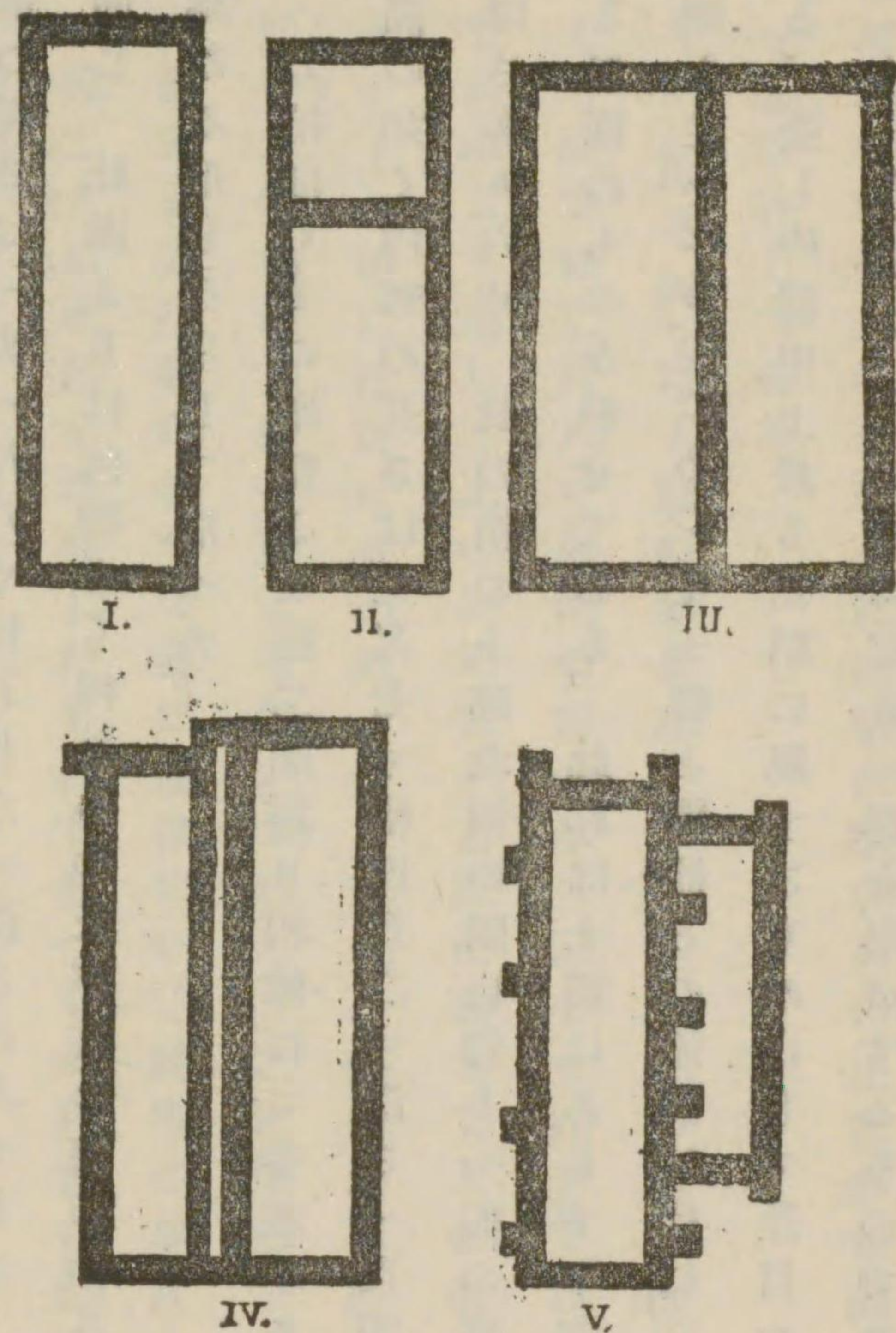
上部の左の壁に接して、上に二個の徳利形の土器が並列し、其の下の部分に壺が一個存在してゐた。

C棺(第七圖)はI圖の如き形状を呈し、内部の長さは一丈一尺四寸、幅は五尺七寸、深さは二尺八寸、周囲の博の厚さは七寸許りである。此處を發掘したが中央部より少しく上の方に當り、右壁に接して人の齒があり、而して右方齒の在る上の方には底に孔の開いた土製物を置き、尙其の傍に大泉五十五個、小泉直一、二個の錢と、鏡一面とを置いてある。之に準して同一位置に、左壁に接して頭蓋骨及び齒があつて、其の齒は白い。此等の事實より見れば此の棺中には元、二人の死體を埋葬したものであつて、殉死者らしい。鏡の存在する事より推測せば蓋し右方は女子で、左方は男子であらうか。且つ右方の齒の綠色を呈するは錢の腐蝕したものの、浸染せし爲めであらう。之に由て見れば、錢は當時顔面部に近く置かれたものの、やうである。

E棺(第九圖)は最初は其の上を覆ふ土の爲に、一見高いものゝ様に考へられたが、之を發掘するに従ひ、前のものと相同じき形状を呈して來た。即ち内部の長さは一丈一尺八寸、幅五尺六寸、深さ四尺である。其の形状は第一圖に同じ。此處よりは何物をも得なかつたが、其の博の積み方が他のものと稍々異なる形状を呈して居つた。

D棺はC・Fの兩棺より約二間許り相離れて存在する。此の棺の形状亦I圖の如く、内部の長さは九尺七寸、幅四尺二寸、深さ一尺四寸であり、周囲の博の厚さ各々六寸。此の棺の上部北西の隅に當り、一個の壺の上に釉藥を注ぎたる皿様のものを載せてある。此れは土器にあらず不完全ながら黄褐色の釉藥を注いだものであつて、土器と陶器との過渡時代に立てるものゝやうである。蓋し陶器史上最も初期に屬するものにして、注目のあるものである。

以上A・B・C・D・E等の博棺は、一群を形成するものであつて、此等は互に關係



墳 墓 の 形 状

に一小區劃を設けたるも、其の區劃の境界としては、僅に二枚の博を並べたのみ、棺の内部の長さは總て一丈五寸、幅は三尺六寸、小區劃の所は長さ三尺で深

を有するものであらう。私は既に一群の例を記したるが、更に之に次で發掘した他の墳墓に就て記述しやう。

Fは第二圖の如く上の方

さは二尺八寸、周圍の博の厚さは六寸を算する、此處には一體の人骨があつたものと見え、下顎骨に少し許り齒の附いて居るものの上に向ひ横はつて居る。蓋し當時の埋葬法は、死體を仰臥せしめたものゝやうである。又下顎骨の下邊に五銖錢二個があつた、這は口中に含ましたものか、或は顎の邊に置いたものか、今明に之を判することが出来ない、小區劃の右側に接して土器が多く存在して居る。

Gは第一圖の様な形狀を呈し、長さ一丈一尺六寸、幅四尺七寸、周圍の厚さ七寸、深さ一尺八寸あり、此處よりは何物も出なかつたが、其の博の積み方は他のものと形式を異にし、其の形狀はF棺に同じである。

H棺は第V圖の如き形狀を呈し、北東に面し、其の構造よりせば、比較的最も複雑なるものである。此の棺は二個相互に附着するもので、向つて左方のものは右方のもものよりも大である。而して右方のもものは長さ一丈幅二尺、深さ

一尺七寸であるが、左方のものは、長さ六尺五寸、幅一尺三寸、深さ一尺七寸で、此の二棺は各々其の四隅の先端に凸起があり、尙左方の棺は周圍に多くの凸起を作り、我邦古墳中に存在する凸起ある石棺に稍々似た所がある。以上二個の棺には各々上方に人齒あり、殊に右の棺の左側に接して上肢の破片を存し、又二棺各々頭部の上方と思ほしい所に、土器を置いて居るのを見た。

I棺は其の形状第一圖の如く、長さ七尺七寸五分、幅四尺四寸五分、深さ二尺、周圍の博の厚さ六寸あり、此處よりは僅に貨泉二個出たのみであつて、他の物は何も存在しなかつた。

J棺は第三圖のもの即ち之であつて、二個の棺の附着するものである。此の二棺の中、向つて右のものは、内部の棺の長さ一丈餘、幅二尺一寸五分、深さ二尺なるが、左の棺の長さ一丈、幅一尺六寸である。而して周圍の博の厚さは兩棺共に六寸であるが、兩棺の相附着せる區劃の所の博の厚さは一尺三寸であ

り、此處は博を二列として居る。此等兩棺の中、左方のものよりは何物をも出さなかつたが、右方のものには、其の上の方の右側に接近して、三個の土器の並列せるを見た。

此の外、私は遼陽に於て、博棺を發掘して調査したのであるが、多くは既に破壊せるものであつたから、茲に記載しない。けれども其の形状内部の状態等は、以上記したAよりJに至る諸棺と多く異なる所を見ない。在遼陽の石川氏の語る所に依れば、氏が曾て發掘した一個の博棺は、第I圖のものに類似し、人骨は各々相對して二人分つた様である。副葬品の土器は頭の上の方にあつて、右方の人骨の所は博を少しく高くし、其の附近に五銖、錢が多く存在し、尙一方の人骨には、其の手と覺しき所に、小さな銅の指環都合三個あつたと云ふことである。

以上は遼陽附近太子河畔に在る博棺に就て、記したものであるが、私は更に

参考として熊岳河畔に在る博棺に就て記さう。

熊岳河畔にも博棺が多く存在する。其の存在状態は遼陽に於けるものと同じく、孰も地下にありて、私の發掘せしものは、長さ内部にて一丈弱、幅二尺、深さ三尺である。人骨は破損して確に認むることは出来ぬが、其の頭蓋骨の小片より檢せば、頭部を東に向けたやうである。尙ほ同地の形田幾次郎氏より聞く所に依れば、氏は昨年十一月輕便鐵道敷設の際、一の博棺に掘り當てたが、周圍は博を以て組み、其の中に更に木棺らしい物があつて、内部に朱を詰め、之に鏡一面、銅製腕輪六個(各一方に三個宛あり)銀の筭らしきもの一個、素焼土器一個が存在した。氏は更に他の博棺にも掘り當てたが、其の中には土製の壺があつて、五銖錢が之に充滿して居たと云ふことである。

私は右の博棺の存在する場所より數町距つた地點(當時溫泉宿附近)を發掘したが、銅鏃、銅製腕輪と共に五銖錢數枚を發掘し、中に一個の貨泉があつた。

更に旅順の博棺に就て記すと、私は同地で最も完全な博棺に都合三個許り掘り當てた。一は棺の形狀第III圖のものに似、四角形をなし、前後左右各々長さ八尺、深さは最も淺くて僅に六寸に過ぎない、中央に博を一行に並べ區劃を爲しあり、棺の存在位置は、東西に面し、二室共に各一個の頭蓋骨の破片となつたものを見た。即ち向つて右の方には、頭蓋骨は中央の區劃せられた博と西部の博との隅の方の近傍に存在し、又左の方は頭蓋骨が中央の區劃に接近して東の方に存在し、又其の頭蓋骨の近傍に一個の土器が存在したが、此の博棺は其の深さ淺いものであつた。

他の博棺は一方に高く床を設け、此處には土器が數個存在して居る。(第十圖)尙他の一は半ば既に發掘せられたものであるが、其の完全であつた時には長さ八尺許り、幅三尺許りもあつたらうが、中央の上の方に頭蓋骨が存在し、其の傍に土器が數個並列せられ、死體の右側には鐵製鐵刀一本を置く、而し

て此の刀身の先端は上に向いて居る。(第十一圖)

以上は博棺の存在位置形状其の内部に在る遺物人骨等に關係する事實を列記したものであるが、此等は如何なる知識を吾人に與ふるかと云ふに、先づ其の形状より云へば、各地方多少の相違はあるけれども、之を大體の上より見れば、孰も同一であつて、即ち博棺は第I圖より第V圖までの形状をなし、其の内部には人骨が孰も存在し、多くは其の上部及び下部の所に、土器其の他の副葬品を置いてあり、死體は一人の場合もあるが、數人の場合が多いやうである。時代も亦一時期の如く、互に遠く相距りたるものではないやうである。

博棺に使用せる博棺尙博棺に就て更に注意すべきは、并は博棺を形成構造せる博其物である。此の博は之を精密に分類せば、凡そ二種に區別することが出來やう。即ち一は有紋博にして一は無紋博である。有紋博とは其の名の如く、博の一面に圓角線等の幾何學的紋様及び魚金錢(五十)と書したるもの等を浮き

出しと爲せしもので、無紋博とは博面に一も紋様の存在せざるものを稱する。

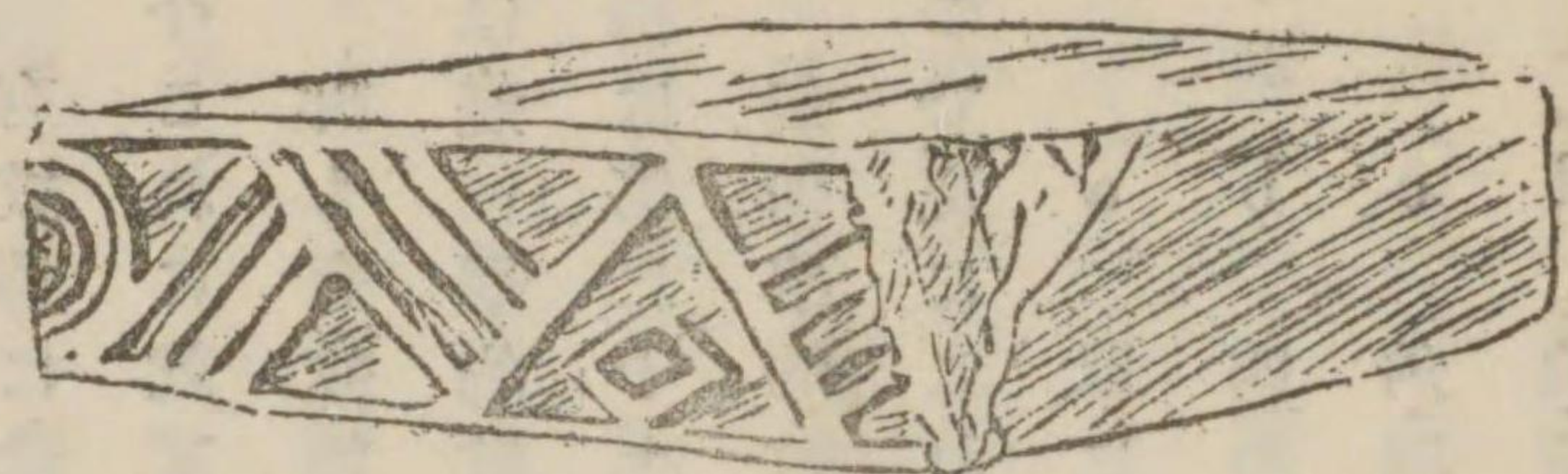
右二種の博中、以上の博棺に使用したのは全く無紋博である。即ち彼の遼陽に在る總ての博棺及び旅順方面のものは、私の發掘せしもの、又は既に發掘せられしものに就て見るに、孰も無紋博であつて一も有紋博で組み立てられたものを見なかつた。果して然らば以上の如き博棺は悉く無紋博よりなれるもので、従て其の年代も多少有紋博と相異なるものゝやうである。博は鼠色を帯び、素焼であり、其の質は餘り堅くない大さは寫眞圖版で見ることが如く一方に蓆目の跡を印して居る。之れは製造の際、柔かな儘のものを蓆の上に置いたから斯くは其の蓆目を印したのであらう。而してこれを棺に組み上ぐる時には博と博との間に漆喰の如きものを用ひ、又は土を用ひて居る。前者は遼陽の事實であり、後者は主として多く旅順方面に於て見る事實である。是等の博は、彼の土器と殆んど同一の焼方で、其の土質、焼色等も又互によく相類

似して居る。

有紋博 有紋博は左の圖の如く、博面に紋様を模型で現はしたもので、紋様の所が浮出して居る。其の色は赤褐色を帯び、質又堅い。されど中には焼かずして單に日乾しにしたものもある。即ち無紋博と聊か異なる所があるのを見るべきである。

有紋博の存在する場所は、主として關東半島で、其の土名は旅順の各村落北三十里堡、石河驛、復州、永寧城、槐書房、熊岳城等であつて、私は其の他に於て一も認められた所はない。而して是等の博は無紋博と共に存在せず、各々別に存在する。彼の旅順の博、棺、貝墓の多くある所には、一もこれを混するなく、又遼陽の遺跡如きも、其の痕跡さへも認めることが出来ぬ。

私の知れる所では、現今有紋様の存在する遺跡として先づ見る可きものは、石河驛附近と熊岳河畔である。されど此處の遺跡も遺跡の完全に現存せる



ものなく、今や僅かに其の博の散亂するを見るのみで、私はたゞ熊岳河畔に於て棺槨の一方の壁の殘部が残つて居るのを認めた。さればこの棺槨の調査は今後に待たねばならぬ。

有紋博 熊岳河畔、石河驛の他は、是等の博が單に一二個地上に存在し、或は支那人の外部の石壁中に混入するのみである。

博 有紋博の積み方は如何と云ふに、熊岳河畔の事實より推考するに、紋様ある部分を博槨の内部の壁として現はしたもののやうである。而して、是等の博中博面の彎曲せるものもあれば、其の棺槨内部の隅が稍々圓形を呈せるものもあつたであらう。加之、博中又互に博を組み合はすに便利

ならしむる爲めに、切込をした所があり、博を積むには其の間に漆喰の如きも

のを用いたものゝ如く、其の漆喰が附着してゐる。

有紋博に就て、最も研究の面白いのは其の博面の紋様である。されば私は今これに就て左に聊か記さう。

抑も有紋博の紋様は、これを大別せば三種とすることが出来やう。即ち一は幾何學的紋様であり、他は畫紋様字紋様之れである。而してこの三種の紋様は第三十九圖に示してあるから、それに就て参照せられたい。

幾何學的紋様は其の名の如く、線・角・圓等の互に集合して形成せられたるもので、更にこれを區別し、左の如くすることが出来る、即ち

- a 單に線よりなれるもの
- b 四角形の菱よりなれるもの
- c 角・線・圓等よりなれるもの
- d 角・圓よりなれるもの

e 圓と線とよりなれるもの

以上の紋様は第三十九圖のIより、24までを見れば解るであらう。

繪紋様は29の如き魚形を附したものが之れで、尙ほ28の五銖錢を繋ぎ合したやうなものも、この中に屬するであらう。而して25・26・27の如き又これの變形であつて、是等は實に幾學的紋様と繪紋様との中間に立てるものと云ひ得るであらう。

字紋様は30之にして、こは蓋し漢文字の裏の方の刻せられたものであらう。かゝる例は、支那古代の墳墓の博に屢々見る所である。

以上の博紋様が棺槨内に組み立てられたとせば、實に美事なものであつたらう。而して當時にあつては、この博壁の裝飾紋様の如きは、又一般人家の壁の紋様としても用ひられたものであらう。

第三十九圖に圖した紋様は、私の採集した物の中より全く異なつたものの

みを出したので、之にて其の總ての紋様は示された筈である。さて私は是等の紋様に就て、注目するには、悉く線角圓等よりなる所謂幾何學的紋様のみで、一も曲線紋様を見ず、他はすべて繪となつて居る。これは最も注目すべきことである。

以上の紋様に比較すべきは、『石素』中に圖する漢孝堂山畫像石、及び武梁祠壁畫等で、是等に圖せられたものに、家屋の壁、其他、車馬の裝飾等に幾何學的紋様や、錢繫ぎ紋様がある。これは全く滿洲のものと同じである。(第四十一圖)。されば有紋博が當時組み立てられたとせば、斯くの如き形狀を呈したものであらう。(第四十一圖中シヤ氏と記すのは、シヤバンヌ氏圖譜の番號である、以下これに従ふ)

尙ほ滿洲の有紋博に比較すべきものがある。之れは支那内地に存在する墳墓の博で、是等の博は何づれも表面に紋様を附し、滿洲の其れと同一である。

されば私は今此二者に就て、聊か比較して見たい。

支那内地の有紋博に就ては、『石素』及び陸心原著『千甃亭古博圖釋』の中に多くこれを圖して居る。殊に後者に多い。私は是等二書中から滿洲のものと同相しい紋様を選び出したが、實に第四十一圖中の向つて左方に畫いたものと、第四十二圖とを得た。第四十一圖は全く第四十二圖中に含みたるものであるから、私は之より主として『古博圖釋』から出した博紋様に就て記さう。

讀者は試みに、滿洲の古博紋様と支那内地の其れとを比較せよ、即ち二者互に相類似するを推知せらるゝであらう。而して支那の古博には、幸にして之に一々年號を附記しあれば、其の博の何れの世のものなるかは、直ちに解せられる。されば、この年號に據て、博面の紋様の年代を研究するは最も面白い事と云はねばならぬ。

此處に示した支那古博は、これを漢吳晉の三つに區別するを得。而してこの三者は又各々其の年號を附記し居れば、私は今この年號を古き方から新しい方に及ぼし、表として示せば、左の如くなる。これにて其の紋樣と時代との關係を知るべきである。

後漢 (孝堂山及び武梁祠の碑も、この中に入れて見よ)

博の年號 帝王 西曆(元年より其年號の終迄) 今年より溯ること

記

事

延光 安帝 一二二—一二五 一八八五

吳

博の年號 帝王 西曆(元年より其年號の終迄) 今年より溯ること

記

事

赤烏 二三八—二三九 一六〇一

この年號に、司馬懿、公孫度を撃ち、これを斬る、魏景初—正始

大元 二五一 一六五九

司馬懿卒す。魏の嘉平

太平 二五六—二五七 二六五三

魏の甘露

永安 二五八—二五九 一六五一

魏の甘露

甘露 二六五 一六四五

晋の初世、即ち武帝太始元年で、この歳に魏亡ぶ

寶鼎 二六六—二六八 一六四二

晋の太始二年

天紀 二七七—二七九 一六三一

晋同帝咸寧

晉

博の年號 帝王 西曆(元年より其年號の終迄) 今年より溯ること

記

事

太康 武帝 二八〇—二八九 一六二一

晋はこの年號の元年に天下を統一し、吳も四世六十年で亡ぶ

元康 惠帝 二九一—二九九 一六一一

永寧 同 三〇一 一六五九

以上に據て見れば、右の博は後漢より三國に至り晋に及んでゐる。有紋博の幾何學的紋樣は正にこの時代のものであらう。この事實を以て滿洲の其れに比するに紋樣は互に相等しいものなれば、滿洲のものは、又この時代に屬すべきものであらう。而して頗る面白きは司馬懿の公孫度を撃ちし當時の

博紋様もこの中にある。されば滿洲の有紋博は、少なくとも晉より降らざるものであつて、即ち晉代を最終とし、尙ほ其れ以前に溯り得やう。

近時朝鮮平壤大同江の南岸に有紋博を組み立て作つた古墳の存在する事を知られて來たが、こは全く本文の有紋博と同一のものである。互に關係を有するものであらう。

(四)貝墓(貝殼棺) 貝墓とは土中に穴を穿ち、死體を埋め、其の上より貝殼を覆ひたるものを云ふ。此の種の墓は、主として旅順老鐵山下より大連に至るまでの各地に存在し、未だ此等地方以外に於ては之を發見したることを聞かない。

貝墓は私を以て見れば、全く石棺博棺等の略式であつて、其の存在位置、形狀、遺物との關係等は能く之を證明する。此の墓は地上にあらず、孰れも地下數尺に穴を穿つたもので(第十三圖)、其の穴の形狀は長方形を以て普通とする。

其の長さ及び幅は、博棺と異なることなく、即ち長さ八尺乃至一丈五尺位、幅六尺乃至一丈二尺位、深さは地下二尺乃至一丈位である。底は土を平均にし、其の上に死體を横たへ、多くは其の頭部と肩の近傍に副葬品を置き、其の上に貝殼を覆ひ、更に土を以て其の上を覆ひしものである。されど死體の部分に土の存在するものあれば、當時に在つては死體にのみ土を覆ひ、其の上部周圍に貝殼を覆ふたものゝ様に見ゆる。けれども死體の下に貝殼を敷いたものもないことはない、貝殼は主として蠣殼(*Ostrea gigas* Thunberg)であつて、其の地方の海岸より取つて來たものである。

當時、穴を發掘した際に、偶然地下の岩床に掘り當てた所がある。斯る場所は、其の岩石を人工で平らかにし、其の上に死體を横たへて居る。

私は此の種の墓を多く發掘したが、何れも一樣で、死體は一人又は其れ以上墓中に在つて、また殉死的埋葬である。此處より出づる遺物は、素焼土器、玉類、

銅器鏡・銅劍・銅鉞・銅鉞・銅鉞・銅鉞等にして、錢は五銖錢・半兩貨泉等である。此等は博棺・石棺等より出るものと相等しく同一民族、而かも同一時期に成つたものであることは明かである。

第十五圖は貝墓を發掘する所で、即ち其の存在位置に注意すべきである。此處は當時にあつては墓地であつたらう。十三圖は貝墓の中から貝殻を取り去りた跡の状態。十六圖は貝殻中に副葬品の存在する有様。十四圖は貝墓に貝殻の存在する所である。而して第十七圖は貝墓の五群をなして存在する状態を示したもので、古い穴は即ち一個の貝墓で、十八圖は貝墓の内部を示したものである。

(二) 住居跡

私は既に石槨・石棺・博棺・貝墓等に就て記載したが、抑も是等は何れも墓場に屬するものであつて、當時民族の生活状態を見る可きものとしては、稍々特別の種類なりと云はねばならぬ。然らば南滿洲には特別なる墓場以外、當時の生活状態をよく窺ふに足る可き遺跡があるか、之れ大に研究すべき事に屬する。

私の茲に墓場以外の遺跡と稱するは、即ち『住居跡』の事である。この遺跡にして今日に現存するものがあると、よく當時の生活状態を見ることが出来るものである。私は南滿洲各地を跋渉調査した結果、遂にこの住居跡を熊岳城外、熊岳河畔に於て發見することを得た。こは私が今茲に記載せんと欲するものが、即ち之れである。

熊岳河の北岸には多く博棺が存在する、此の棺中からは種々の遺物を出した。されば此處は當時にあつては墓所たるは明かである。然り而してこの北岸の河に最も接した所には其の住居跡がある、この二者は互に關係あるものである。

この北岸は常に雨水等の作用により崩壊なしつゝあつて、其の河崖は九十度の角度を呈する。されどこの崩壊作用は、吾人にとつて最も大切貴重なる事實を示すもので、即ちこの断面には當時の遺物を包含して居るのである。

第十九圖

此處に包含せられた遺物は、當時の生活状態を見る可きものであつて、よく住居跡の事實を示して居るものである。而して以上の遺物は地上から二尺弱以下に包含せられる。いま其の包含の状態を言ふと、第十九圖で見ることがよく、遺物は互に密接して存在し、包含せる遺物層の厚さは凡そ二尺許りもある。さればこの河岸の断面には二尺許りの遺物包含層があつて、其の上を二尺弱の土にて覆はれ居るものと云ひ得る。此の二尺弱の上部の土は、之れは遺跡を覆へるもので、即ち當時より現今に至るまでの間に、自然に覆はれたるものなれば、これは實に其の年代を示すものであらう。尙ほ語を變へて言ふ

と、當時より今日に至るまでの間に、遺跡の上に二尺弱の土を覆ふに至つたのである。以てこの遺跡が住居跡たることを知るべきである。

この断面に包含せられて居る状態は、即ち或所では石を並列せられたり、或所では不完全な竈場の跡らしいものがあり、或所では三尺許りの素焼の大瓶の存在するものもある、梯に登る私の頭上に見ゆる黒い影の所而して此處には木炭・灰等が散亂して居る。動物の角骨片があり、この動物は固より當時食料に供せられたものであらう。尙ほ有紋博・無紋博の破片、及び土器の破片等が多く包含せられ居る。

斯くの如き場所は、たゞに河崖の所のみならず、尙ほ温泉宿附近の、丘陵の崩壊せる所にもある(同圖B)は圖版に見るが如く、包含層の中央には、重圓の周圍に線を張つたる紋様の有紋博の破片が存在し、其の附近には土器破片・石片・骨片等があり、私は試みに此處を發掘したが、土器の破片を得る無數、其の他漢

の五銖錢三枚、銅鏃一個、銅の指環一個を得た。

住居跡に存在する以上の遺物は、他の墓場から出る其れと全く同一のものであるから、兩者はともに同一時代、しかも同一民族に因て残されたるものであることは明かである。

熊岳河畔温泉宿の主人の語る所によると、三四年以前此の附近から大なる素焼の大瓶を掘り出したが、其の中には五銖錢が充滿し、他錢は一も混入せなかつたと云ふ。而して私は今其の残つて居る五銖錢を見たが、何れも疑いのない漢の五銖であつた。

尙ほ旅順老鐵山下に甚だしく崩壊せる土城があつて、牧羊城と稱する、この附近丘陵を呈し、近く山東に面せる海に望み、風景最も佳である。此處に土器瓦等多く散亂し、尙ほ注意せば、五銖半兩及び銅鏃等をも得るのである。さればこの地、又明かに住居跡であつて、彼の夥しく其の附近に存在する博棺、貝墓

と關係を有するものである。而してこの古城のある所は又石器時代の民衆も住居したものゝ如く、同時代の土器、石器等をも存在する。加之、牧羊城の土壁を注意するに、其の土壁の中に土器、石片、骨片等が多く混入して居る。是等は何づれも石器時代の遺物に屬するもので、新しい遺物を混じない。之に因て考ふれば、この城を築かれたる年代も、略々推察せらるゝであらう。

以上の事實に據て考ふれば、墓場に葬られたる民族は、斯くの如き場所に居住したものである。されば石槨、石棺、博棺、貝墓等の墓場を研究せんと欲する者は、又以てこの住居跡にも注目せなければならぬ。

古墓其他より出てたる器物

私は既に墓所通常住居跡等に就て記載したが、さて次に注意すべきは是等の遺跡から如何なる遺物が出るかの問題である。而してこは考古學史學、人

種學上最も價値のある好材料たるを疑はない。是等の遺跡に存在する遺物は、主として土製物・金屬器類・古錢等よりなり、就中土製物の如きは、其の數最も多い。今是等の遺物に就て、左に比較的精密なる記述をなさう。

(一) 土製物

土製物はすべて素焼にて、其の質は餘り堅くない、色は鼠色を帯び、製造法は全く手捏ねでなく、既に轆轤を使用して居る。而して土製物の種類は壺・瓶・徳利形の物・皿・椀・盆・高杯等を普通とし、尙ほ小さな形状の物としては、人形・家の形・竈・厨子・家具・鶏の巢等の模造品がある。是等は墓所より出づるものが多いから、一般に副葬品として死體と共に納めたものであるけれども、住居跡にもまた斯くの如き土製品があるから、或特別の物及び小形の模造品を除く外のもの、は當時一般に行はれた日用器具の形状と見ても、敢て不都合はないのである。

以上の土製物の形状は實に支那古銅器の其れと全く相等しいものであつて、二者唯だ物質の土と銅と相異なるのみ。之に因て考ふれば、當時二者ともに行はれたもので、一般には土製物を使用せられ、上流社會或は儀式には銅製品を使用せしものであらう。既にこの事實の存在するとせば、従來學者が單に古銅器のみに注目し、絶えて土製品に向つて注意しなかつたのは、最も迂遠なりと云はねばならぬ。

然るに近頃、支那内地洛陽・長安附近の古墓からも盛に土器を發見するに至つた。この事に就てはラウフェル氏 (B. Laufer) は Chinese Pottery of the Han dynasty, 1909. を世に公にし、これを世に紹介せられた。この論文に據て見るに、其の發見土器は全く滿洲のものと同じであつて、少しも異なる所を見ない、さればこの點に於て、滿洲の遺物は又漢民族の手になつたものであるを知るに足るであらう。

羅振玉氏も洛陽よりこの種の土器を得られ、其の或部分はこれを東京帝室博物館に獻納せられた。第五十三圖に示したものは、即ち之れであつて、滿洲の其れと如何に類似するかに注意すべきである。

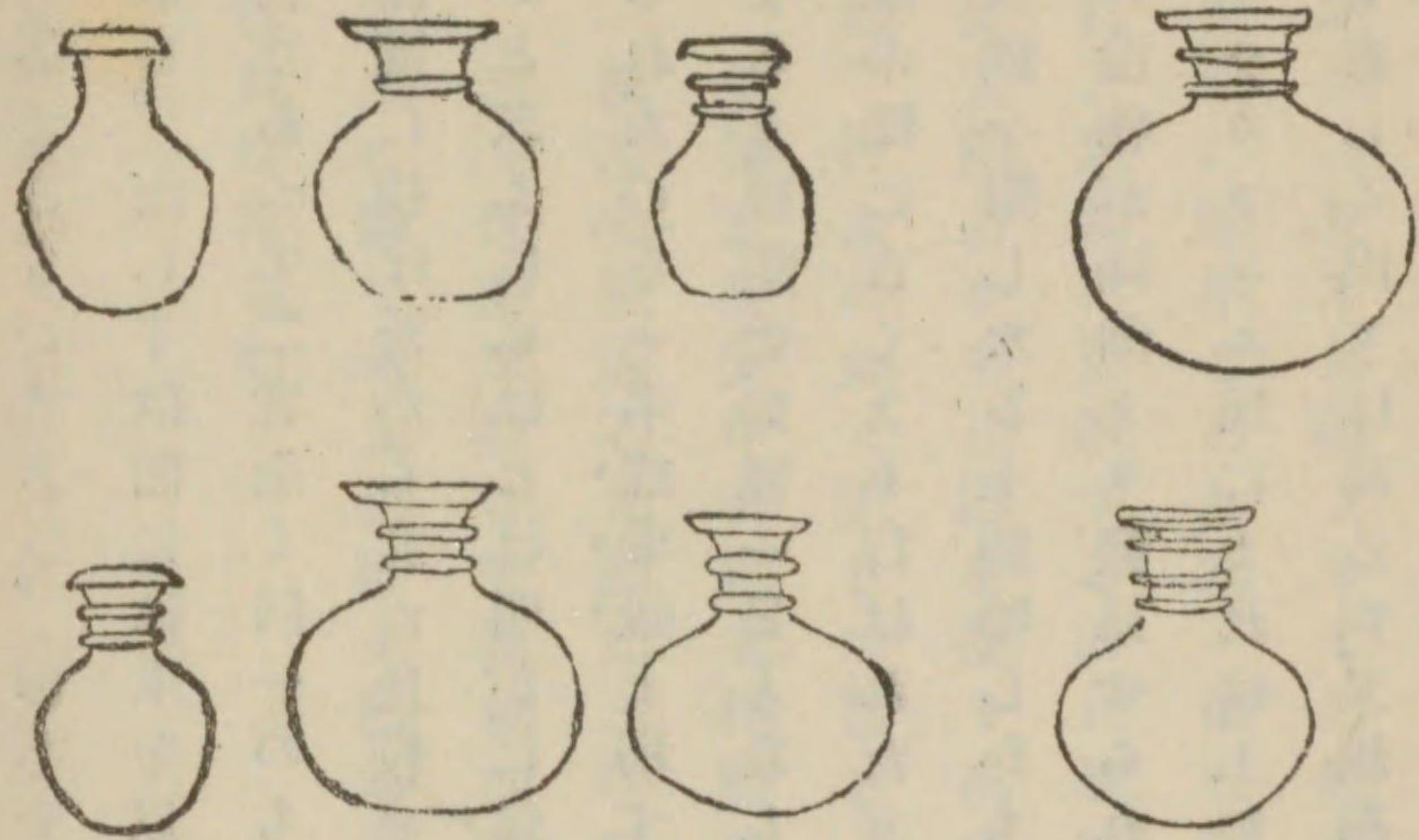
長安附近から土器を掘り出すことは、古くより知られた事で、即ち『古玩部雜錄』は左の如く記して居る。曰く

伯機云、長安中有耕者得陶器於古墓中、形如臥繭、口與足出繭腹之上下、其色黝黑、勻細、若石光潤如玉、呼爲繭瓶、大者容數斗、小者僅容數合、養花成實、或一云三代秦以前物、若漢物則苟簡不足觀也。

以上に據て考ふれば、土器等の存在状態も又滿洲の其れと類似して居ると云はねばならぬ。

(A) 獸環　こは(第三十三圖)旅順の貝墓から出でたものであつて、所謂獸環、

と稱するものである。即ち表面に二ヶ所獸面を附し、これに各々環を入れてある。而して獸面には朱を以て赤く塗る、この種の物は古銅器に特有なる形式であつて、二者全く同一のものである。古銅器の獸環は参考として第五十四圖に掲げたから共に比較せられよ。これに附せられた動物はいかなる獸類かと云ふに、私はこは明かに蟠夔ならんと考ふ、彼の古銅器に此の獸面の附せられたのを一名蟠夔壺と稱するはこれが爲めである。抑も蟠夔は『説文』によると「神魑也、如龍一足」となし、『魯語』には「木石之怪曰夔」と云ふとあつて、漢民族の間に、古くより行はれたる一種の傳說的獸類である。この漢民族傳說的獸類を附したる土製物、しかも一見寫眞にては銅器なるや否やを識別なし難い遺物が、滿洲より發見せられたのは何と注意すべき事ではなからうか。ラウフェル氏によれば、土製の獸環は支那本部長安の漢民族の古墓中よりも夥しく出ては居るが、又滿洲の其れと全く同一のものである。



有

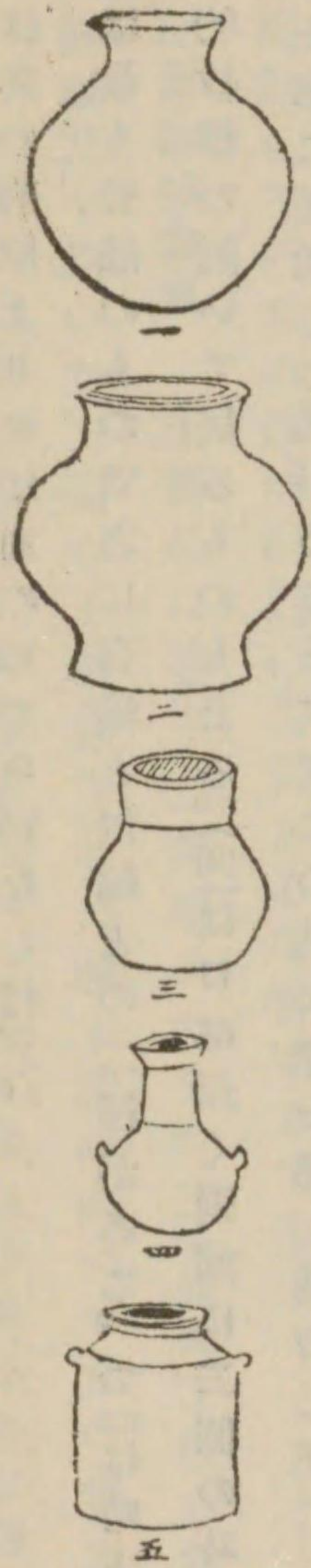
輪

壺

こゝに掲げた第五十四圖の土製獸鏝は、松村工學士の所藏品であつて、尙ほ之と同種類の物は、大連南滿洲鐵道會社に所藏して居る。後者も等しく旅順の貝墓から出たものである。

B壺瓶類 壺は前の蟠夔壺で見ることが如く、上部は長くなり、これに有輪のものと、無輪(第三十圖)の二種がある。是等はいづれも紋様なく所謂素壺である。されど時として下部に綱目こみめを附いて居るものもある。有輪は最も多きものは、其の數は三ある(口の邊を除いて)これが二輪—一輪とち

り遂に無輪となつたものゝやうである。この有輪壺は、又古銅器中に見る所のものである。壺類の中には、時として其の表面に線角等幾何學的紋様を附けたものがある(第三十七圖上段左、及下段左から二番目)こは有紋博の紋様と比較すべきもので、即ち漢民族の土器として最も形式の古きものである。而して是等の土器は、其の焼方何づれも赤褐色を帯びて光澤がある。されど素焼灰白色の土器と其の意匠形式等相等しいものであるから、互に同一系のものであることは明かである。圖版に示す二個の土器は、共に旅順の貝墓から出たものである。



壺の種類

壺は其の形状よりせば、左の如く分類なし得る。

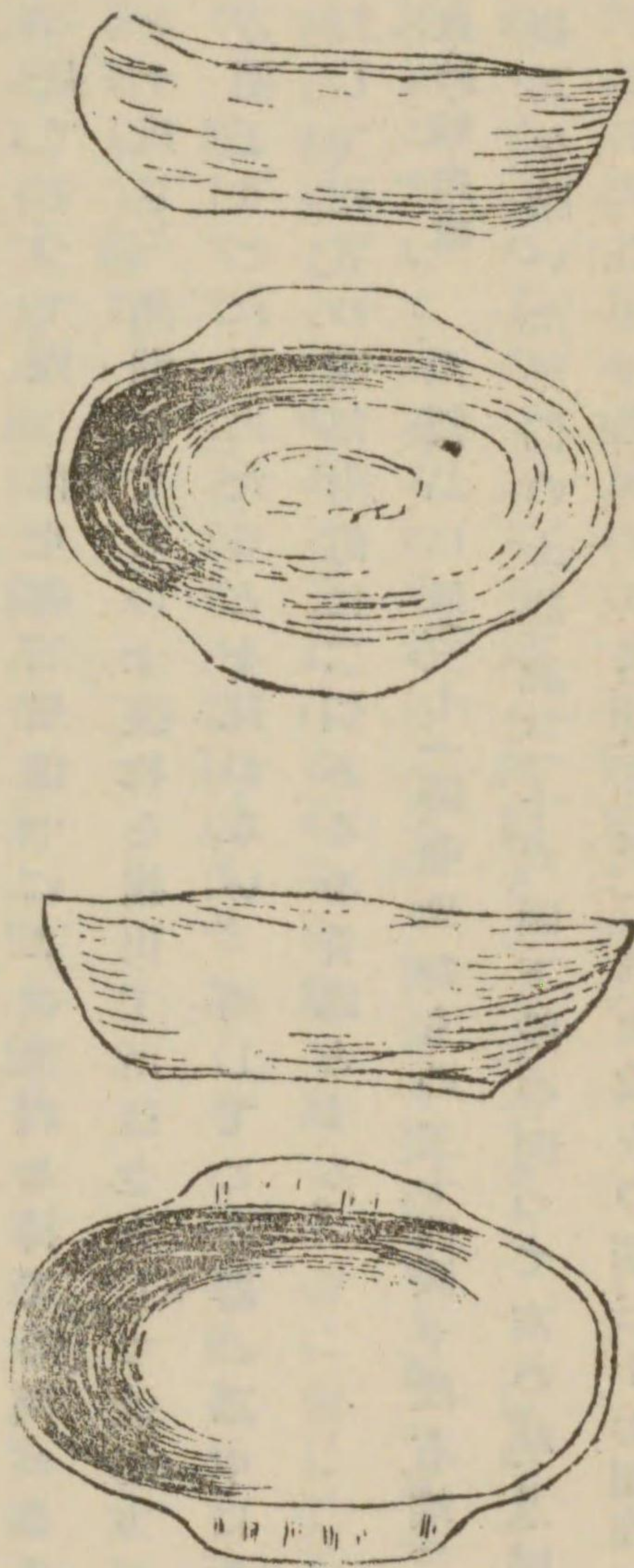
(一)は最も普通のもので、之に有輪と無輪との二種がある。(二)は時として幾何學的紋様の附いて居るものもある。(四)は口部長く胴部に二個の耳がある。(五)は上部に紐通しの孔がある、さればこの孔に紐を通し携帯に便にしたものであらう。而してこの(二)と(四)の土器は、鼠色でなく、常に赤褐色を呈し、土器面に光澤を有して居る。

瓶は主として、二十八圖の三個及び二十九圖上段の中央部にある様な形状を呈し、土器の中で最も大なるものである。時としてこの土器の外面に網目の跡がある。是等瓶の形式、網目を印せるが如きは、我が國古墳中から出る大瓶の所謂朝鮮土器と稱するものに類似して居る。而して尙ほこの種の土器は、蒙古の西翁牛特、英金河畔(老哈河上流)の鮮卑民族の遺跡よりも出た。これは大に注意すべき事である。

瓶類は胴部最も膨脹して居つて、無紋様であるが、或者はこれに網目の附いて居るものがある(第三十圖、二十八圖及び三十一圖の中央にあるもの)。

(C)德利形　こは上部は最も細長くなつて居り、(第二十七圖、三十一圖)上部や胴部に線の紋様を附けて居つて、胴部には小さな孔を各所に通ぼる。こは葬禮用に供した爲めに斯くなせしもの乎、この德利形土器の形状は、又古銅器にも見る所であつて、殊に山東省石壁畫中にこの德利を持てる圖がある。(四十圖)シャ氏(195)滿洲にてこの土製物を掘出す所は主として遼陽方面で、未だ旅順方面よりこれが出たことを聞かない。而してこの器の墓中にあるや概ね相對して、死者の頭部附近に二個あるを普通とする。

(D)皿・鉢・碗・盆類　土製品に皿(三十一圖、中央のもの)三十四圖下段右端、三十二圖下段屋根瓦を除いた三個の土器、鉢(二十六圖)下段の向つて左の端、及同二十五圖向つて左三十二圖上段の右の端、碗(三十二圖)上段左の端、三十七圖左の端等の



皿の形判小るあ手取

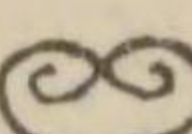
種類があり、共に飲食を盛つたものである。盆は圓形・四角形のものがある、而してこの皿の中に小判形で兩側に取手の附けられたものがある、(三十四圖)上段向つて右の一番目・二番目及び下段の中央のもの(これは左の圖にあるもの)が之で、この器の内部の表面には鳥・獸・魚等を附け、又大吉の文字を現はすものがあるが、以て漢式たるを知るべきである。斯くの如き小皿は彼の武梁祠其の

他の石壁畫中、盆の中に數枚これを並べ置ける所がある(四十二圖)武梁前石七尙ほラウフェル氏によれば之と同一なるもの長安の古墓中よりも出て居る。小判形皿中に、三十六圖下段中央に在るものがある。この皿の中に畫かれた類鳥は明かに鳳鳥で、この畫様は山東省古石壁に圖すると全く同一である。

以上の脚の附けられた鉢を注意するに、其の脚はもと熊の形狀より變化したもののやうである。是等は古銅器類に於ても認めらるゝ所である。

(上)鼎 土製の鼎である、(三十一圖)左右に兩耳が付き、胴を三本の細長い脚で受く、無紋様この形式又古銅器の其れと同一ではないか。これは旅順の貝墓から出たものであるが、尙ほ遼陽の棺中からも一個出た、即ち古銅器の其れと同一ではなからうか。武氏石室祥瑞圖中に鼎がある、全く等しい形である。而してこれを使用する圖は山東省古石壁畫にある。即ち共に第四十二圖に

示した。如何に互に類似するかを見るべきである。

(F) 匱壺　こは偏平な匱壺であつて、此の土器は他の物と異なり(第二十六圖下段向つて右より二番目)表面を研磨し光澤を帯びて居る。而して、或者はこれに  斯くの如き沈紋を附けて居る。この紋様は『西清古鑑』にも存し、匱壺特有のものに屬する。匱壺は今底に臺があつて坐りをよくするが、昔は無かつたであらう。日本の保止支の如きは蓋し斯る形状の原形を存するものであらう。この匱壺の古形は遼陽の小石櫛中より出た。

尙ほ羅振玉氏より博物館に獻納した洛陽發見古土器に、この器がある(五十三圖右)こは明かに滿洲のものに比較すべきものである。

(G) 登(瓦豆)　こは土製高杯、即ち登或は瓦豆で、上部に臺があり、之に蓋を設け、臺の下部に三角形又は圓形の孔を開けて居る。(第二十九圖上段右より二番目は登の破片下部)ラウフェル氏によれば長安よりもこの瓦豆が出た。而

して『事物紀原』の「豆」の條によれば、又曰、夏后以揭豆、注云、揭無異物之飾也、凡造物之初、未始不本於撲素、後王以爲未足、以致誠敬、故因之加文焉、則豆無異飾、初爲其器也、豆疑始於夏后氏也」とある。尙同書、籩登の條にも、爾雅曰、竹豆謂之籩、瓦豆謂之登、蓋二物取法於豆而製也、豆疑始於夏后氏也」とあるまさに之である。

この瓦豆は、日本及び朝鮮の古墳よりも出るが、こは元漢民族の其れより傳はつたものであらう。ラウフェル氏の論文は、私と同一の意見を發表せられて居る。

(H) 豚形陶器　こは一見、日本に行はるゝ彼の蚊燠かぶすぶと等しい形状を呈し、口は一個所にあるのみである。而して其の口胴部、四つの脚及び把手の尾に似たる點より、こはいかにしても豚の類を模したが如き感がある。(第二十六圖上段向つて右より一番目・二番目の二個)これに因て考ふれば、蓋しこの土器はもと實際に豚の形状を模したもので、これが段々に斯くは變化したものであら

う。

(I)博山鑪・第二十二圖に圖する土製品は、即ち所謂博山鑪であつて旅順の貝墓より出たものである。斯くの如き土器は尙ほ遼陽からも一個出て居る。(四三十四圖下段向つて、左より二番目は其の蓋である。)

この器の臺は高く、蓋はピラミッド形を呈し、山の形を現はして居るとは、從來の説であつたが、之をよく注意すると山形ではなく、全く植物の花實を模したものである。中で香を焚いたものか、蓋に孔がある。銅製博山鑪は支那内地より發掘せらるゝもので『西清古鑑』によれば、この器に就て左の如く記して居る。曰く

漢博山鑪、右通蓋高六寸八分、深二寸七分、口徑三寸四分、腹圍一尺二寸九分、重四十六兩、周禮天官冢宰之屬官人凡寢中共鑪炭、乃三代之製而其器弗傳、按東宮故事、洞天清錄、西京雜記諸書、博山實始於漢、今詳此器、分三層、蓋爲山

形、下爲承盤、此劉向名銘、上貫大華承銅盤者是也、補筆謂防鑪熱灼席則爲盤、薦水以漸其跡、今按盤底有孔、非可貯湯、使潤氣蒸香、以象海之回環者不然也。

『事物紀原』によれば、博山と題し、左の文がある、曰く

黃帝內傳有博山爐、蓋王母遺帝者、蓋其名起於此、爾漢晉以來盛用於此。

されど『石索』の武梁祠壁畫中『祥瑞圖』があり、この中の最初に蓮臺がある(四十三圖シャ氏³¹)は正しく發掘の博山鑪に類似するものである。而して尙ほ面白いのは、其の次に圖する「神鼎不炊、而沸五味自生」と附記し、鼎の形があるが、この鼎又發掘品と同一である。果して然らば、この博山も又當時の祥瑞品の一として數ふ可きものであらう。武梁祠畫中のもものは第四十三圖の如きもので『石索』はこれに附記して「浪井、下有缺文、按宋書符瑞志、浪井不鑿自成、王者清靜則應、此井下缺文或即此也、其上一人手拊蓮臺、下一人執物如歛足履方石、俱磨泐未一辨井所在也」とある。滿洲發見のものは、これと最も類似して居

る。されば滿洲のものは彼の博山鑪ではなくて、斯くの如きものをた作つものであらう。

武梁祠畫等の中に又第四十三圖の如き樹木の畫き形をして居る。(四十三圖シヤ氏 106・108・178・63)これが器具となれば滿洲發見の如き土器の形狀となるであらう。されば滿洲のこの土器は蓮花の如き草花の形を現はしたものであらう。

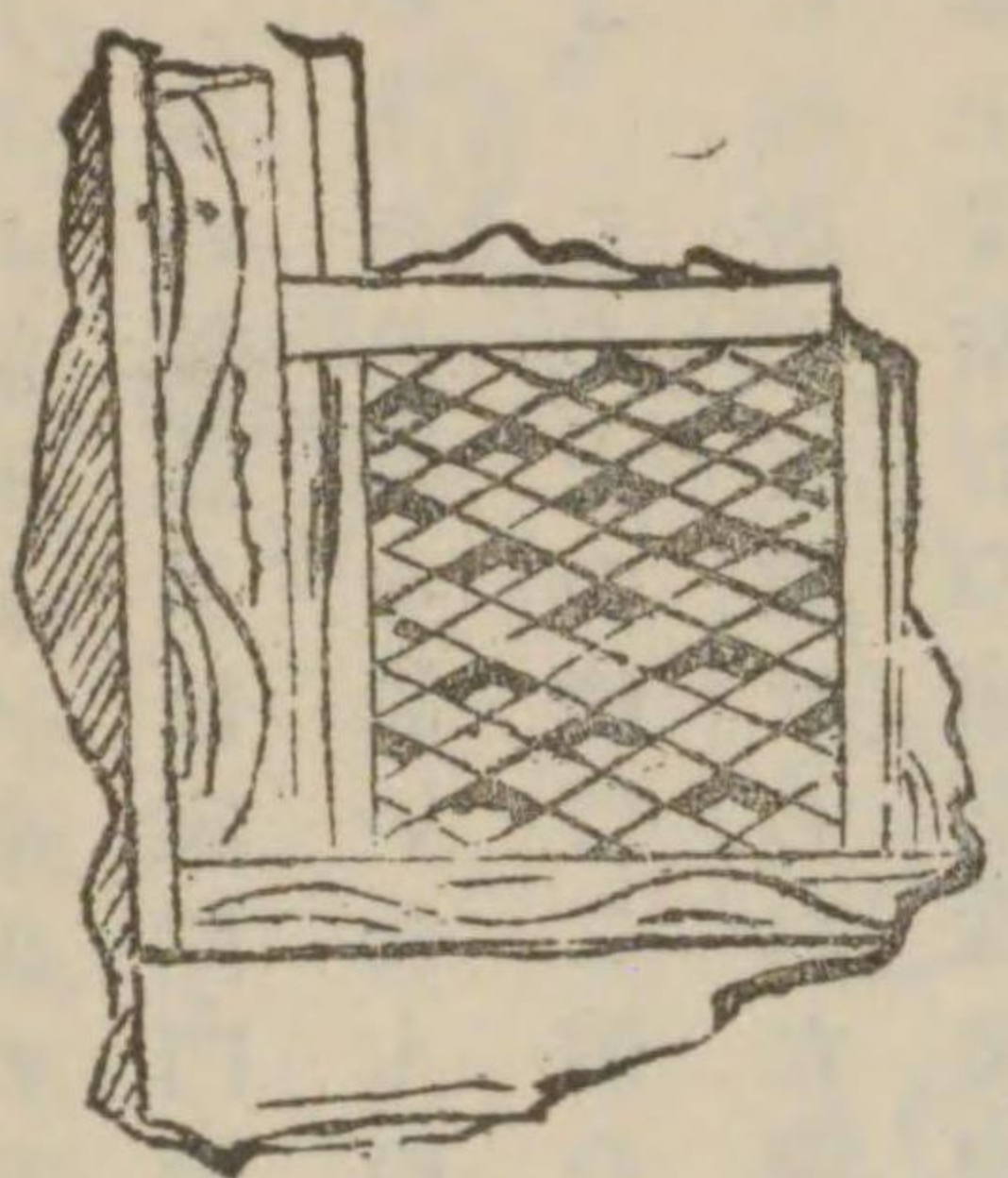
(J)斗鏝 即ち當時の斗量も出た。これは第二十六圖、上段向つて左の方のものである。これは古銅器中多く見る所のものであつて、三脚はもと熊の形から變化したものであらう。

(K)銚子 第二十三圖の土器がこれで、これは把手の表面に幾何學的紋様を附しあり、この形狀又古銅器の中に見る所である。『事物紀原』の銚の條に「廣雅曰銷謂之銚、說文云、溫器也、曹操上獻帝表曰、臣祖騰有順帝賜純銀粉銚、疑漢人始

爲之也」とあるは、之であらう。

(L)模造品 古墓に納めた土製物の中に種々の模造品がある。是等は主として日用品及び裝飾器、家屋等を模したものであつて、又人形、鳥類、魚類等がある、而して是等の模造品は何づれも小さな形狀に造つて居る。

模造品の種類を、尙ほ精しく列記すると、先づ人形がある。これは旅順の貝墓から出たものであつて、僅かに首都のみ存し、他は破損してない。頭髮の形狀よりせば、漢人の風を呈し、髪を頭上にて束ね、これに笄の如きものをさして居る。彼の山東省武梁祠等石壁畫中の人物の頭髮は、これに似たる所がある。(人形及び塀の圖は明治四十二年三



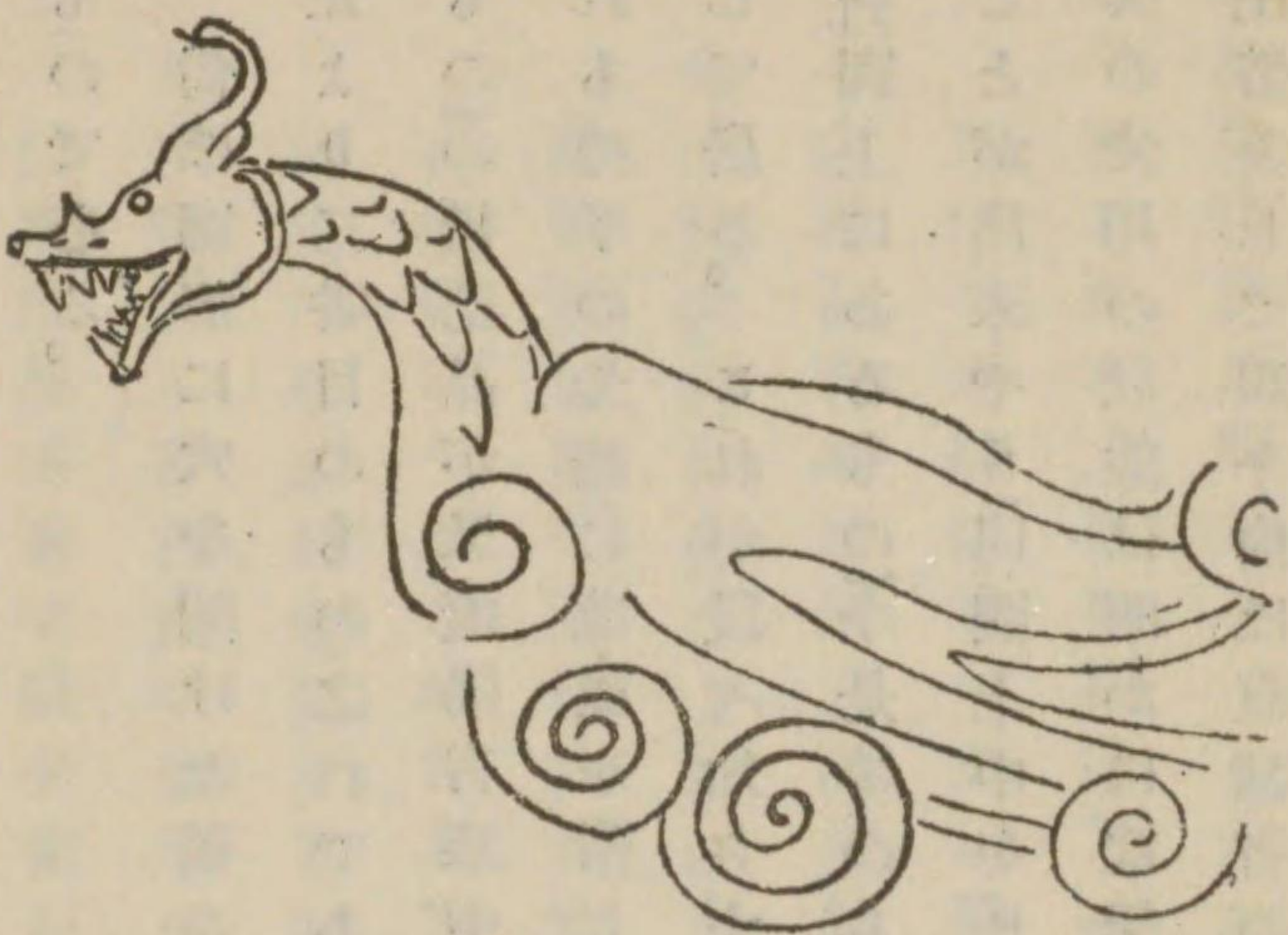
月六日、滿洲日々新聞の圖に依る

家の模造品は家屋門壁垣塼鶏の巢等があつて、遼陽から出た物の如きは壁の上に鳥類を置いたものがある(三十四圖上段向つて、左の門の如きものを見よ。この上の傍に二個の鳥が置かれてあつた)其他家屋の附屬物たる座敷に接近して設けられた竈場の模造品があつて、この上に種々の鍋釜(二十九圖上段左右の端、下段向つて左の一個を除いた)總ての土器及び三十四圖下段等を置いてある。こは旅順、遼陽等からも多く出た。家屋竈場の模造品實に當時の風俗の一般を窺ふに足るであらう。而して斯くの如き模造品は尙ほラウフェル氏によれば、長安の古墓中からも發見せられ、しかも全く同一形式のものに屬する。近頃東京帝室博物館に、清國羅振玉氏より、洛陽發見土製竈場の模形を獻納せられたが、こは第五十三圖中央に圖するものゝ如く、即ち滿洲の其れと全く相等しいものである。以上の模形品は、武梁祠等畫中第四十

三圖武氏石室十石左右一に見ゆるものと同一であつて、全く之れに模したものであることは明かである。

二脚の机の上に魚を置いた模形品がある。また長方形の盆中に魚を入れた模形品が

431 氏ヤシ



481 氏ヤシ
式形の首龍の魏漢

ある。(第三十六圖中央のもの)是等の魚の畫き様器具の形狀は古銅器、武梁

祠畫中等に存在するものと同一である。

想ふに、この風習はもと實際の魚を死者に供したが、遂に斯くの如き模形で代用する

につたしものであらう。而してこの二個の模造品は、共に遼陽の石棺中より

出たもので、其の机上魚を供へたものは私の親しく石棺を發掘し、これを得たものである。

尙ほ圖形に穴を開けた鶏の巢の模形もある。これは第二十六圖上段向つて左より二番目のもの之れである。龍杯(三十八圖中央のもの)鳳杯(同下にあるもの)の模造品が又遼陽古墓中より出た。其は圖するもの之れであつて何づれも把手の先端に龍鳳を附して居る。この龍鳳の形式は當時のものと同類して居る。これが段々知らず識らずの間に、省略變化せられたるものがある(同圖上にあるもの)今是等のものを取て比較するに、よく上の變化の跡を窺ふことが出来やう(同圖上中を比較せよ)。この形狀また銅器にあるのみならず其の使用の状態は明かに武梁祠畫中にある。(四十二圖)加之、この龍杯、鳳杯は土俗として現今尙ほ直隸省の山村等に木製の其れを使用して居る。果して然らば、これは土俗學上尙ほ生命ありと云はねばならぬ。

滿洲龍杓の龍首の形は魏漢の其れとよく類似して居る。今茲に漢魏に行はれた龍首の形式を示したから、これと比較し、二者のいかに類似するかを見るべきである。『事物紀原』の「三勺」の條によれば、左の如く記して居る。曰く又曰、勺、夏后以疏勺、商以疏勺、周以蒲勺、蓋龍疏蒲勺飾也、後王加文耳、然則勺之興、當有虞始創之、故無飾也、至夏后、加龍以飾之。

尙ほ同書「杓」の條によれば、曰く

禮明堂位曰、勺、夏后氏以龍勺、推之以考、蓋前有制矣、有夏始加以龍飾杓、卽勺也、祭祀曰勺、民用曰杓、其實一也、或以勺之所容不過升勺、命之、而杓則加廣其所受、皆取酌焉、遂異其名制也。

その他、厨子、長櫃、燈明臺等がある。厨子は長方形を呈し、二枚の開き戸がある。長櫃は長方形で被せ蓋を有し、其の底には數本の鋌釘を打つた様にして居る。燈明臺は高杯形で武梁祠畫中にあるものと同じである。尙ほ四角形

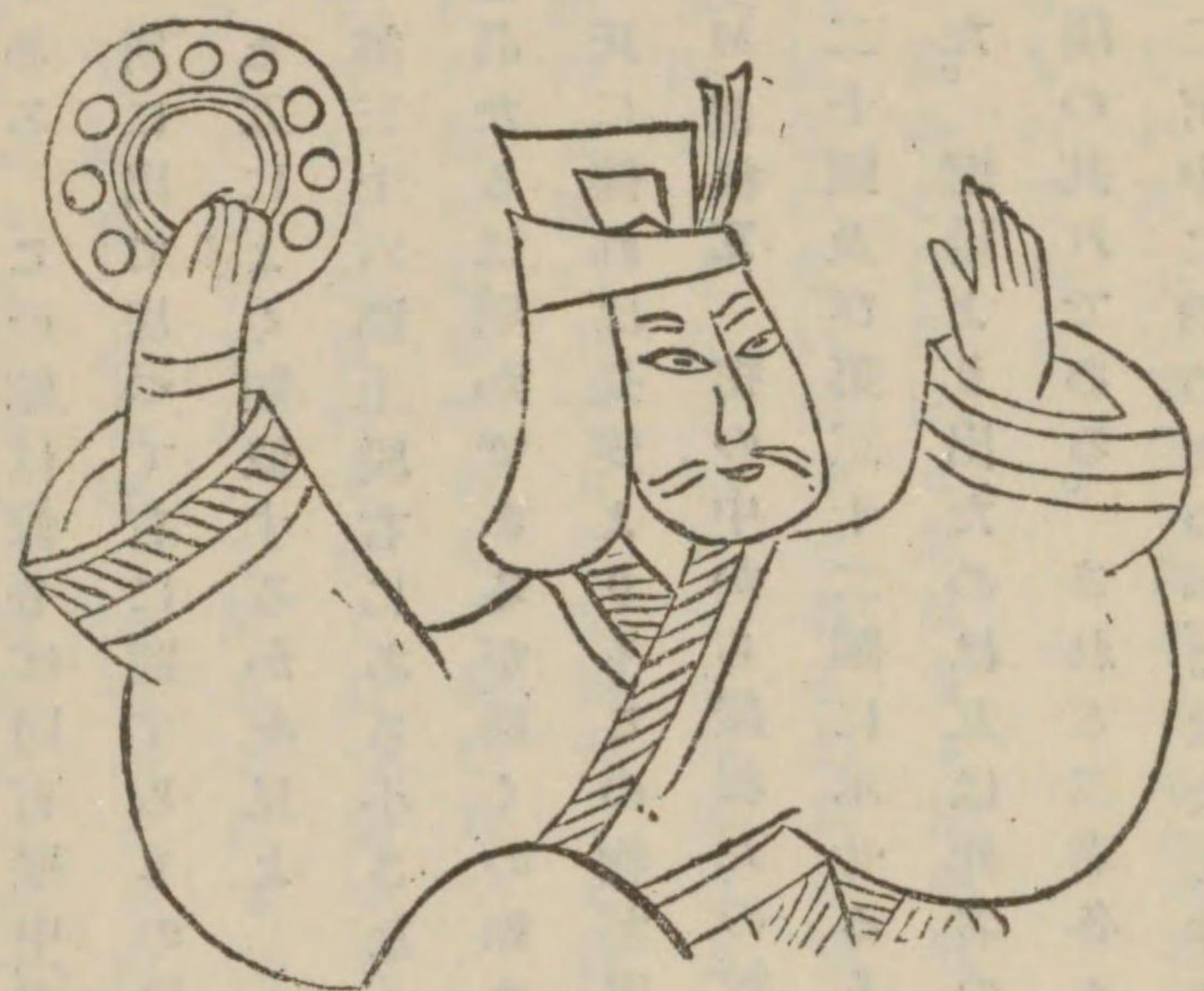
の土盆があるが、其の上に小さな器物を數個載せたものがある。最も小さな器具は頗る多く、これは死者に供へる爲めに造つたるものであらう。

竹木の先端に一個の車の形を附けたものがある。これは旅順の貝墓より出で、現に大連の南滿洲鐵道會社の所藏に屬する。これは又ラウフェル氏に従へば、長安の古墓中からも出て居つて、これは明かに當時の玩具であつて、小兒の遊具として使用したものゝ模形である。これは又武梁祠等の畫中にあり、當時一般に行はれたものである。(第四十二圖中の孝子畫像を見よ)

其の他色々の形状の物もあるが、何れも實物の模造品であつて、死著と共に埋葬したものである。されど是等の模造品は、當時行はれて居た器物の一般の形状より、さては其の風俗の大體をも見ることが出来るから、吾人の最も參考に供すべきものである。

第三十四圖下段、右より二番目に偏平な圓形の土器がある、これは何物かを模

造したもので、中央に小さな孔があり、之を中心とし其の周圍に四花瓣を附け、



荆軻秦王を刺す圖

更に其の餘白の所に點々の紋様を附けてある。この紋様は三十二圖第五十一圖頭飾の形状、及び第四十八圖花瓣形環と形状同一である。而して之と同一なる模造品は、ラウフェル氏に従へば、長安の古墓中より出た。この上器は何を模し、と如何なるものを使用したかは明かでないが、山東省古石壁の畫中、闘せる人物の手に圓き環を持ち、一方の人物に投げ付けんとするもの

がある。この圖は假令ば同石壁中「滿相如趙臣也奉壁於秦」及び「荆軻刺秦王」等の所に出て居つて、右に圖するものは即ち、其の後者である。いかに滿洲のものと同互によく類似するかを見よ。

第三十六圖、上段右にある小さな土製物は、何に使用したものか。固より模造品たるは明かであるが、斯くの如きものは尙ほ多く出た。而してラウフェル氏に據れば、長安よりもこの物が出て居る。

(M)屋根瓦 棺の中から屋根瓦の紋様ある所を打ち缺いたものを發見した。第二十圖及び第三十二圖に示せるものが之れで、これは遼陽旅順で都合二個を見た。遼陽より出たのは、瓦は死者の頭部の傍にあつた。茲に掲ぐるものは遼陽の其れである。されど二者各々其の紋様を同じくして居る。瓦を何が故に棺中に納めたのか、これは大に注意すべきことに屬する。

この瓦は全く漢魏式であつて、即ち其の紋様は先づ四つの區劃を設け、其の中に各々相對して、先端の卷ける曲線を以てして居る。彼の『石索』卷六に圖せられた「大宮宇」・「萬有喜心字」の如き文字のある古瓦は、又この形式に屬するものである。

當時の住居跡と思はるゝ旅順、牧羊城附近から屋根瓦が出る。何れも正面の紋様のない部分であるが、其の完全なものに就て云へば、色は鼠色、素焼で、長さ四尺七寸五分、幅六寸七分、厚さ五分で、裏に布目の跡がある。この瓦は尙ほ撫順の丘陵の上でも之を得た。これは明かに當時のものであつて、棺中に納められた他の部分であるや疑ひない。是等の屋根瓦は、彼の高句麗の其れと比較するに、其の質最も軽く且つ薄手である。然るに高句麗のものは、これに反し質重く厚手を呈して居るこれで、二者の相違して居ることを知るであらう。

(N)陶器 南滿洲の棺槨中より出る器物は、主として土器(瓦器)に屬するものであるが、また稀れに陶器の存在することがある。この事實は遼陽に於ても